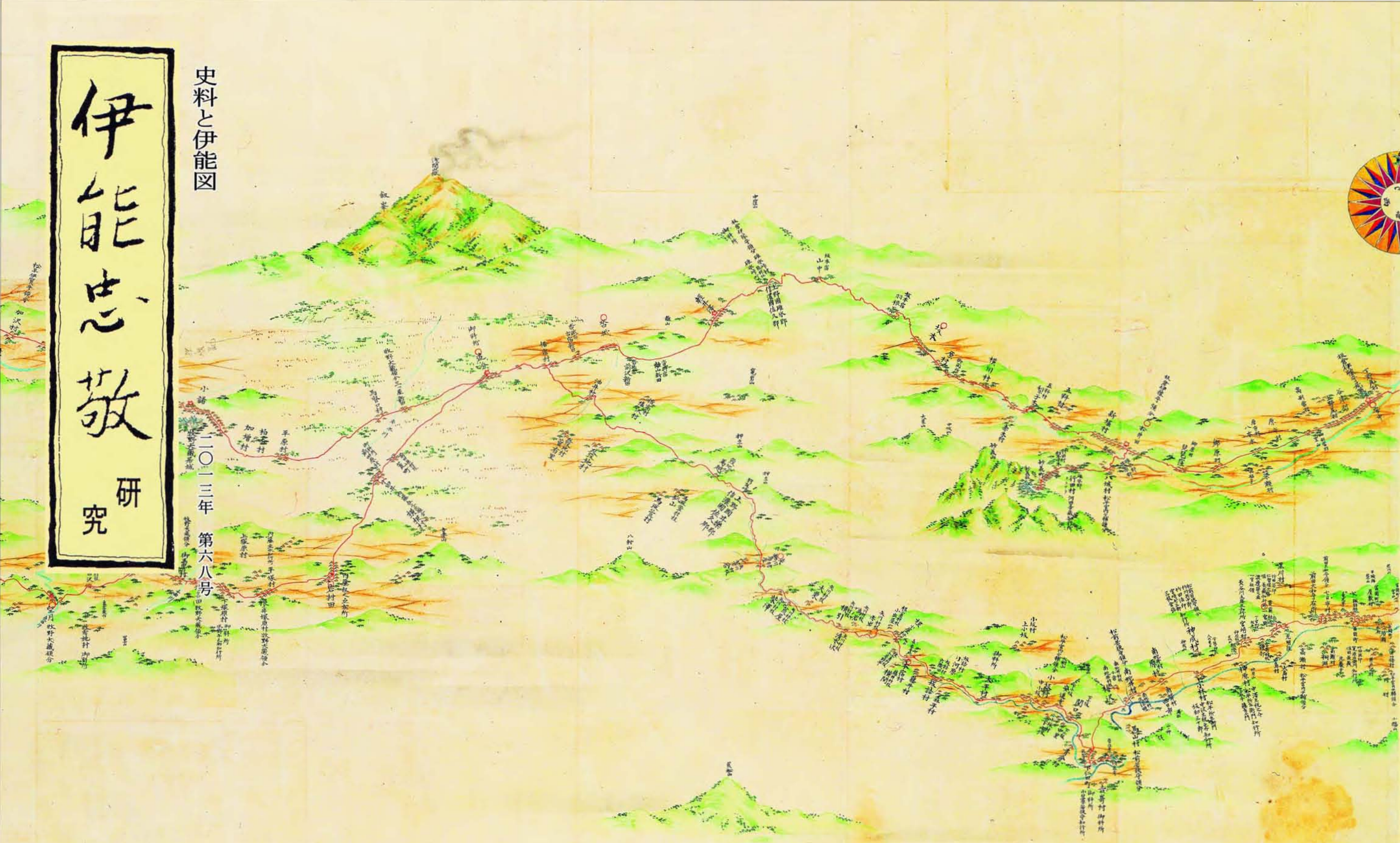
伊能忠敬研究

史料と伊能図



二〇一三年 第六八号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS
No.68 2013

表紙解説

伊能大図95号部分　浅間山付近

（国立国会図書館蔵。「完全復元伊能図」より）

伊能忠敬測量日記第五巻に、享和二年の項に次のような記録がある。

十月十四日　朝より晴。六ッ頃小諸城下市町出立。本町、与良、松井町。城下外　それより松並木あり。右五、六丁千曲川。加増村（三〇軒、家は遥に左にあり）。柏木村（一六〇軒）。平原村（一六〇軒）。馬背口（ませろ）村（一二五軒）。右田地一里余。秋葉山へ二里ばかり。其間、田地又原、三ッ谷新田（馬背口村の内、濁川流、血川と云。小諸より三里半）。追分宿（御料所、二〇〇軒余、是より中山道）。休宿。本陣　市左衛門）。それより借宿村（四〇軒、外新田共八〇軒、追分より一里三丁）。沓掛宿（一六八軒、前に古宿新田あり。後に前沢新田、離山新田有）。右原又田地（沓掛より一里五丁、合五里二六丁）。軽井沢宿。七ッ前に着。止宿

本陣市右衛門。此夜曇る。晴間に測る。（此夜、碓氷峠熊野権現社人共、見舞に来る）。

同十五日　朝は晴。六ッ半頃軽井沢出立。碓氷峠を上て、熊野三社権現の社前に至て諸山を測量す。此所則信州・上野州の堺。信州佐久郡の終。上毛は碓氷郡の初なり。権現の社家も、信州地内に二〇軒、上毛地内に二〇軒、合四〇軒、社家町と云う。除地なり。信州地は御料所、上毛地は安中領なり。本社の中央を界とす。両国の社人、除地界より除地界まで案内す。それより山中茶屋（坂本宿支配一〇軒。茶屋本陣、丸屋六右衛門へ休）。羽根石茶屋　（茶屋四軒、本陣小池小左衛門にて休。軽井沢より二里半一六丁二七間）。坂本宿（一七〇軒）。休宿（本陣、三郎左衛門）。坂本入口に遠見の番所と云あり。往来の人を改なし。

それより原村（横川村枝郷五三軒）。横川御関所、横川村（七四軒）。五料村（二五軒）。新堀村（二一四軒。松井田へ続。坂本より二里十五丁、合五里十三丁二七間）。松井田宿（二〇二軒）。六ッ頃に着。本陣止宿　駒之丞。此夜曇天。不測。いまでは、道筋も定かではない旧碓氷峠を伊能隊はこのように測進した。

また、妙義山へも測線が伸び、沿道が美しく描写されているが、これは九州へ向かった第七次測量の往路、文化六年八月十三日に測られたもの。忠敬本隊は無測量、坂部支隊が先発し妙義山追分から仁王門前まで測ったあと、合同し諸堂拝観して松井田に八つ半頃戻った。

渡辺一郎（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

国土地理院ポータルサイトより浅間山附近

目次　68号

グラビア
● 伊能図の旅
中図第三図より　飛島・粟島　星埜 由尚　1
大図第一一七号より　伊勢
大図第一三二・一四〇号より　新宮から潮岬

話題
● 史料解読　高橋（景保）御用日記（三）　安藤由紀子　6
● 伊能忠敬史跡巡り　伊能三郎右衛門家墓地　伊能 楯雄　13
● 地域史料　対馬藩宗家文庫『測量御用記録』続　入江 正利　17
● 伊能忠敬 周辺の人①　会田算左右衛門安明（付）会田安明の史跡を訪ねて　前田 幸子　22
● 伊能忠敬金沢測量三日間の謎　河崎 倫代　28
● 長崎からの書状　柏木 隆雄　35

忠敬談話室
● シルバコンパスで　伊能忠敬の測量を体験してみよう　菱山 剛秀　37
● 伊能測量漫筆（二）　測量風景図を新発見　公表を熱望　他　渡辺 一郎　41
● 伊能家のお稲荷様　前田 幸子　42

資料
「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第五回
伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版
渡辺一郎監修・井上辰男編著　43

ニュース・お知らせ　編集部　53
各地のニュース・出版物紹介・会員便り・投稿要領一部改訂ほか
表紙解説　渡辺一郎（表紙裏）

伊能図の旅

伊能中図第三図より

飛島・粟島

日本海の離島　飛島・粟島

日本海には、佐渡、隠岐など大きな島以外に、粟島、飛島と言った羽越の沖に浮かぶ小島がある。伊能測量隊は、これらの島には渡っていないが、対岸の本土から交会法を用いその位置を決め、大図にも描かれている。

享和二(一八〇二)年九月、第三次測量において羽越の海岸を測量した伊能測量隊は、象潟地震前の象潟を測量し、日記には、象潟諸島を測ると記している。日記には記述されていないが、海岸から飛島は望見することができたのであろう。中図には、象潟の前後の各所から飛島に向かって方位線が引かれている。大図には、飛島と男神島と二つの島が描かれているが、中図には飛島のみが描かれ、島に男神の注記がついている。地形図を見ると、飛島はひとつであるが、御積島ほかの小さな属島が多数ある。これらを別の島と見たのであろうか。日記には、「此海中に飛島あり。八九里と云。庄内領。勝浦村、中村、法木村、合三ケ村。家二百軒余ありと云。」とある。

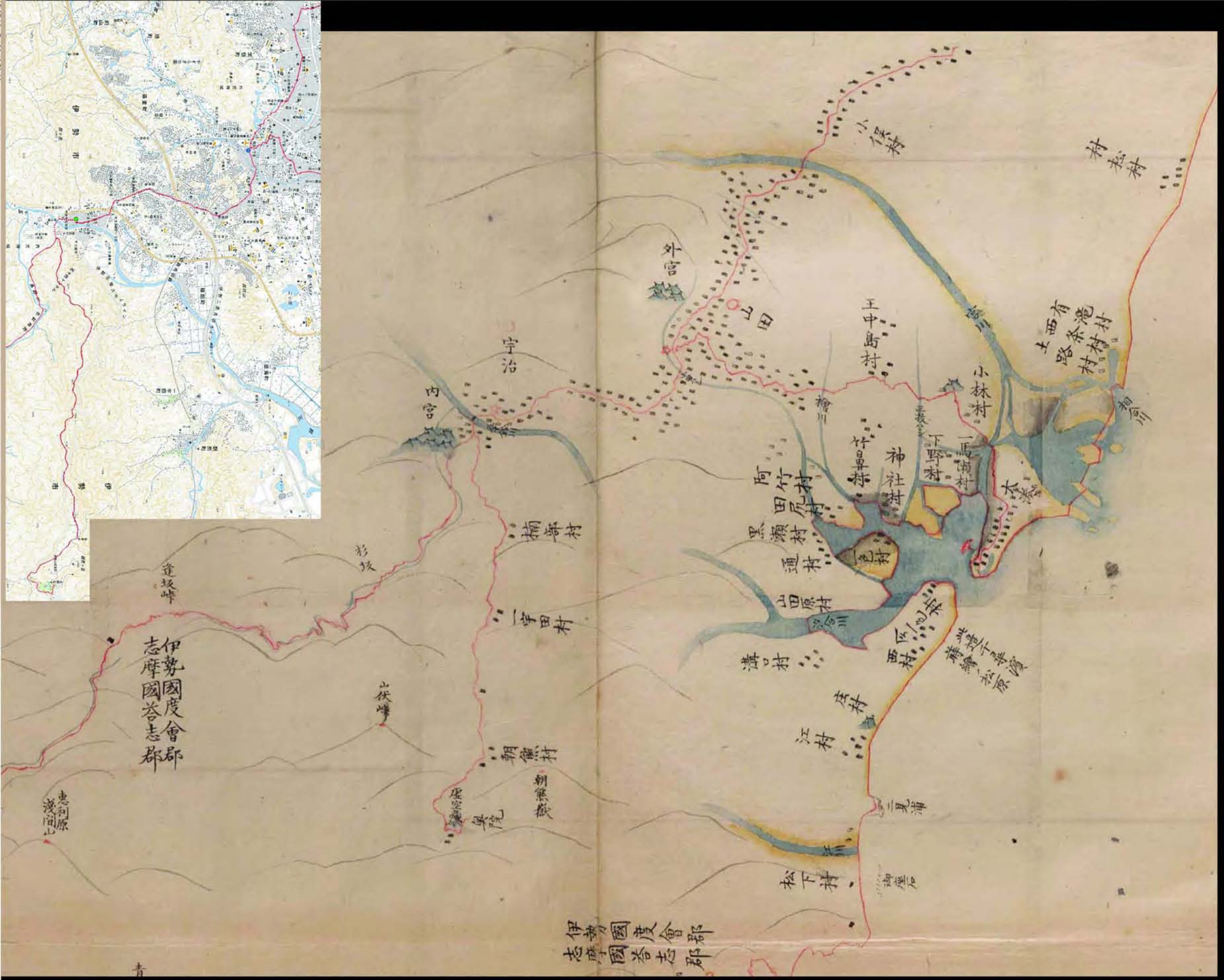
粟島も対岸から島の高所を狙って交会法により位置を決めている。日記には「此辺海中に小島あり。粟島と云。長三里、横(乗越)一里のよし。則粟島村に而前後二ヶ村。家数、寺二ケ寺、社家一軒、合百十軒斗り。御料所米沢預之内なりと云。」とあり、島の大きさを実際の約二倍(面積にして約四倍)に見ているようである。大図には、細長い粟島が描かれており、地図上でも実際の粟島より大きく描かれている。現在の粟島は、集落が二つあり、人口も約四百人で、伊能測量当時と余り変わっていないのではなかろうか。(星埜)

上：伊能中図第３図の部分（日本写真印刷㈱蔵）

右：国土地理院電子国土地形図と伊能測線の重ね図
（東京カートグラフィック株式会社猪原氏作成）
赤破線は測線、色丸は宿泊地

大図第一一七号より

伊勢



上　：伊勢　大図第117号の部分（陸軍模写、アメリカ議会図書館蔵）
左上：国土地理院地形図と伊能図測線の重ね図（東京カートグラフィック株式会社猪原氏作成）
赤破線は測線、色丸は宿泊地
いずれも右が北

伊勢の神宮

伊勢の測量は、第五次と第六次の測量で行われた。第五次測量では、松阪から山田へと伊勢街道と伊勢湾の海岸線を測量し、内宮・外宮に参拝している。第六次測量では、大坂から法隆寺、當麻寺、吉野などを測量し、名張から初瀬街道を測量して松阪に出て、文化六年元旦に神宮に参拝した。このときは、一同麻上下を着し、威儀をただして内外両宮を参拝している。御饌を忠敬が一膳、坂部、柴山、下河辺、青木の四人で一膳、両宮の神前に捧げた。年の初めに伊勢の神宮に詣でるというのは、江戸時代の人にとっては当然のことであったのだろう。松阪からわざわざ元旦に合わせて神宮に向かい参拝しているのである。

第五次測量では、伊勢街道と海岸線は、測量隊を二つに分け、並行して測量している。白子村、上野村、津城下、松阪町、上野村、小俣駅と止宿して外宮の町山田に到着するが、上野村に、内宮の御師が菓子を持って訪ねてくる。内宮会合所の役人と山田に室町時代から続く自治組織山田三方の役人が挨拶に来て、人馬の手当に差し支えがあるといけないので止宿先に相談して、酒手を少々遣わして欲しいと言う。伊勢の暦師も尋ねてきて、両宮神領での人足・馬の手配を依頼している。暦師が人馬の斡旋をしていたようである。山田では、測量の傍ら山田三宝の役人や暦師などの訪問が多く相当多忙である。その間に外宮に参拝し金百疋をお供えする。この間に御師との贈答のやりとりなどもあり、暦師の団体からの菓子、肴の煮付けの重の贈物があった。このように多忙な中でも、夜間には木星の衛星の凌犯を観測している。

宇治に移り、内宮に参拝し、内宮長官の代理、暦師、御師の挨拶や贈答を外宮と同じようにやりとりし、暦師との暦談を行っている。金百疋をお供えしている。忠敬は多忙であったが、測量隊は、この間も伊勢湾の海岸線の測量には怠りなかった。

本年は式年遷宮の年である。（星埜）

大図第一三二号・一四〇号より

新宮から潮岬

左：新宮から潮岬（大図第132号及び140号の部分を接合）
（陸軍模写 アメリカ議会図書館蔵）

下：国土地理院電子国土地形図と伊能測線の重ね図
（東京カートグラフィック株 猪原氏作成）
赤線は測線、色丸は宿泊地

新宮から潮岬

文化二(一八〇五)年七月、第五次測量において紀伊半島を一周した。伊勢の神宮に参拝し、鳥羽の城下に逗留したのち、紀州海岸を長嶋浦、木之本浦と廻り、七月二日には新宮城下に到着した。新宮では、熊野新宮の鳥居まで測った。大図を見ると鳥居が描かれそこまで測線が分岐している。

新宮から天満浦へと測進し、那智熊野権現の鳥居まで測量し、その後は、熊野権現観世音まで方位を定め、歩測によって測ったと日記に記している。当時は神仏の習合した権現の社であった。鳥居からの境内地では間縄で測ることを遠慮したのだろう。ここでは、那智の滝を一見し、遠測も行っている。大図には瀑布と注記され、鳥居から樹木に覆われた参道をを歩測していったことがわかる。

天満浦から太地浦に止宿した。太地は捕鯨で有名だが、止宿した家は、捕鯨を業とする人で豪家であると日記に記している。捕鯨で繁栄していたのであろう。さらに、古座浦に至り、大島に渡った。大島では、大図の測線を見るとわかるように、海岸線の測量は行えず、大島を十文字に横切って測量している。島の形は舟からの遠測により描いているのだろう。日記にも、海岸は波が高く測量なり難しと記している。現在、大島には橋が架かり渡るのも容易である。

古座浦から橋杭岩、潮岬を測量して串本へと向かった。橋杭岩もそれらしく描画されており、潮岬の先端には御崎神社との注記があり、そこまで測線が延びている。

（星埜）

史料解読

高橋（景保）御用日記（三）

安藤由紀子

（解　説）本稿は、伊能忠敬記念館所蔵の高橋景保の御用日記解読である。研究会発足以前に、故安藤由紀子さんと故伊能陽子さんが協力して、解読されたもの。

文言の整理と解説は渡辺一郎が担当した。解読文の欠落部分は後日補綴する。本文のなかで、淡黄色の背景色の部分は景保の記述、薄墨色の背景色のない部分は景保が引用して控えた部分、背景色のない部分は解説である。データ化は星埜代表に御協力いただいた。（渡辺）

＊京都到着

八月廿八日

一、今九ツ半時　勘解由御用先京都神泉苑町より御用状到来　三つ井越後所（屋）より達ス　尤去ル十二日附なり、坂部貞兵衛より京都ニて之取扱書面写差越ス　左之通

八月晦日大阪出立　閏八月四日城州下鳥羽江着いたし候処　今日御代官小堀中務手代・一柳対助（此者江此度勘ヶ由通行ニ付　別段出役被申付候由也）旅宿江罷越候ニ付　貞兵衛より京都町奉行江之掛合如何可致哉之段承リ合候処　是ハ何レ之衆ニても着前日ニ奉行所江懸合有之候間　御遣シ可被成旨対助申聞候ニ付　当所より左之通申遣シ候由

越後屋の飛脚便で貞兵衛から京都到着模様を知らせてきた。鳥羽へ京都代官の手代・一柳対助が指示を受けて迎えており、町奉行への連絡をどうするか問いあわせたところ、どなた様も（公務通行中の役人は）前日に奉行所に連絡するとのことなので、次のような要請書を提出した。

＊

（表書）曲淵和泉守様
森川越前守様
伊能勘解由
御用人中様

以手紙致啓上候　然は此度西国筋国々測量御用被　仰付今四日下鳥羽村止宿仕　明五日同所出立七条辺市中入口迄相測リ夫より御地着之積リニ御座候間　旅宿等差支無之様仕度奉存候　尤小雨ニて八着之積リ御座候得共　測量相成兼候程之大雨之節ハ逗留日送リニ出立ニ相成申候　右御掛合申上度如此御座候　以上

閏八月四日

尚々此度差添御用被　仰付候高橋善助　坂部貞兵衛其外内弟子等上下拾三人相越候間　相応之旅宿被　仰付可被下候　将又市野金助義病気ニ付去ル八月廿九日大坂表より致帰府候　此段御含置可被下候　已上

予定を記し、人数を知らせて、宿舎の用意を要請する文書を京都奉行の用人あてに送る。これに対し返書が届く。

右遣し候処　左之返書差越候由

（表書）
下鳥羽村御用先ニて
伊能勘解由様
森川越前守内
小柴惣右衛門
鈴木又兵衛
村田猶右衛門

御手紙拝見仕候　然は此度西国筋国々測量御用被蒙仰　今四日下鳥羽村御止宿　明五日同所御出立加茂川通リ七条辺市中入口迄御測リ　夫より当地御着之積御座候間　御旅宿等御差支無之様可仕旨　尤小雨ニては御着之積リ御座候得共　大雨之節ハ御逗留日送御出立被成候之旨　依之被仰聞候御紙面之趣承知仕候　右貴報如此御座候　以上

閏八月四日

尚々此度差添御用被仰付候高橋善助殿　坂部貞兵衛殿　其外御内弟子等上下拾三人御越被成候旨将又市野金助殿御病気ニ付　大坂表より被成御帰府候旨　被仰聞候趣　是又承知仕候　以上

京都奉行は忠敬の上司の高橋景保などより遥かに上級の役人であるが、老中証文を持参して通行する伊能隊の要請に対し、同じ文言を繰り返して丁寧に承知した旨を用人連署で回答している。これでは町方が丁寧に応対するのは当然だったろう。

一、閏八月五日京都着　巳刻　両町奉行所江三人とも相越　手札左之通

天文方
高橋作左衛門手附手伝
伊能勘解由
高橋作左衛門弟
高橋善助
高橋作左衛門手附下役
坂部貞兵衛

国々測量為御用　今五日当地着仕候　依之此段御届申上候　以上

閏八月五日

名刺に訪問の要件を書いた挨拶状のような感じ

である。幕府の遠国奉行にはどんな指示が出ていたか、まだ文書は見つかっていないが、到着と同時に伊能隊はこのような挨拶状をもって届け出た。

測量日記によると、三人揃って、まづ訪問したのは、東町奉行森川越前守で、用人村田猶右衛門が応対した。所司代への届けは奉行所からする、道順を提出するように言われ、明日提出すると答える。そのあと、西町奉行所、京都代官にも挨拶に出ている。

伊能隊側から提出した文言をそのまま繰り返し、承知しましたと記しているが、事前に天文方高橋から京都町奉行に通知した事務連絡の文書にも、丁寧に繰り返して、承知しましたと答えている。

同一文言を繰り返して承知しましたと答えるのは、幕府の内部連絡における慣例だったかもしれない。日本陸軍でも命令の伝達には、必ず復唱させていたから、武家政権として幕府命令の伝達は、軍令と同じだったかもしれない。老中の指令に対しては御下知と称している。

一、同六日左之書付　東町奉行御役宅江　貞兵衛　左之書付持参　用人鈴木又兵衛江相渡候処暫くして公事方与力本多金右衛門罷出　掛合有之候由

昨日の約束に従い、東奉行所へ坂部が測量経路を説明し、町役人、村役人への手配を要請する書付を提出する。御証文の写しも添付した。

人足手配が、前日で間に合うのか気になるが、実際には京都代官の手代・一柳対助が済ましており、形式が必要だったような気がする。

（表書）京都市中測量道筋申上候書付　伊能勘解由

此度国々測量御用被　仰付　今般当地着仕候　右二付当所市中左之道順二測量仕候

八日　神泉苑町より下リ　三条通リ西江　改暦御用所跡迄相越シ　夫より千本通リ江戻リ　南江下リ朱雀村より四ツ塚通リ小松橋迄

九日　神泉苑町下ル三条通リ東江　蹴上ヶ迄相越シ　夫より三条大橋江戻り加茂川二従ひ　七条柳原庄迄　右之通両日二測量仕候二付　其道筋町役人　村役人等罷出致案内　差支無之様仕度奉存候

尤雨天二御座候得共日送り二測量仕候間　此段右町筋村々江　被仰渡可被下候　以上

閏　　伊能勘解由　印

八月六日

京都をゆっくり測量、九日には京都代官小堀中務が旅宿玄関まで挨拶に来る。十日は坂部の斡旋で禁裏付小島安芸守に対面、小島の家臣の案内で京都御所を拝観する。坂部は小島安芸守と知り合いだったらしい。そして十二日京都出発を届け出る。

一、明十三日京都出立二付　右為届十二日両町奉行衆江　左之手札持参相越ス

（上部書入レ）此手札、町奉行所二て好有之　朱書之通認入　書直し差出し候段　九月六日申越ス

書き入れ部分は本文に取り込み済み

（手札本文）

天文方
高橋作左衛門手附手伝
伊能勘解由
高橋作左衛門弟
高橋善助
高橋作左衛門手附下役
坂部貞兵衛

国々測量為御用明十三日当地出立　東海道大津より琵琶湖水通リ罷越御用相済候上　大津より勢田通リ宇治川　伏見より中国江罷越し申候　依之此段申上候　尤相替候儀も無御座候へは　御届不申上候　雨天二御座候得は延引　仕候間　其節ハ又々出立日限　御届可申上候　以上

閏

八月十二日

右之通取斗候旨申越ス

＊山陰路を後回しに

九月朔日　登城

一、御勘定前田平右衛門江面会　此間勘ヶ由方より申越候雲州より隠岐江相渡候儀　当秋頃二ハ可相越旨松平出羽守留守居江達置候得共　日数延引二付北海辺江相廻リ候儀　冬二相成候間　道順替大坂より京都并湖水相廻リ　夫より南海辺播州江出　時候宜敷節来夏二も別段雲州より隠岐江相渡リ可申聞　其段内々出羽守留守居江達置呉候様相頼候処承知之由　尤道順替リ候段　御勘定所宛二て達書被遣候ハヽ其書付内々雲州留守居江為見可申段　平右衛門申聞候事

一、今日勘解由御用先江州彦根江御用状差出　即御勘定平右衛門江渡置　御勘定所江之添書例文なり　人増之一件申遣ス

秋には松江付近に赴くと松江藩の留守居へ伝えておいたが変更して、（予定が遅れて、山陰へ向かうのは冬になってしまうので）琵琶湖を測って、山陽道へ向かいたい。まだ許可を得ていないが松江藩に内々で伝えておいてほしいと御勘定前田平右衛門に依頼する。御勘定からは書いたものを貰えば内々で見せると返事がある。

増し人数一件のことで、いつもの例文をつけて、彦根の忠敬あて御用状を前田平右衛門に依頼する。

＊市野金助旅費の返納

一、金助返納金之義 十ヶ年賦返納致度段 願書相認 御勘定前田平右衛門江為見 員数御改可被下候 且又賄道具代之儀被下切二而 月割及日割と申儀も無之候間 是ハ返納二不及と存候間 其儀ハ相認不申候 此段如何可有之哉之段承り合候処 御手前様二て員数御改被成候ハ、別段此方二而相改候二も及間敷 万一相違之義有之候ハ、此方二而取斗可申且賄道具代ハ御返納二不及候段 平右衛門申聞候 即左之願書為見候処 存寄無之旨申聞候二付 左候ハ、今日上（たてまつる）べく間 其段御承知可被下旨申置進達ス

市野金助の旅費返納について、十年賦でと話がついたので、願書を見て貰う。賄道具代は渡し切りなので返納しないことを確認して願書を出す。

（願書上部書入レ）
十一月十五日願之通
達之助を以被仰
渡 即刻承り附
致返上

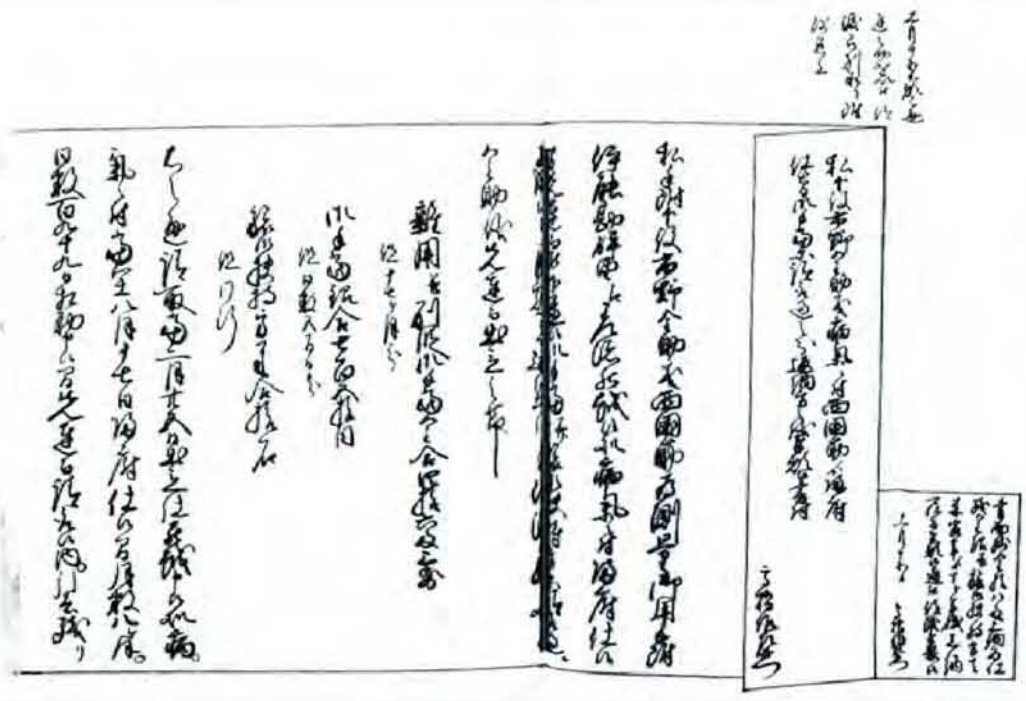
右は願書控えの上部への書き込み。「承り附」の意味が分からないが、写真のように願書右下に貼りつけるような形で左の文言がある。

書面残金拾八両上納為仕
残金銀并旅御扶持方は
来寅年より十ヶ年賦上納
可仕旨奉願候通被仰渡奉畏候
十一月十五日 高橋作左衛門

流れからみると、願書を出して願のとおり聞き入れると承認されたとき、すぐ書いて出す請け書のように感じられる。

これを小紙片に書いて差出し、願書に貼っておくのではないかという気がする。これを「承り附」というのではなかろうか。幕府の事務に詳しい方に御教示いただけると有難い。

＊年賦願い



私下役市野金助義病気二付西国筋より帰府仕候間御手当等請取過之分返納方之儀奉願候書付
高橋作左衛門
私手附下役市野金助義 西国筋為測量御用手附伊能勘解由江差添罷越候処病気二付 帰府仕候間先達而被下置候御手当并旅御扶持方等請取過二相成候分 月割を以返納可仕旨被仰渡候 然ル処右金助儀先達而出立之節

雑用并別段御手当金 合四拾六両三歩
但十七ヶ月分
御手当銀 合七百五拾目
但日数五百日分
旅御扶持方米 合拾石
但同断

右之通請取 当二月廿五日出立仕罷越申候処病気二付 当閏八月十七日帰府仕候間 月数八ヶ月日数百九十九日相勤申候間 先達而請取候内引去残リ

雑用并別段御手当金 合弐拾四両三歩
但九ヶ月分
御手当銀 四百五拾壱匁五分
但日数三百一日分
旅御扶持方米 六石弐升
但同断

右之分此度皆済返納為仕可申奉存候処 金助義小身者之儀 殊二出立之砌支度等并旅中病気二而雑用過分相掛リ申候二付 漸く残金拾八両御座候而已二而 此度右之通皆済返納仕候儀相成兼候趣二御座候 何卒可相成候義二御座候ハ、 此度右残リ有之候金拾八両返納為仕 残金六両三歩 銀四百五拾壱匁五分 米六合弐升ハ来寅年より十ヶ年賦二返納為仕申度奉存候 依之此段奉願候

以上

丑
九月 高橋作左衛門

右願書松之亟江可相渡処 多用之様子二付布施内蔵之亟を以秋山江相渡呉候様頼置

一、先達而田中吉蔵申聞候は 下河辺政五郎御證文願上候ハ、為知呉候様申聞候二付 今日吉蔵江面会致度旨申込候処 今日ハ不罷出段 坊主申聞候二付 里見八郎右衛門江其段申置

＊下河辺の御証文

同五日

一、此間願置候御證文請取登城 於影土圭 伝馬御證文 御同朋頭三阿弥を以 摂津守殿被成御渡候 即左之通 且御添書付下ル 是又左之通

下河辺への測量旅行用のお証文受け取りに登城する。影土圭の間で、堀田摂津守が御同朋頭の三阿弥を通してお渡しになり、添書もいただいた。

本紙厚
粘入半切　頭書

九月五日

天文方
高橋作左衛門手附
下河辺政五郎

伝馬

一、宿次證文一通

右者測量為御用罷越付右高橋作左衛門江渡之

＊御証文

上封の欄外
本紙厚
西之内美
濃紙折掛ケ

伝馬
（上封）　宿次證文

（本文）

馬壱疋　従江戸東海道中国筋四国九州壱岐対馬隠岐淡路海辺廻浦　帰路は中山道甲州街道往返共測量御用二付天文方高橋作左衛門手附下河辺政五郎罷越付相渡之者也

文化二丑九月

采女　御印

右村宿中

采女は、老中首座の大垣藩主戸田采女正のこと。老中押印のお証文である。一人の同心の通行には過ぎた扱いである。本隊とのバランスを考えたのだろう。

＊経路変更の申入れ

一、御勘定前田平右衛門江面会 此間談置候雲州江之掛合之義二付右之通達書 相渡置

（上部書入レ）

本紙日向
半切二認

（本文）

手附伊能勘ヶ由儀 西国筋為測量御用 先達而 御達シ申置候道順之通相越 此節江州琵琶湖水辺迄罷越申候 右道順之趣二而ハ夫より北海辺江可罷越之処 存外日数延引二付 北海辺江可罷越時候相後レ 測量手都合不宜候間 江州より直二播州江出南海辺通リ相測 時候宜節 出雲江出 隠岐江可相渡筈二御座候 此段御含置可被下候 以上

九月五日

高橋作左衛門

御勘定所

右書付相渡置 尤出羽守留守居罷出候節 内々相達シ呉候筈也

一、御勘定組頭黒川庄右衛門江面会 此度市野金助病気二付帰府致候間 右代之者下河辺政五郎明日出立有之筈二候 依之伝馬町江御達し可被下哉之段 申聞候処 御證文有之候へハ夫二茂及間敷段庄右衛門申聞候

勘定所から伝馬役へ通達してくれるか、と聞いている。お証文があるなら直接申し込んでよいといわれる。

且又同人申聞候ハ当春道中奉行より触有之候触書二 金助名前有之候哉 左候ハ、 書替不申候而ハ不相成候間 其段御断可差上 且又金助名前無之下役何人と而已有之候ハ、 夫二は不及 如何有之候哉之段庄右衛門承リ候二付

本隊が出発のとき、道中奉行から出した触れに市野の名前が入っているなら書き換えないとならない、と注意される。

名前無之 下役弐人と斗有之候間 御書替二ハ及間敷段答候処 左候ハ、 趣達書差出候様 庄右衛門申聞候二付近日差出筈也

下役の名前は無いと答えると、それなら良い。趣達書を差出すようにといわれる。

一、帰宅後直様（すぐさま）政五郎江御證文相渡ス 且又御證文文言之内測之字ケヅリ相見候二付其段政五郎江相達候処 政五郎より左之書付差越ス

宿次御證文壱通御渡被下 慥二奉請取候 御文言之内測之字削相見申候 此段御含置被下候 以上

丑

九月五日

高橋作左衛門

下河辺政五郎　印

＊誓詞血判

一、今日下河辺政五郎、田中忠右衛門両人御役所誓詞血判相済

一、左之通先触相認 尤伝馬町馬込平八江 為持遣ス 尤御證文写添遣し候事

任務に就くために誓詞血判がいるんですね。侍

の仕事は、すべて命がけだったようです。そして道中の人馬手当を要請する。自分先触れに、老中から頂いたお証文の写しと宿泊予定を添え、箱に入れて、伝馬役に届ける。下河辺の提出となっているが、景保がすべて段取りし、作って与えたと思われる。

覚

一、馬壱疋
外賃人足弐人

右者我等儀　西国筋国々為測量御用　伊能勘解由相越候御用先迄　相越候間　明六日上下三人江戸出立　東海道筋大津宿迄相越条　書面之人馬無滞継立可被申候　其外川越渡船場無差支様可被致候　且別紙之通休泊宿致用意　是又無差支様可取斗候　尤支度之儀は御定之木銭米代相払候間　其所有合之品二而一汁一菜之外馳走ヶ間敷儀可為無用候　則御證文之写相添差遣候

此先触早々順達　大津宿二留置我等同所着之節宿所江可被相達候　尤大津宿より先々之儀は着之上同所より先触可差出筈二候　以上

天文方
高橋作左衛門手附下役
下河辺政五郎　印

九月五日

江戸伝馬町
下河辺政五郎

先触
休泊附

文言は特に変わりありません。以下は箱に入れて伝馬役に届けた内容です。

御用
先触
右箱之内江左添書入遣ス

測量方
下河辺政五郎

覚

一、御證文写　壱通
一、先触　壱通
一、休泊附　壱通
右箱入

右之通差遣候間　可被得其意候　明六日明ヶ六ッ時致出立候間　御證文馬壱疋無滞別紙処附之通宿所江可被差出候　以上

九月五日
御伝馬役
下河辺政五郎

（処附）
江戸浅草門跡後。御書院番山口和泉守組屋敷内
下河辺政五郎

右は今七ッ時遣シ候処　左之請取書差越ス

（上包）上

（本文）

覚

一、戸田采女正様御證文御写壱通
一、御先触御休泊附共
但綴合白木箱二入

右は測量為御用東海道通　明六日明六ッ時江戸御出立被成候二付　被差遣則請取奉畏候　以上

丑
九月五日
御伝馬役
馬込平八
代猪三郎　印

下河辺政五郎様
御使衆

一連の流れをみると、同心の下役一人の旅行のため、老中首座の戸田采女正が押印したお証文が出たり、人足二人がつき、自宅まで旅行用人馬を差し向ける（通常は街道始発の宿場から手配された）など、すごい厚遇である。お証文は勘定奉行でも発行できたが、忠敬本隊と格を合わせたのであろう。

同六日
一、今朝六ッ半時頃　下河辺政五郎出立二付御役所迄立寄　弥只今致出立候段申置候二付
例刻登城　左之御届書秋山松之亟を以相頼　摂津守殿江上ル

尤出立御届は御用部屋御坊主を以上ヶ候例之由
且御宅江持参用人を以上ヶ候而も宜敷由也

景保は散々苦労して、下役を現地に追加派遣することができた。政五郎は小者二人、荷物運搬の馬一匹と賃人足二人を従え、夜明け直後、高橋役所に出発挨拶して出立した。

景保は喜んで、御勘定組頭秋山松之亟を経由して若年寄堀田摂津守に届書を堤出した。御用部屋（閣僚の執務室）の御坊主経由で提出するのが定例で、若年寄宅へ持参して用人経由で出してもいいというが、景保は嬉しくてそれどころでなかったようだ。

二〇代前半の頭がよくて、フットワークのいい若者景保は幕府内の諸役人に引き立てられていたに違いない。

下役下河辺政五郎出立御届書

高橋作左衛門

私手附下役下河辺政五郎義　西国筋海辺為測量
御用　今六日朝出立仕候　依之此段御届申上候
以上

九月六日

高橋作左衛門

一、御證文之内　削有之段秋山江承り合候処此レ
ハ其侭差置可申　返納之節茂随分不苦　其侭相納
可申　且政五郎より書面取置候ハヽ夫二而宜敷候
旨被申候二付　其侭差置

お証文の中に削り部分がある件について秋山へ相談し、そのままでよい。用済み後、そのまま返せばよいと教えられる。

今夜五ッ時頃　井伊掃部頭用人より勘ヶ由より
差越　添状左之通　彦根藩経由で御用状到着

高橋作左衛門様　井伊掃部頭内
御手附中様　相馬右平次
石居次郎兵衛
石居八郎兵衛

以手紙致啓上候　然は伊能勘ヶ由殿より作左衛門
様御役所宛之御封状壱通　彦根表より飛脚便を以
今日到着仕候二付　則為持参上申候間御落手宜御
取斗可被下候　尤為念御請取書被遣被下候様　仕
度候　此段可得貴意　早々如斯御座候　已上

九月六日

右二付左之通返書遣ス

相馬右平次様　高橋作左衛門手附
石居次郎兵衛様　下津董蔵
石居八郎兵衛様　矢崎新九郎

御手紙致拝見候　然は伊能勘解由より之御用状壱
封　彦根表より御便を以今日御到着二付為御持被
遣　致落手候　右貴報如此御座候　以上

九月六日

右勘解由より之書状ハ　江州神崎郡薩摩村より
閏八月廿七日附也　右は彦根領之由　坂部貞兵衛
より左之書付写差越ス

一、閏八月十三日京都出立　大津宿江止宿仕候処
問屋役人共心附申聞候は　此間大坂表より御差
出之御先触二ハ　此度北国筋江は御越無之　伏見江
御戻リ之御様子二被存候　左候得は北国筋江当年
御越無之段　御達し二而も無御座候而ハ　定而若
狭越前辺二而御待可申候間　御触書御差出被成候
方可然旨申聞ル　仍而左之触書差出ス

尤海津村ハ敦賀江出口取付之由二而　大津より
直二海津へ出ス

（上封）
御用
触書

測量方

（本文）
測量御用二付江州琵琶湖水相廻リ　夫より越前敦
賀通リ若狭より山陰道国々相測可申処　北海通リ
寒気二向ひ測量難相成趣相聞候二付　北海辺江不
相越　伏見江引返し　摂州尼ヶ嶋より播州路山陽
道国々相廻り　来春より夏二至り山陰道国々江相
掛り候二付　其旨相心得　追日先触相達シ候迄は
用意二不及候　此段為心得申達候　以上

丑
閏八月

伊能勘解由　印

海津村より
越前敦賀通リ
若狭
丹後
但馬
因幡
伯耆
出雲
隠岐
石見
長門
北海通リ
赤間
周防
安芸
夫より山陽道通リ差出候先触
出会迄
右国々

海辺通り
宿村
役人中

九月九日
一、登城　此間御勘定組頭関川庄右衛門江談置候達書左之通相認同人江相渡ス
先達而西国筋為測量御用　手附伊能勘解由江差添罷越候下役市野金助義御用先より病気二付　去ル閏八月十七日致帰府候二付　下役下河辺政五郎義跡御用被仰付　来ル六日当地可致出立筈二御座候右二付道中奉行衆より御用先江御達し之義　此度御書替二も相成候様可申上之処
先達而道中奉行衆より御用先御達書有之候節ハ右下役名面無之　下役弐人と而已有之候間　御書替之義不申上候　此段御達シ申候　以上
九月五日　　高橋作左衛門
御勘定所
＊市野出勤
一、同十六日市野金助江　病気全快二候ハ、勝手次第御役所江可致出勤旨　吉田栄六郎下津董蔵両名二而申遣返書来　廿一日より出勤致度旨申越ス
一、同廿日今朝金助罷越ス　明日より出勤仕候段届として来
一、今夜六ッ半時頃　井伊掃部頭殿より勘解由より之書状相達ス　添状左之通

高橋作左衛門様　　井伊掃部頭内
御手附中様　　相馬右平次
石居次郎兵衛
石居八郎兵衛

以手紙致啓上候　然は伊能勘解由殿より作左衛門様御役所宛之御封状壱通　彦根表より飛脚便を以今日到着仕候二付　則為持参上申候　御落手宜御取斗可被下候　尤為念御受取書被遣被下候様仕度候　此段可得貴意　如此御座候　以上
九月七日　　高橋作左衛門手附
右二付左之通返書遣ス
相馬右平次様　　下津董蔵
石居次郎兵衛様　　矢崎新九郎
石居八郎兵衛様
御手紙致啓上候　然は伊能勘解由より之御用状壱封彦根表より御使を以今日御到着二付為御持被遣致落手候　右貴報如此御座候　已上
九月廿日
勘解由より之書状ハ　江州浅井郡塩津浜村より九月十一日出なり
内容は記載がないので分からない。
同廿一日
一、今朝市野金助頭三宅助之亟より使者到来申越候ハ　昨日金助義今日より出勤仕候段相届ヶ候
右は猶又西国筋江罷越候哉之段申聞候二付右金助義足之病気二而罷帰り候事二て未夕足しひれ全快不致候由　併外病は此節快方二付　当地二おゐて相勤候義は出来候へ共
西国御用ハ歩行日々相勤候事故　急之出勤不相成候二付代リ之者被仰付罷越候
其上当春請取候御手当等請取過之分返納可致旨被仰渡候へは　先西国御用ハ不相勤積リ心得居候　尤後々西国御用手足り不申義も候ハ、　其節足病快方二も候ハ、　差遣可申儀も可有之候
先当分右之趣故不罷越積リ二候段　使者及返答候処　猶又申聞候はは左候ハ、出勤之義ハ貴公様二而被成御届候　私方二て相届ヶ可申哉承知致度旨申聞候二付　私方二而ハ何れ明日にも御届可申存居候　貴公様二而も御届有之候義と存候段　右中崎長三郎を以及返答候事
一、今夕秋山江罷越　右金助出勤之義御届可申哉之段承リ候処　松之亟申聞候ハ　急度御届二も及間敷　尤此儀金助出勤已前　出勤可為致哉　伺之上出勤致候方宜敷候　併前后二相成候事故　致方も無之候　金助頭より急度御届申上候へハ此方よりハ御城江罷出候節　明日二不限　口上二而御届申候而可宜段被申聞候事
一、今日より金助出勤

狙いがわかり難い動きである。治ったから出勤したい。ただ西国は駄目だ。ということを市野の本属の組の方から持ちかけている。
金助から働きかけて代弁してもらっている感じだ。しかも出勤の届けはどちらがだすのかと。手続きまで駄目押しである。
景保は簡単に考えて出勤を認めているが、気になったのだろう。松山に問い合わせている。
済んでしまったことは仕方がないが、金助の出勤は、予め伺ってから決めたほうが良かったと、秋山から注意される。市野はやっぱり、ケシカラン男である。
景保が独断できめるわけはないので、間と相談しているが、間には市野の使い道があったのだろう。

伊能忠敬史跡めぐり
伊能三郎右衛門家墓地

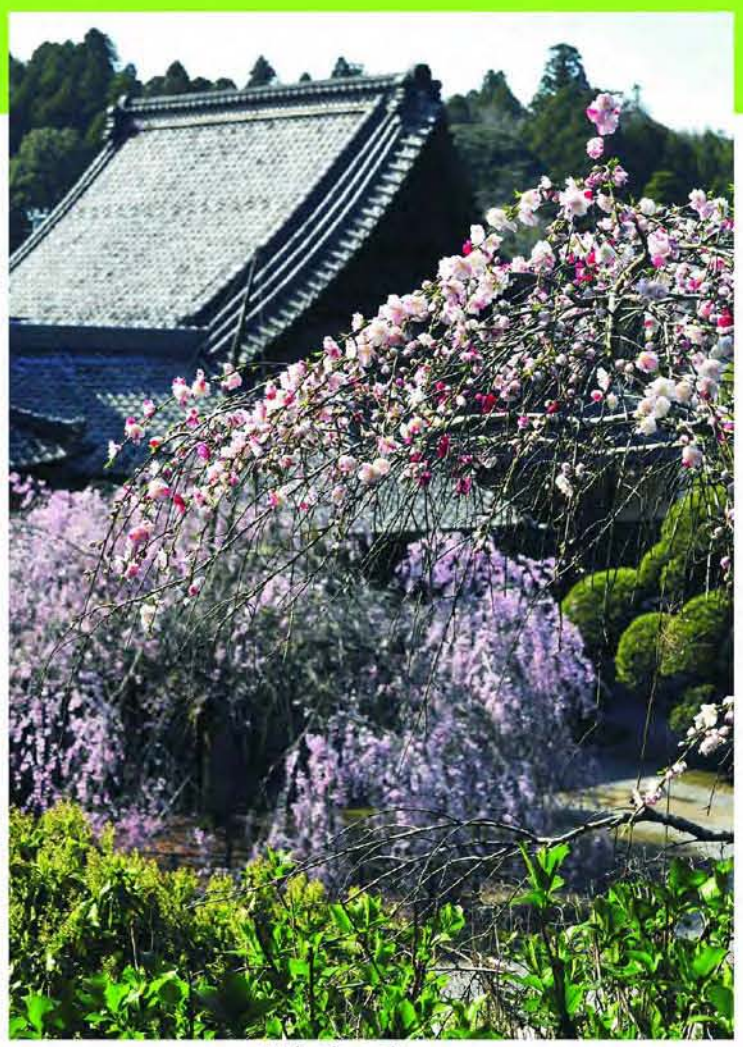
伊能楯雄

忠敬は、文政元年四月十三日、江戸八丁堀亀島町で死去し浅草源空寺の高橋至時の墓の側に葬られたが、本家のある地元佐原(現在は、香取市佐原)観福寺の伊能三郎右衛門家の墓地にも忠敬の墓があり、ここには遺髪と爪が納められている。

観福寺は、この地方きっての大寺であり、仁和三年(八八七年)開基という真言宗豊山派の名刹である。伊能家は江戸期には檀頭として、又，自家から住職が入院するなど観福寺とは深い関係にあった。

ここ三郎右衛門家の墓地には、天正年間、佐原の地に帰農した伊能景久を初代として現在まで続く代々の墓石が並ぶ。忠敬は、その第十代にあたる。墓石には、正面に、「有功院成裕種徳居士」、側面に没年が刻まれているが、「忠敬」の刻名はない。忠敬の名は、論語の「言忠信、行徳敬ならば、蛮貊(南蛮、北狄)の邦と雖も行なわれん」から採られていることは知られている。婿入りを直前にしての命名であり、異郷へ行く者への励ましの言葉でもあろう。そして、この戒名は、「漢書」に「彊勉行道，則徳日起、而大有功」とあり、又「種徳」とは、徳を広く行きわたらせる意であり、忠敬の人格業績を称えた名号となっている。

忠敬の墓の隣に、妻達(みち)の墓がある。達が亡くなったのは忠敬の死の



観福寺の春

16　十代忠敬　有功院成裕種徳居士
17　同妻　達　研心院妙唱日鏡大姉
(番号は本稿末尾の三郎右衛門家墓地地図の墓碑番号に対応)

観福寺　本堂と庫裏

三十五年前のことであるが、墓石は全く同一の形質であり、対となって設置されている。

「研心院妙唱日鏡大姉」

向かいには、

２２　稲（妙薫）　景敬次男鉄之助　　２１　忠誨　　２０ 景敬妻りて　忠誨長女貞　　１９ 景敬

十一代景敬（忠敬長男、一八一三年没）

「秦鏡院裔誠道研居士」

景敬妻りて（一八一八年没）

「鏡智院皎月亮貞大姉」

忠誨長女貞（一八二六年没）

「発生院心如円月童女」

十二代忠誨（景敬長男、一八二七年没）

「修学院麗藥成徳居士」

忠敬長女稲（法名・妙薫一八二二年没）

「楞嚴院體常妙實大姉」

景敬二男鉄之助（一八一八年没）

「智学院玉如恵光童子」

忠敬妻信（桑原隆朝女一七九五年没）

「浄蓮院成實妙貞大姉」

２３　忠敬妻　信
浄蓮院成実妙貞大姉

この墓地に、九代長由妻民（たみ・忠敬の妻達の母）の墓はない。嫁してなお日蓮宗であったため、同宗旨の佐原浄国寺に埋葬されている。

「浄心院日昌大姉」。

また、二番目の妻（内縁）の妙諦の墓は、ここ観福寺の柏木家の墓地にある。墓石には、「心蓮妙諦信女」とあるが、俗名は記るされていない。

妙諦（柏木家墓地）

さて、伊能家墓地は、略図のとおり、初代景久から代を追い整然と建ち並ぶ。

これは、伊能家に残される「家牒」に記される家系の順に配置されており、個々の没年の順ではない。

また、略図８から１７までは一連の基礎石の上に配され、１９から２２までも同様である。ある時点で墓地の整理がなされたことは明らかである。

伊能家は、十二代忠誨が没してその血統は絶え、およそ三十年後、親類の伊能茂左衛門（節軒）の助力により再興がなされ、景文（節軒の父景海の実家である上総国屋形・海保長左衛門の子、妻は節軒の二女いく）が十三代当主となった。

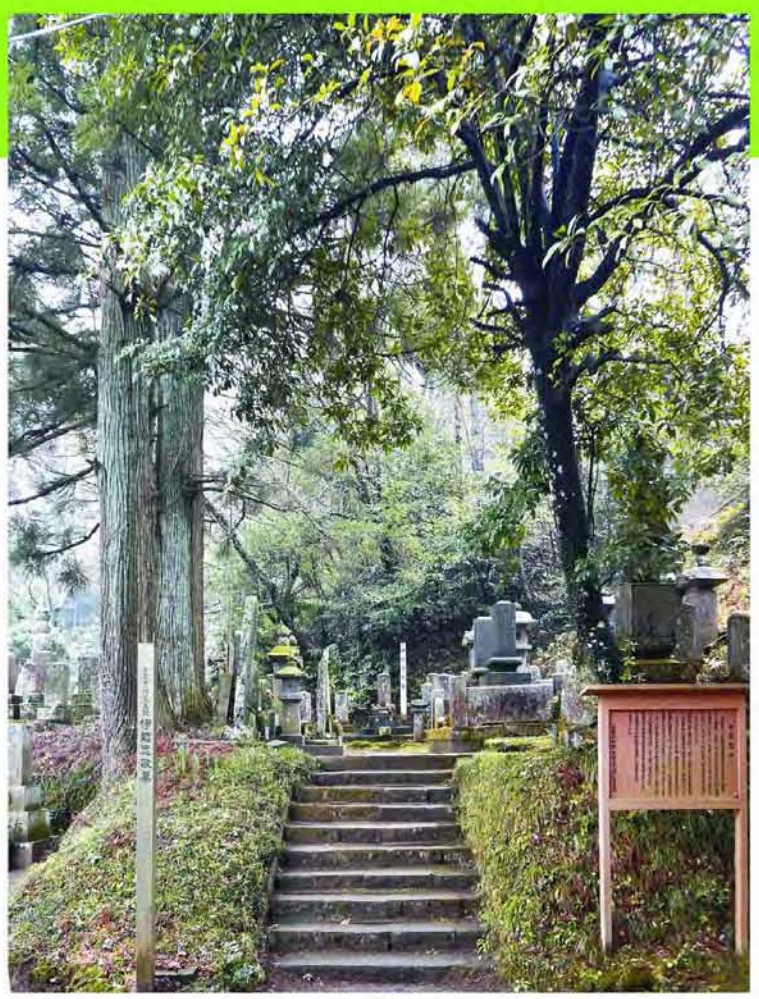
（右の墓石）景文、いく、ひさ
左は十一代景敬

大谷亮吉は、当時の状況を「忠敬が前半生の心血を濺ぎて恢復したりし伊能家の家産も再び殆からんとするに至れり。幸いにして地頭津田氏名門の空しく衰亡せんことを惜しみて干渉を試み親戚中の一人伊能茂左衛門（景晴、節軒と称す）を擧げて全資産の保管の任に当るべきことを命じたることを以て漸くこれを維持することを

得たり。」と書いている。

忠誨の没後、妻くには、暫く佐原に居た後、実家(常陸国高浜村)に戻ったことから、三郎右衛門家の跡を看るものはなく、屋敷は二十数年間にわたり無住状態であったと想像され、景文夫妻に跡を継がせるにあたっては相当の居宅の改修あるいは改築が必要であったことと思われる。(このことについては、現在伊能家旧宅の解体改修工事が実施されている最中であり、いずれ新しい発見があるかもしれない。)

さて、前述した伊能家墓地が整理されたことについてである。十三代景文の墓(18)は、整理された順序からすれば21と22の間にあってよいと考えられるが、そのようにはなっていない。おそらくは、景文が跡を継ぐ前後、そう遠くない時点で、血統の繋がる初代から十二代までの墓が、一旦、家系順に整理されたのではないか。景文と後妻ひさが亡くなったのは大正三年であり、先代忠誨の死後八十七年が経っている。



伊能三郎右衛門家墓地入口
(石段奥正面が忠敬の墓)

また、総碑は、「伊能家の墓」と刻まれており、昭和三十六年に十五代康之助氏(伊能洋氏の父上)が建てられたもので十四代以後の方々の名が名版にのこる。

三郎右衛門家墓地入口左手は、分家伊能七郎右衛門家の墓地である。ここには、入夫当時の忠敬を補佐した豊秋の墓がある。

また、その右手には忠敬の二男秀蔵の墓がある。数度の全国測量に同行し功あったが終には怒りを買い追放となった身であったが、今は忠敬の墓とは五メートルほどの場所に「神保玄次郎」と名を変えて眠っている。

伊能七左衛門家墓地　全景

さらに、墓地の右奥に接して伊能七左衛門家の墓地がある。ここには、九代長由から十代忠敬に継がる十数年間，当主不在の伊能家に移り住み看防として支えた清茂(妻は長由の妹)の墓がある。

また、伊能洋氏夫人・故陽子さんもここに眠っておられる。亡くなられたのは平成二十二年一月二十日のこと、はや三年が経っている。

戒名は「敬徳院梅香陽明大姉」、洋氏の建てられた石碑には、『縁』と刻まれている。

〈追記〉

忠敬の墓は、もう一つ存在する。南中(現在の多古町)の平山藤右衛門家の墓地内、小ぶりな墓石の正面に忠敬と妻達二人の戒名が確かめられる。平山家は日蓮宗であるが佐原観福寺(真言宗)の戒名がそのまま使われている。

忠敬にとって平山家は、林大学頭からの名乗書に「平山季忠四子」と書かれているように、伊能家への入夫前に養子となった家、妻の達にとっては母民の実家であり、父長由の死後の十二年間、母と共に預けられ幼少期をすごした処、藤右衛門も、伊能家を嫡ぐことが定められている姪を大切に育んでくれたに違いない。この墓石は、南中平山家と佐原伊能家の縁の証である。

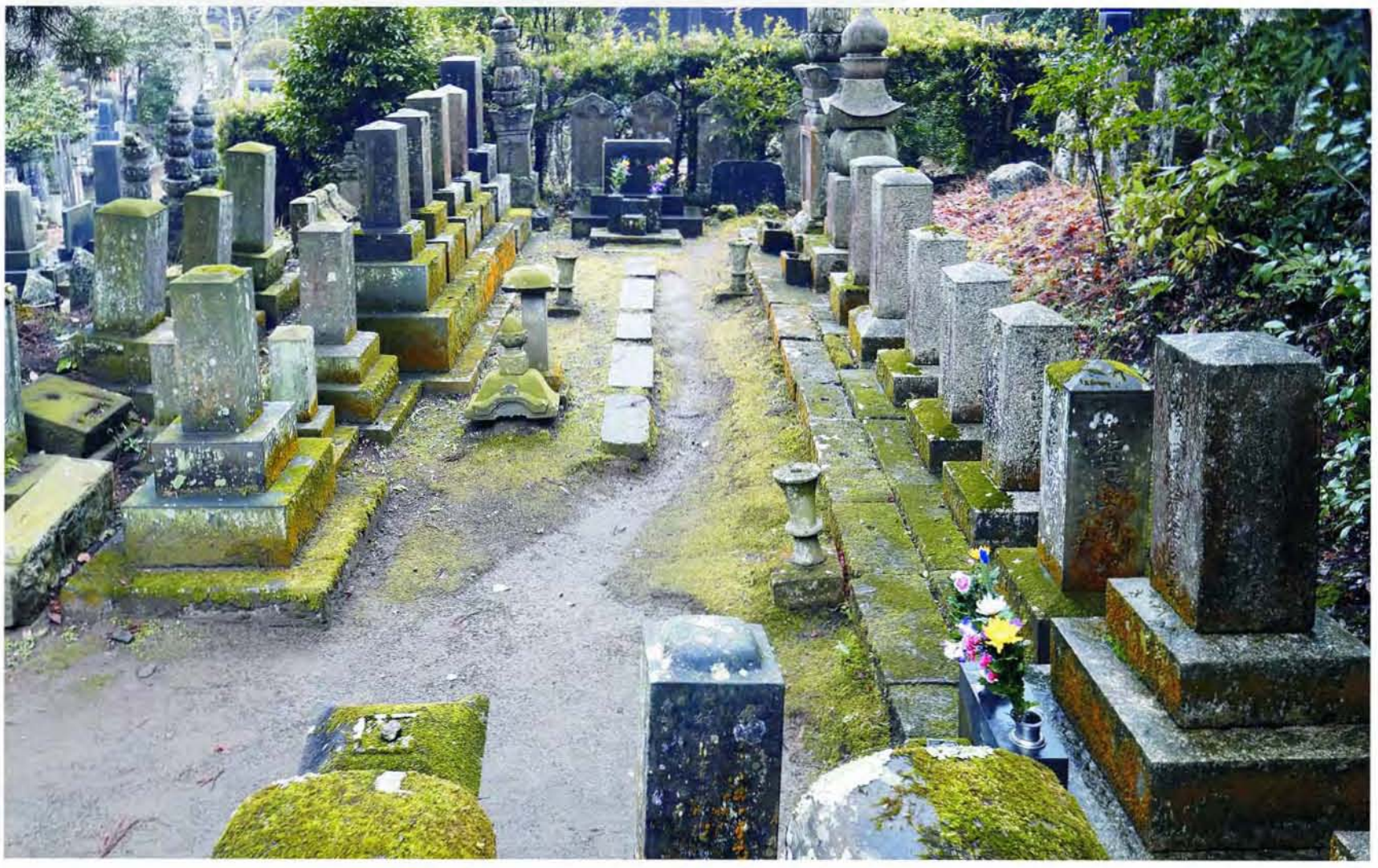
〈終〉

(いのう たてお・伊能七郎右衛門家当主・元伊能忠敬記念館館長)

平山藤右衛門家墓地(多古町)内
忠敬と達　の墓

伊能家家紋
違い鷹の羽

<伊能三郎右衛門家墓地　略図>



伊能三郎右衛門家墓地　全景

地域史料

対馬藩宗家文庫 『測量御用記録』続

入江 正利

前回、二〇〇〇年二三号から二〇〇二年二八号に『測量御用記録』を紹介した。その後に対馬歴史民俗資料館から『測量御用記録 二番』が見つかったとの連絡を受け、急遽対馬へ飛び、写真撮影を行なった。

今回はこの『測量御用記録 二番』を紹介したい。

測量御用記録の概要

この『測量御用記録』の全容は全五冊、一三一四ページからなる幕府天文方測量に関する記録文書である。

一番は、先触れと肥後藩の書上写しが記されている。その後の部分には対馬藩郡方奉行所佐役の中村郷左衛門が下命により郷ノ浦へ渡り、平戸藩役人や測量隊からの情報収集と面談した様子が詳しく書かれている。

二番は後述。

三番は、測量隊の府中（厳原）到着から、五島へ送り届けるまでの手分け毎の日記と、対馬全島の測量距離が書かれている。

四番は、測量隊に提出した郷毎の書上写しと、延喜式に掲載された対馬の神社帳がまとめられている。

五番は、府中と郷毎に集められた夫、大工、馬、船の数と支払いを計算した明細帳となっている。

測量御用記録 二番

二番は、家老や奉行所への伺書と、それに対する下知や通達を集めたものが中心になっている。

文化十年癸酉二月より

弐番

測量御用記録

癸酉二月二十六日　中村郷左衛門壱州へ上船以後

三月二十八日御役人衆入着迄の間　御国にての御用跡留　并に四月二日　御役人衆下村以後　府内御用跡留しより御役人衆五島へ被罷渡候後　都て御用済迄の分記之

御郡奉行所

文化十年癸酉…一八一三年

御用測量にかかわる正式通達集である。

都て…すべて

中村郷左衛門は壱岐へ渡り測量隊を待ち受けるが、平戸藩の情報では壱岐到着日がはっきりせず、長引くようであれば、ひとまず対馬へ戻ったほうが良いか否かの伺書から始まる。そして郷左衛門からの書状により、対馬全島に対し、村々の磯場境と宿見分を二手に分けて調査するよう指示が下される。磯場境には郡奉行所から出て、宿見分には勘定所方手代と大工が出ることになり、早速調査に向かう。

この後には用意すべき品々や注意書きが詳細に列挙されている。他藩の文書でも同じような内容が記されていると思うが、対馬藩だけにみられる箇所も有ると思われるので紹介したい。

一　旅宿向并通り筋に至　来る十日迄除掃方それぞれ可取計事

一　来る十日より遠見番人増人申渡　昼夜無油断可相勤事

一　旅宿両家の門前　用水桶可備事

一　湯殿へ湯桶　手洗手桶等用意の事

一　家来用風呂　手洗等用意の事

一　両本陣へ御朱印据置用意床に差置候事

一　両家へ絹夜具一ト通づつ　其外下宿家来又もの等迄　木綿夜具用意可差廻置事

伊能忠敬と坂部貞兵衛には絹の夜具が用意される。

一　旅宿下宿共　床掛物　置物の事
　但　両本陣へは生花類草花の事
一　同断　刀掛　多葉粉盆　火鉢等差廻　両家へは衣桁一脚づつ用意の事
一　両本陣へは台子一ト通充可備事
　但　着の当日　坊主壱人づつ両家へ可相詰事
台子…だいす。茶道具
一　同断　手水場へは手拭掛用意の事
従者　棹取りの宿。以下大部分形どおり。違いある部分のみ注記。御証文が正しい。両本陣は忠敬、坂部の宿。
一　家来用火鉢　多葉粉盆　茶等用意の事
一　鑓掛用意の事　但　勘解由殿　貞兵衛殿方
一　着の日　門前へ餫手桶の事
餫手桶…飾り手桶
一　燈置　行燈　手燭等其外必要の品見計差廻可置事
一　夜中揚陸の節は　旅宿左右へ置挑灯可燈事
　但　引両計の挑灯用意の事
一　旅宿表通へ引両計の布幕　逗留中張之夜は引両計の挑灯壱張充燈之候事
　但　裏門より出入の積に付　是又挑灯用意の事
一　宿亭主の儀　御役人揚陸の節　麻上下着　門外へ出迎　御宿亭主の趣申述　当日御料理出し方等差配は素り　諸用可相達事
　但　小使用の者其外　水汲等人柄吟味可差廻事
一　揚陸雨天に候得ば　一行の雨具　上は傘　木履　下は簑笠　紙合羽用意差出候事
一　着の当日　両人へ二汁七菜の御料理可差出候事
　押二種　吸物　御酒　縁高菓子
　但　差出方用達の人より下役へ掛会可申事
一　下役　内弟子　竿取迄一汁五菜
　押一　吸物　御酒差出候事
一　侍以下一汁三菜　酒被下候事
　何れも賄方用意の事
　右通り何れも町子供袴着可相勤事
一　逗留中　朝夕膳部の儀　上一汁五菜　次以下一汁三菜の事
　但　町方請負の宿へ申付候事
一　江尻橋御番所の儀　御馬廻弐人　大小姓弐人御従士は当番の銘々直に相勤候にして　着の当日より逗留中昼夜旅宿近辺時々見廻り候事
一　右御番所相勤候人　火消羽織着可相詰事
一　同断　番所飾の儀は御観礼の節の見計を以飾付候様可致　尤火消道具残らず飾付候事
一　船改所番所飾の儀　左の通被　仰付候事
　忠敬、坂部の分。酒のことは下役へ事前に相談せよ。下役以下は一汁五采。区別しての記録は珍しい。侍の身分は棹取りより上で間違っている。以上は到着の日で、以後は少し下げる。給仕は子供。大人が陰で指図した。食事は町方の請負だった。番所詰め人数は大仰である。足軽同心でなく藩士が宿巡回の記録はほとんどない。
　鉄砲拾挺　玉薬箱共
　鑓拾本
　上道具
　布幕
　挑灯三張
一　浜御番所　宮谷橋御番所の儀は障子〆切り布　幕張之　夜は挑灯三張燈之　何れも三っ道具計　建之　組中壱人充昼夜移代り相詰候事
一　浜見張番所幕三っ道具建之　組の者壱人づつ可相勤事
一　波戸揚陸階子の儀　先形の通手当可致事
階子…はしご。梯子
一　駕籠台用意　波戸へ可出置事
一　小隼弐艘
　絹幕　桐油
　内壱艘　揚陸用
　同壱艘　用達の人乗用
　外に端フネ壱艘御役人衆家来揚陸用
一　浦口左右へ標船弐艘出置候事
　昼は木綿幡印旗引当　夜は大篝火焚之
　野良崎折瀬の所へ印船小船壱艘付置候事
一　着船夜に入候節　端網取篝火手配　先格の場所へ手当の事
一　着船夜に入候はば　波戸北手より内矢来の処へ手甫篝四ヶ所へ焚之
矢来…やらい。竹や木で作った囲い
一　同断　波戸南の方より御蔵前通　台挑灯所々に燈之
　但　篝置挑灯作事方より差配可致　尤組中　四人小者等相附置　火用心第一可相制事
一　着船夜に入候はば　志賀白木磯辺出崎へ焚火の事

一 御役人衆乗船漕船六艘　水夫五人乗　旗看板
　但　角取紙木綿旗引当付　小幡印先規の
　通建之
一 揚陸の節通り筋辻　堅足軽壱人づつ可差出事
一 乗物壱挺　蒲団　日覆　桐油等取持　外に用心
　駕籠壱挺御使者屋内へ差出可置事
　但　舁夫看板着　手当御使者屋内へ集り
　置候事

標識船は昼は旗印、夜は燈火。出崎には焚火。舁夫…かきふ。駕籠舁き（かごかき）

一 荷物は内矢来内揚場より致船揚　旅宿へ運送
　の差配作事方より勤之　持夫手当の事
　尤荷物引分方の儀は　不日可相達候
　但　宰領は彼方御家来内被相附候様可掛会
　事　尤右宰領の手引は組中より可令事
一 御用長持弐棹置所は台を用意　其上に可差
　置事
一 荷物揚候所は不残敷物用意の事
一 行列に加り候夫の者　看板着手当申付　浜へ
　差出置可申事
　服紗麻上下着
　御従士目付三人
　御郡手代
　御船奉行所手代
　作事手代
　服同断
　年行司
　右の面々浜へ罷出　預りの筋々可令差配　御
　従士目付の儀は下目付召連行規方厳重に可相勤

荷物の輸送を作事方に指示。但し宰領は伊能隊へ依頼。出迎えの藩役人を任命。対馬藩は町村任せにせず藩直営で対応した。全体は従士目付が統括。

一 人足の者共散々に不相成様集置　食事　焚出
　可被下候間　町家へ手当の事
一 御用掛諸役中　町奉行　御郡奉行其外　御用
　掛の小役人中御使者屋へ相詰候事
　但　与頭手代より壱人可相詰事
一 伊能殿　坂部殿揚陸の節　江尻橋番所詰御従
　士中は刀を持　縁に下り　刀を脇に可差置
　時宜合可致
　下た番の者台へ下り　平伏の事
　但　下役衆通路の節は　下番の者計下座
　一統は膝直し候事
一 右同断の節　船改番所の儀は　裏付上下着罷
　出居　時宜合右の振りに可相心得事
　但　浜御番所　小船番所詰組中　右の振り
　に可心得事

時宜合…じぎあい。適当な時期・状況で挨拶すること。

一 揚陸の節　旅宿へ為導引　御弓の者麻上下着可
　相勤　尤下役の人導の儀は　組中より羽織袴着
　可相勤事
　但　伊能殿　坂部殿へは外に為先払　組中
　より看板着相附候事
一 夜に入揚陸の節は　両手の行列先へ胴引両高
　挑灯弐張づつ　且御用長持弐棹へ同弐張充燈
　之候事

宿への案内は忠敬、坂部には先払いを立て、御弓手の者が麻裃で案内。夜の場合は両手の行列先に高張り提灯二張り。

一 御用達両人の儀は服紗麻上下着　上下三人充
　小隼より乗船迄罷越　御用達申付置候段　為
　挨拶御旅宿用意宜候間　御勝手次第御上陸
　可被成趣申述引取　揚陸の節石燈籠前通りへ
　相扣居　跡より旅宿へも相勤可申事
一 揚陸の上　下役迄御使被差出　御口上左の通
　対馬守申入候　今日は無御障御着船珍重存候
　長途御下別て御苦労存候　為御欽以使申入候
　この段従江府兼て被申付越
一 各中より御従士使差出口上
　家老共申述候　今日は無御障御着船珍重
　御事に候　長途御下向御苦労の御事に御座候
　御祝辞以使申述候
一 右御使　服紗麻上下着　尤御祐筆日帳付内より
　可相詰事
一 出火の節立除場
　上　太平寺　　下　海岸寺
　右風並に依　両所内へ御用達より同道可致事

江府…ごうふ。江戸。藩主は江戸詰め。
御用達二名は従者二名づつ召し連れ、小早船で乗船に近づき、御用達申し付けられた者です。旅宿の用意整っておりますので御上陸下さいともうしいれ、引き上げて石灯籠前に控える。安着後　下役まで対馬守の口上を伝える。出火の場合の避難場所。

一 渡海の日　若風勢に依り脇乗有之候はば　其所
　在合の船々漕船に差出　村役人乗組致下知　自
　然其所へ揚陸被相望候はば　寺院又は請人家等
　取片付　揚陸可被取計　尤脇乗の様子に至り急
　速令注進候様可被觸下置候
一 松浦様より若添送使も可有之哉に候条　八坂者
　輿七宅御貸上に取計　旅宿の手当可有之　尤

当日一汁五菜　吸物　御酒　菓子差出　家来へも一汁三菜被下之　賄方用意の事
但　旅宿へ湯殿用意　尤右添送使へ諸事差配　船改所より差配の事

松浦様…平戸藩。壱岐は平戸領の為、測量隊を対馬まで送り届ける必要がある。

右の通　各預りの筋々　得其意　無手抜様可被取計候　以上
三月　年寄中
輿頭衆中
大目付中
中原外記殿
仁位格兵衛殿
御勘定奉行所
御郡奉行所
乾　衛士殿
船改頭役中
佐役中

一八一一年に対馬厳原で行われた朝鮮通信使の易地聘礼（えきちへいれい）に準ずるような周到な準備である。この時は幕府の要人が朝鮮通信使を迎える為に来島した経緯がある。

この他にも町家の二階や小路からの見物禁止や、謡小唄且つ声高に呼ぶことを禁止し、子供の凧揚げも禁止することが記されている。

さらに、見分の済んだ宿泊可能な村名を△本泊○不時泊□街道測量の節泊印に区別できるように四十ヶ村を列挙している。伊能測量隊が厳原に到着した時には二手に分かれての測量と宿泊地を中村郷左衛門は進言し、採用されることとなる。

その後は上記の数々の下知への伺いと、それに対する細かい指示が続く。

中村郷左衛門は壱岐郷ノ浦で伊能忠敬と面談後、平戸藩役人からの情報収集も終え、厳原へ戻ってくる。新たな具体的な指示が下される。その中で天文測量の材料について書かれている部分がある。

覚
一　星はかり柱弐本
内壱本は　長さ　弐間
廻り　弐尺五寸より三尺廻り
迄の木
〃壱本は　長さ　九尺
廻り　右同断
右は杉の直成る木を以出来七八寸角につちを付け尤　真四角には不及　四方に丸みを残し　なで角の様にけずり　つちを付け可申候　斯の通この間書状を以申達し候　本泊りの村々へ村毎に出来置候事
若杉無之候はば　何の木にても真直成る木を以出来候様可被申達候　松の木は不宜候由に候
以上
三月廿日
八郷弐通にして差出す

弐間…三六四cm　弐尺五寸より三尺…七六cm
から九一cm　九尺…二七三cm

「つち」は横木あるいは柱を立てる土台（つちい）か。この柱は厳原で作った物の出来が良く、八郷へ持ちまわることになる。

食事の材料には、山芋五拾本、玉子百五拾、木茸弐升、椎茸七升、味噌漬弐拾本、野菜類は其所に有合の品、竹の子、ふき、うど、貝類、豆腐を用意する。これらは壱岐で中村郷左衛門と忠敬との面談の際に食べ物の好みについて得た情報によるものである。測量隊は特に豆腐が好きという会話が『測量御用記録一番』に出てくる。魚は地元の漁民から相対売りにて仕入れるように指示が出されている。

そして正式に二手分けの付廻り御用掛として、御郡方奉行の佐治勝左衛門と御郡方奉行佐役の中村郷左衛門に仰せ付けられ、郷左衛門は測量の期間中は御郡奉行並として務めることになる。

三月廿八日
〃　今未の刻頃　測量御役人衆御着船に付　佐治勝左衛門　中村郷左衛門　御用掛の手代役溝井次左衛門　繁野郷左衛門　山岡軍左衛門　小川与四郎　并足軽四人　走り番御使者屋へ出張　浜致出役候事
但　御役人着船より府中測量　田舎測量相済上府　五島へ被差送候迄の儀　三番の記録に委細記

三月二十八日、伊能測量隊の船が着船。以下細かい手違い等に対する指示はあるが、準備が良かった為か大きな混乱は見られない。すぐに五島送りの船や水夫の数などの手配が行われる。測量中には野帽子十九個と、縄百弐拾間（約二一八m）の注文があった。間縄については材料の苧麻の代金と手間代が支払われている。

測量終了後の部分には、未払分への対応を求めた上申と、測量に関わった功労者の称美の上申書がある。その功労者の部分の記述をみると、

・泉村の舌崎を測量する日は、船を出せないほどの暴風だったが、忠敬から「それでは今日の御用が済まないので、漕ぎ通すよう」厳しく命じられ、波を被りながらも漕ぎ通した者。

・走番の中に算用の心掛良く、忠敬から算術を教わった者。

六右衛門儀は先般郷左衛門壱州へ被召仕候節　若党へ相雇　召連越　御国絵図持越候て　彼地にて御役人衆着を待請候間に海辺弐里餘里の凡測量方郷左衛門眼力乏敷候付　専手伝為仕　軽き者には算用の心掛も有之候間　一廉の御用に相立　廻村中にも勘解由殿　親に相重り　是迄御国へ在ふれ不申　珍敷　算術など六右衛門に被相教　人物宜由称美に預り　別て歩持の儀共に御座候　いづれ骨折苦労仕候間　相応御誉被成下候得かしと奉存候

・夜分、その日に破損した梵天や幟、間縄を宿に持込、修理や新調して準備した者。

夜分には其日の損じのぼんてん　幟　間縄等悉く銘々の旅宿に取入　右の品々毎夜修補　或は新規の出来等にて　昼夜間断なく数十日の間　格別大儀仕候

・作業中に大怪我をした者。

・病死した者。等。

右の通　私見多の趣申上候間　御賢慮の上相応御称美被　仰出被下度奉存候　以上

七月七日　　中村郷左衛門

その後の部分にはそれぞれについて御沙汰と褒賞について書かれている。

巻末には測量隊の門谷、今泉、永井の連名による礼状の写しと、中村、樋口の連名による返書の写しが記録されている。ここでは、礼状のみ紹介する。

甲戌十月　江戸浅草天文方御役所より
左の書状相達

一　筆致啓上候　追日冷気に罷成候処
各様方弥御安泰に被成　御勤仕珍重の
御儀奉存候　然ば去夏御領内測量
御用勤役中は　何角御世話に罷成り
忝仕合奉存候　且各様方御出役被下
御太儀千万奉存候　伺御懇命毎度
失経仕候段　御用捨可被下候　将又拙者共儀
遠国御用無滞相済　当五月下旬
帰国仕候間　この段乍憚貴意易思召可被下候
帰府後早速以書状御挨拶可申上筈
の処　打続御用調にて　甚繁勤に罷在候間
乍存御無沙汰仕候故　是又御免可被下候
右は御安否相伺度　御謝礼旁如是
御座候　恐惶謹言

八月二十五日

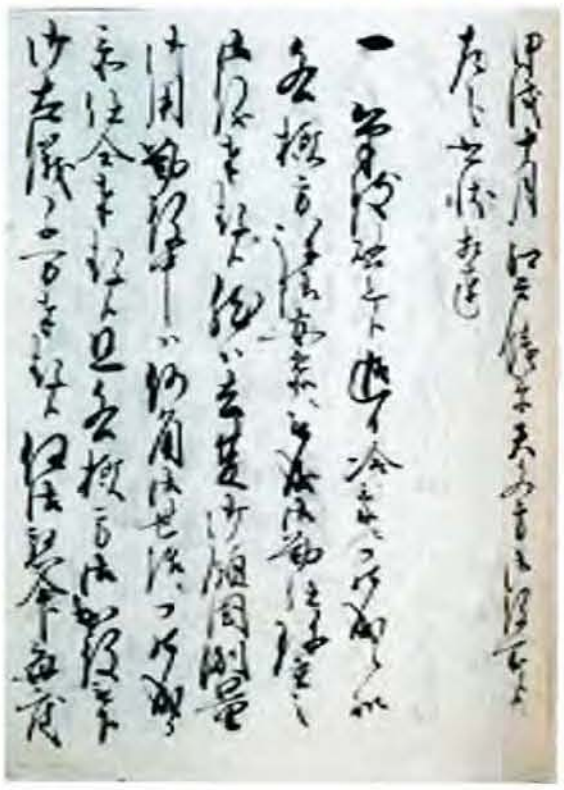
門谷清次郎
今泉又兵衛
永井甚左衛門

中村郷左衛門様
佐治庄左衛門様
樋口又左衛門様

尚々　時候折角御厭可被成候　扨又去る御用中御遣り御役人衆中様へ御府の節　宜御伝達可被下候様奉願候　この方伊能殿其外宜申上候様申聞候　以上

甲戌…文化十一年一八一四年
弥…いよいよ
何角…なにかと
忝仕合…かたじけなきしあわせ
御用捨…ごようしゃ
将又…はたまた
乍憚…はばかりながら

佐治庄左衛門…佐治勝左衛門。対馬藩郡奉行。西の坂部の手の付廻御用掛として務めたが、途中から樋口又左衛門に交代している。その為返書では除かれている。



伊能忠敬　周辺の人①

会田算左衛門安明　前田幸子

はじめに

伊能忠敬の周辺には歴史上有名な人物が多数登場する。その中でもひときわ気になる存在が会田安明である。たんなる友人というだけでは終わらない、忠敬の人生に濃く長い影を落としている人物―。

一昨年の夏、所用で会田安明の出身地・山形市を訪れた際、故郷に残る安明の史跡を訪ねてみた。炎天下、山形の街を汗をふきふき歩きまわり、やがて見えてきたのは、会田安明の意外にも大きな人物像だった。その後、安明の自伝を読み、経歴や生き方を知るほどに、安明との巡り合いが忠敬の人生に大きな影響を及ぼしているのではないかと思うようになった。忠敬の周辺に見え隠れする会田安明の全身像をさぐりつつ、忠敬との関係を考えてみたい。

永代橋が落ちた日

文化四年八月十九日、永代橋が深川八幡の祭礼に詰めかけた群衆の重みに耐えかねて落ち、千四百人も死亡するという大惨事が起きたことは歴史上有名である。実はこの時、会田安明は伊能忠敬や天文方の人々と一緒に祭り見物をしており、その時の様子を著書『自在漫録』で詳細に綴っている。安明と忠敬らの交際を窺い知ることができて興味深いので、まずそのエピソードから紹介したい。

『自在漫録』より

文化四年八月十五日は深川八幡の祭礼の例日だったが雨天で延期となり、十九日に祭礼が行われた。久しぶりの祭礼なので、氏子たちは大いに気を張って見事な祭礼になるという評判だった。およそ一町ごとにあつらえた揃いのいでたちを見れば、一人ひとりの衣装に金四、五十両づつもかかっているのではないかと見うけられる者が五、六十人ずつくらいいる。町ごとの費用が二、三千両くらいかかったということである。このような評判なので見物人が群れ集まること夥しかった。私も当日は深川黒江町の伊能勘解由方へ行き、高橋作左衛門、間五郎兵衛などと合流したあと一緒に富岡八幡宮の一の鳥居前にある白木屋の二階桟敷に行き祭を見物していた。しかし夥しい群衆のために祭の行列がとのわず、子供の衣装などは人の陰になってよく見えない。見えるのは、ただ見物人の頭ばかり。町々で大金をかけたのはみな無益なものとなってしまっていた。そのうち四ツ時になると永代橋が崩れ落ちたというわさが聞こえてきた。しかしただわやわやと騒がしい中で、それに驚く者はだれ一人なく、ウソだという者もいた。あるいは二、三人落ちて死んだという者もいたりして、わずか四、五丁の距離なのだが、たしかな情報を知ることができなかった。しかし橋が落ちたのは事実なので祭行列の練込みも滞り、とうとう祭は終了となってしまった。だが先に練込んだ行列がしだいに繰り出して自分の町内へ帰るから、結局一番から七番までの祭りを見物した。前にも云ったように、ただ見物人の頭を見るだけで行列も乱れ、衣装も見届けることができない。なので吾輩は八ツ過ぎに伊能氏宅に帰った。このとき、永代橋が落ちたことは本当の話で、五、六人死亡したとのうわさであった。その後伊能周蔵という者が永代橋に見に行ってきて、しだいに死亡者を引きあげているが、およそ四、五十人死亡したという。さらにそのの後慶助という者が見てきて、およそ五、六十人の死体を引き揚げた、死者は百人余りになるだろうとの噂だという。このよ

会田安明とは

江戸時代の和算家。羽州山形七日町生れ。内海（会田）重兵衛の長男。名は安旦とも書く。通称算左衛門、字は子貫、号の自在亭は関孝和の号自由亭に対するもの。十六才のとき郷里で数学を学び、二三才のとき江戸に出て御家人の株を買い、一時鈴木彦助と名のる。御普請役となり、各地の治水工事に功績があったが、天明七年、四一才のとき御代替により浪人となった。このころまでのことは、自叙伝「自在物談」にくわしい。この間に本多利明について数学を学び、ついで関流藤田貞資に入門しようとしたが、江戸の愛宕山に奉納した算額の誤りを指摘されて衝突、以後関流との論争は二〇年余りに及んだ。この間に安明の学力はひじょうに進み、関流の書物を研究、批判するかたわら、不定方程式・対数原理・幾何学の問題など多くの面で創意を示した。その著書は和算家のなかでもっとも数が多く、千数百巻に達したが、刊行されたものは「算法天生法指南」のほか数種にすぎない。その流儀は郷里の名をとって最上（もがみ）流といったが、門人の多くは「さいじょう」流と呼んだ。

文化十四年、七一歳で江戸浅草の家で病歿、本所即現寺に葬むられた（後、芝公園金地院に移葬）。翌年山形東沢滑川禅昌寺に碑が建てられた。翌年、門人たちが浅草観音境内に算子塚を建てて、その功績を伝えた。大正五年、山形市七日町長源寺で「百年記念祭」が行われ、実相寺に記念碑が建てられた。昭和四一年には一五〇年祭が行われ、数々の記念行事が持たれた。安明の門弟は、江戸府中はもちろん、奥州津軽藩・越後新発田・奥州一ノ関・二本松・三春・庄内・仙台、また山形を中心に上の山・天童等にすこぶる多かった。

（「山形県立図書館」文献目録―人物篇より抜粋）

うにだんだんと死者の数が数多く伝えられて、確かなことはわからなかった。さて、私は伊能宅を七ツ（※午後四時頃）過ぎに出て、寺町通り高橋二ツ目橋を経由して帰ったが、その道筋は夥しく込み合って、群衆がひきもきらなかった。これは永代橋が落ちたからみんな大橋や両国橋へ回って各々の家に帰ろうとするので、ことさらに込み合うのだ。霊巌寺前へ来た頃には高橋が狭いので通行できなくなった。三丁ばかりの間は本当に人々ですし詰め状態で、一歩も進むことができない。それなので高橋氏、間氏ら上下四人はここで別れ、萬年橋を経由し両国橋を通って帰るという。私は思うことあって、ここに留まった。さて高橋、間の両氏は萬年橋を経由したものの、更にこみ合っていて通り過ぎることができなかったので、また高橋に戻ったが、このときにはさらに込み合って通り難かった。それではるか東の方に回り、扇橋を渡って、やっと夜の五ツ時頃（※午後八時頃）浅草天文方の私宅へ帰りついたということである。さて私は・・・日暮時より前に北本所の自宅に帰ることができた。（現代語訳は筆者）

注　伊能忠敬も同日の出来事を江戸日記に記している。
○文化四年八月十九日　晴天　朝五ツ間五郎兵衛来る　四ツ前会田三左衛門来る　九ツ前高橋作左衛門並びに坂部貞兵衛親子来る　間　会田は五ツ半後に白木屋蔵店桟敷へ遣す　青木　下河辺　門倉なども同伴　九ツ頃より高橋氏我等同桟敷へ罷越一番の練ものより七番迄一覧　八ツ半頃に一同帰る　此午前往来過分に付永代橋崩れて大勢のもの横死に及べり

利根川流域での出会い

永代橋が落ちた文化四年は第五次伊能測量と第六次測量の谷間で忠敬は江戸にいた。佐原村の名主から幕府天文方の手付へと転身した六二歳の忠敬と、幕府御普請方から算学師へと転身した六〇歳の安明。この二人は、天文方と連れ立って祭り見物をすることなど考えられない、それぞれ全く別の人生を生きてきた。非常に遅いスタート、その後の華麗な転身と、二人には共通点がある。しかしその人生の一体どこで二人は知り合ったのか。もっとも可能性があるのが利根川流域での堤防工事で知り合ったという説である。

二十三歳で山形から江戸に出て来た安明は利根川や鬼怒川流域の堰の改修工事などにあたり、その手腕を大いに発揮して活躍した。その様子は、自伝『自在物談』に詳しいが、佐原近辺でも治水工事に従事していたという。名主であった忠敬にとっても治水工事は重要な仕事だった。天明三年、忠敬は佐原村元宿の名主として大水で破壊された堤防の修理にあたることになった。忠敬はこの工事を見事やり遂げ、その功によって領主の津田氏から苗字帯刀を許されることとなった。忠敬はもちろん優秀ではあるが、土木工事はやはり専門知識と経験が必要だろう。忠敬は安明から治水工事について有用な助言をうけた可能性がある。安明と出会えたことは忠敬の人生にとって非常な幸運だったといえるのではないだろうか。

日本一の算術師をめざして

安明は四十一歳のときに将軍の代替わりにあたり失職した。しかし安明はこれをむしろ好機ととらえ、学者として数学の研究に打ち込むことを決心した。以後、安明は「最上流」を旗揚げし、関流の藤田貞資と二二年間にわたって論争を展開しつつ多数の著書を著し、多くの門人を育てることとなる。安明は「日本一の算術師」をめざした。彼が関流藤田資貞に論争を挑んだのは藤田が当時において日本一の算術師と見込んだからである。藤田を倒せば、自分が日本一の算術師となる。その心意気をもって安明は日夜数学の研鑽に励んだ。しかし当時は関流にあらずんば算者でなき観があったから無謀にもみえる挑戦であった。安明は「高名を求るのに非ず」、ただ高みをめざし一心不乱に数学の研究に邁進したのであるが、その名はいやが上にも高まり、門人は群をなしたという。この安明の存在が忠敬の刺激とならなかったはずはないであろう。安明が闘志をむき出しにして挑んだこの論争は数学に対する社会一般の関心を呼び起し、日本の和算のレベルを引き揚げる効果をもたらしたと言われている。

質素なくらし

そのような高い理想をもちながらも、安明の暮らしぶりは非常に質素なものであった。安明は二三歳のときに山形から江戸に出て、最初は本所石原の弁天小路に住み、その後、北本所に引越した。三十五歳の時の手紙に、「座敷六畳、勝手四畳の小家でやっと小女一人を召し使って」いたが、宅替えして「座敷六畳、勝手四畳、外に二畳の小部屋、都合十二畳の所にて、小女一人召使申候」と書いている。石原弁天町の家が二室、北本所の家が三室。文化四年の永代橋事件の際には北本所の私宅へ帰ったと

「会田」宅

言っているから、六〇歳の安明はまだ北本所にいた。彼は少なくとも文化六年まではこの三室の家に住み、文化七年から文化九年の間に浅草に移ったらしい。浅草の家の間取りというのが日本学士院に保存されていて、それによると居室は前の家よりよほど広くなっているとのことであるが、それでもかなり小さいようだ。この浅草の家の住所は、没後まもなく建てられた山形・禅昌寺の顕彰碑に「江戸浅草堀田原住居」と記されている。堀田原とはどの辺だろうかと思い江戸切絵図で調べてみると、浅草の天文台より北へ五百メートルほどいったところの前田兵部屋敷の横に「堀田原ト云」という説明書きがあった。しかもよく見ると、すぐ近くの加藤於菟三郎の屋敷地の角に小さな家が三軒並んでいて、その中の一軒が「曾田」である（青い矢印）。安明の身分に相応しい敷地の大きさであるし、これ以外に堀田原周辺には会田姓は載っていない。この家が会田安明家であるという確率は高いと思われる。安明がこの浅草堀田原の家に住んだのは晩年の長くとも七年間であり、それまでの四〇年間は二室ないしは三室の質素な住まいで生活していたことになる。自伝『自在物談』の中でも「今すでに年を経て、けんやくを守りしゆへ、貨財の蓄へも、あらかじめ備りし也」と言い、蓄えがあるおかげで失職の後も数学の道に邁進できるのだと言っている。関流との論争で世間をわかせてはいるが、実際は非常に堅実な人柄であったようだ。どうやら忠敬と価値観が似ているように思える。お互いに安心して付き合える相手だったのではないだろうか。

律義なつきあい

会田安明は忠敬の江戸日記によく登場する。「会田算左衛門へ行く」「会田算左衛門来る」と、しじゅう行き来があったように見える。しかし、安明が日記に現われた日付をよく調べてみると、算左衛門が伊能宅へやってくる場合、それは必ず何か理由があって訪ねて来ていることがわかる。手元の江戸日記（抄）で数えてみると、安明が忠敬を訪問した日は十二回あるが、ほとんどが理由のわかる訪問である。冒頭で紹介した深川八幡祭見物のほか、測量出立の送別、忠敬の深川から亀島町への引越し見舞、その他は忠敬の内弟子となっている二男にかかわる件での相談やお礼で訪れたとみられるものなどである。つまり安明は用もなくふらりと訪れる、ということはなく、相当の事情があるときのみ訪れていた。それもそのはず、忠敬宅と安明が住んでいた北本所はかなりの距離がある。安明は四十一歳以降は数学の研鑽に没頭し、三十年間ほとんど外出することもなく生涯二千冊にものぼる著書を著した。そのため足腰が弱り、晩年は歩行することも困難だったと言われている。また多数の門人を抱えて多忙をきわめていたから、ふらりと立ち寄る、ということは不可能だったのである。しかし逆に言えば、そのような多忙な中でも忠敬が測量行に出立するときや

曾田安明肖像（内海家所蔵）

引越していく時にはきちんと送別の挨拶に来ていたということでもある。貴重な時間を割いてもけじめと礼儀を重んじる、律儀な人物だったようだ。一方、測量日記のほうには安明の名前が二回だけ出て来る。第五次測量の見送りの際と、同じく第五次の帰着直後の二回である。見送りに来たことのない安明が第五次測量のときだけ来たのは、このときから測量が幕府事業となって安明の門下生である市野金助が下役として参加することになったからだとみられている。このとき、忠敬との共通の友人・司馬江漢とともに泊りがけで川崎宿まで見送りに来ている。また、この第五次測量の時だけ、帰着の翌々日に忠敬のもとを訪れている。それはこの測量行に参加したこの市野金助が測量の途中で帰ってきてしまったのでそれについての詫びのためか思われる。弟子のことでは非常にまめに対応する性格だったようだ。

弟子を魅了したカリスマ性

安明は忠敬より一年早く、文化十四（一八一七）年に没した。晩年、故郷に帰り郷里で最上流の数学を教えたいと願い、地元でも大いに期待していたが、家財を山形に送った直後に病に冒され帰らぬ人となったと伝わる。「武江年表」には「十月廿六日、最上流算術の師曾田算左衛門安明卒」、それに割注して「七十一歳、藤田権平の門人なり、文政二年卯十月其子弟等、浅草奥山へ碑を立て、鵬齋先生文を撰す」とあり、論争の相手だった関流・藤田貞資の門人ということになっているが、安明が著名人であったことが確認できる。

没後、江戸、山形両方の弟子たちによりさまざまな行事が執り行われた。一周忌には山形・禅昌寺に顕彰碑が建立されたのをはじめ、小祥忌（二回忌）、三回忌（江戸・浅草寺に算子塚建立）、十三回忌、

三十三回忌、五十年祭、百年祭（山形・実相寺に記念碑建立）、百五十年祭（記念出版）昭和五五年（銅像建立）と、各節目ごとに盛大に事業が執り行われている。なぜこんなにも弟子に慕われるのか。安明の一番弟子だった渡辺治右衛門が師の霊前に捧げた著書『謹薦算法』の序文にその理由を垣間見ることができる。曰く「其高恩慈父の如し、嗚呼我のみにあらず、先生の門子を愛し給ふ慈恵の厚き、子の如くならざるなし。（中略）都て先生著し給ふ書一千四百余巻に及べり。先生の功誰かこれを賛嘆せざらん哉、尊きかな、此道にをりてはこの師の前にこの師なし、この師の後もこの師なかるべし。（中略）只嘆きになげきて、遥に香花を捧げるのみ。」と、悲痛なまでに恩師思慕の心情をつづっている。安明は弟子思いの愛情深い人であったようだ。安明の自叙伝『自在物談』を読むと、安明自身が親の深い愛情に育まれて育った人であることがわかる。親が自分をのびのびと育ててくれたこと、「子をおもう親の心ざしの厚き事を深く感涙」したことつづられている。親から受けた慈愛を、今度は自分が弟子たちに注いだのだろう。超人的な業績とあふれる愛情を兼ね備えていたことがカリスマ性の源だったと思われる。

共通の人脈

大谷亮吉は『伊能忠敬』で忠敬の主な友人として近藤重蔵、会田安明、司馬江漢の三名をあげ、「忠敬は安明によりて数学上の知識を増進し得たること少からざりしと共に安明は又忠敬によりて多少欧州科学の一端を窺い得しものの如し。」と記している。忠敬が安明から対数についてなどの数学的知識を得ていたことは、忠敬から知人にあてた書簡等で確認されている。一方、安明も天文学に関する知識を忠敬から得たことを手紙に残している。忠敬との共通の友人としては司馬江漢が知られているが、間宮林蔵も小貝川流域で活躍した治水関係の人間であり、安明の関与が考えられる。最上徳内も安明の同郷の後輩であり大変親しい間柄だった。徳内は近藤重蔵と択捉島へ行った人物であるから、重蔵を伊能に紹介したのは安明だったかもしれない。会田の門人である市野金助や山鹿八郎左衛門、松野茂左衛門らの津軽藩士はしばしば伊能宅を訪れているが、忠敬のほうからも山鹿、松野を訪ねたりしており、多方面で人間関係を共有していた。

晩年の肖像

安明晩年の姿をうつした肖像画が残されている。一見、何気ない書斎風景に見えるが、安明が肘をついているのは酒井侯より拝領した梨地の机であり、敷いているのは津軽侯より拝領した唐桟の座布団とラッコの皮の敷物である。背後の箱には日夜研鑽し、書きに書いた二千冊の膨大な著作物が収められている。この肖像画は安明七〇歳のときに画家国光という人に写させたものという。したがって人物も品物も実際の姿を伝えているものである。

『江戸日記』の文化十一年九月十三日に「会田三左衛門　津軽侯御屋舗へ罷越」とある。これはおそらく安明が津軽侯からこれらの品を拝領した日のことを特記したものだと思われる。だとすると、その時安明は満六十七歳、肖像画はその三年後の姿である。

津軽侯からこれらの品々を拝領した背景として、安明が津軽藩邸に近い本所に長年住んでいたため、参勤交代で江戸に出た津軽藩士が数学を学ぶために安明に入門する者が多かったということがある。また、津軽藩は隣の南部藩と反目し合っていたので、南部藩で盛んだった関流に対抗して津軽藩では最上流を学ぶ者が多かったという事情もあったようである。

安明の家族

安明の家族については、墓、山形・禅昌寺の位牌と過去帳、および算子塚によって知ることができる。妻は八八歳の高齢をもって死去したと伝えられ、江戸番場町即現寺（廃寺）にあった墓には妻の戒名「劫外院無数妙壽大姉」が併記されていた。また浅草寺の算子塚の裏面には安明の親族とみられる四名の名前が以下のように列記されている。「東都浅草住　曾田善左衛門安豊、同牛込住　渡邊啓次郎慎、同　浅草住　曾田摠太郎安重、同　赤坂住　曾田與市郎経豊」。曾田善左衛門は長男（一説には養子）であり摠太郎は孫、與市郎は甥だといわれている。渡邊啓次郎慎は周知のとおり安明の二男であり忠敬の内弟子である。この渡邊慎の存在が安明と忠敬との関係を特別なものにしているが、このことについては会報四九号～五四号『和算の人脈』で安藤由紀子氏が詳細に考証されているのでそちらを参照されたい。渡邊慎は忠敬の遺嘱により『量地伝習録』を著わし伊能測量の唯一の後継者と目されている、伊能測量研究上の重要人物である。（了）

【参考図書】
『曾田安明と伊能忠敬』三上義夫「房総郷土研究」
『曾田算左衛門安明』平山諦、松岡元久編　昭和四一
富士短期大学出版部叢行　百五十年祭記念出版
『山形の和算』昭和八年三月一日　「山形の和算」
編集委員会　会長　板垣貞英
『最上流算学師　自在先生禅昌寺碑と曾田重助家　内海与平治家について』東沢郷土研究会
『曾田安明翁事蹟　並　山形県の和算家』大木善太郎
『山形の和算』板垣貞英　山形県和算研究会
『会田算左衛門安明展―胸像建立記念特別展―』主催　山形市立図書館
『和算の人脈』安藤由紀子　「伊能忠敬研究」第四九・五〇・五二・五四号　伊能忠敬研究会
※題字下の肖像『会田算左衛門安明』平山諦著所収

会田安明の史跡を訪ねて

【山形の史跡】

①生地跡（ほっとなる広場）

会田安明の生まれたところは諸説あるが、現在の山形市七日町の生まれというのが通説である。詳細を山形市教育委員会に問い合わると、郷土資料館から「かつて七日町大手角にあった津島屋という洋品店のあたりらしい」との回答があった。「津島屋」を手がかりに図書館で調べ、『わが青春時代山形市七日町商店街』という本に昭和二十八年頃の七日町商店街の町並図があるのを発見。「津島屋」が大沼デパートの東向い側、現在の「ほっとなる広場」の位置であることが確認できた。行ってみると、その広場は繁華街のビルの谷間にぽっかりあいた空間である。その日は「ふれあいコンサート」というイベントの看板が立っていた。「会田安明生誕地」の標識がないか念のため捜してみたが、見当たらなかった。『わが青春時代―』によると、このあたりは江戸時代には商人や職人が住んでいたところだという。安明の父は農を嫌い、足軽・会田氏の株を買って山形城下に出て来た人である。安明はお城にほど近い賑やかなこの地で、商人や職人の子らとまじりあって育ったようだ。山形での子供時代の様子は自伝『自在物談』に活写されていて面白い。

ほっとなる広場から大沼デパートを望む

②銅像（山形市立図書館）

霞城公園（山形城址）の県立博物館に行き、会田安明に関する展示があるかどうか尋ねた。受付の女性は「ちょっとお待ちください」と奥に入って行ったが、少しして副館長さん以下、四人の方が説明に出て来られた。「会田安明に関する展示はここにはありません。でも市内の公園に銅像があります」。銅像があるというのは初耳だったので、さっそく道順を教わって行ってみることにした。銅像は市の中心から南に二キロほど行った小荷駄町公園内の市立図書館にあった。図書館の前と聞いて行ったが玄関前には見当たらないので受付で聞くと、すぐそこです、という。今来た道を引き返すと、図書館に背を向け木陰に佇んでいる会田先生の胸像があった。説明によると、この像は安明を顕彰するために昭和五五（一九八一）年、山形ロータリークラブの寄贈により建てられたものである。写真を撮るため周囲の雑草をかき分けて正面にまわった。会田安明の肖像画は顎が長めの細面であるが、それに比べるとかなり丸顔。沈着で重厚な印象である。市立図書館には算学や会田関係の本が何冊も並んでいた。

前日訪ねた遊学館の県立図書館では会田安明関係の資料があるかと尋ねると、「会田安明？それはどういう人ですか」と聞き返された。「山形出身の和算家で有名な人です」と説明したが、しばらく待たされた後に「わかりませんのであちらのパソコンでお調べ下さい」といわれた。会田安明は山形市では大変顕彰されているが、県レベルではあまり知られていないようである。

曾田算左衛門安明之像

③墓所（実相寺）

会田安明の山形の墓は七日町から南に一キロほど下った十日町にある。繁華街から人通りの少ない広い道を歩いていくと実相寺（浄土宗）があった。門を入って見まわしたが、境内にはそれらしい墓がない。庫裡のブザーを押すと作務衣姿の若いお坊さんが枝豆の束を片手に出てきた。「墓は裏口から出て道路を渡った向こう側です。ええ、記念碑と墓と一緒になってますから。全部埋まってます。」と言い終わると忙しそうに戻って行かれた。言われたとおり行ってみると、法名が書かれた墓のような、記念碑のようなものがあった。全部埋まっている、ということは、分骨したのだろうか。実相寺のこの墓は大正五年の会田安明百年祭を記念して門人会田彦太郎が建てたもの。碑面の諡号は「数学院殿無量自在大居士」と「院殿」＋「大居士」に格上げされている。蜘蛛の巣を払い、写真を撮った。

帰途、弟子たちの墓がある長源寺に立ち寄った。長源寺は安明の百年祭を執り行った寺である。飲食店がひしめく歓楽街「花小路」の一角に隠れるようにあった。赤提灯や青いネオンが灯り始めた頃、迷いながら辿り着いた。境内は狭かったが一隅に算学者や文人の墓碑が並び、昔日の学術文化の残香を漂わせていた。

数学院殿無量自在大居士

④顕彰碑（禅昌寺）

山形市郊外の禅昌寺（曹洞宗）は会田家代々の菩提寺である。ここに安明の顕彰碑があるので見に行った。山形交通のバスセンターから三〇分ほど走った郷倉前という停留所でバスを降り、お寺の屋根とおぼしきものを目当てに歩いてゆくと禅昌寺に着いた。記念碑らしいものは見当たらないので裏の庭にまわってみると、手入れされた築山に「元祖自在先生碑」があった。

想像していたより大きく立派な石碑である。この碑は安明が亡くなった翌年、一周忌に山形の弟子たちが建てたもの。翌年の三回忌には江戸の弟子たちが浅草に顕彰碑を建てている。今も浅草寺境内の新奥山に建っている「算子塚」がそれである。亡くなって早々に山形と江戸と両方に立派な顕彰碑が建てられたことからも、安明が当時非常に尊敬されていたことがわかる。現在では伊能忠敬のほうが知名度はずっと高い。しかし彼らが生きていた時代には、安明は関流との論争により広く名前が知られていた。単に有名だっただけではなく、弟子たちの絶大な人望を集めていたようである。この寺にある会田家代々の墓を探したが会田家と書かれた墓は多く、お寺の人も留守で結局わからなかった。安明自身の墓はここにはないので、諦めて帰った。

最上流算術師　元祖自在先生碑

【江戸の史跡】

①墓所（金地院）

会田安明は晩年、山形に帰りたいと希望して果たせず、江戸で没した。墓ははじめ本所番場町の即現寺（臨済宗妙心寺派）に建てられたが、震災で墓石が壊れ、寺も廃寺となったので、芝の金地院（臨済宗南禅寺派）に移葬された。金地院は東京タワーの真下にあり、金地院崇伝が開祖という由緒ある寺である。奥州南部家の大名墓が並ぶ一角を右に見ながら墓地に向かうと、正面にこんもりとしたクスノキが見え、その下に安明が移葬された墓がある。墓碑前面には一本稲穂にカタバミの家紋、その下に「曾田家之墓」と刻まれている。墓碑の左側面には「大正十二年十月十七日　本所區即現寺ヨリ改葬ス　曾田ふさ子」とある。即現寺には安明と妻の戒名を刻したものを含め四基の墓があったが、ここは会田家代々の墓となっている。境内にはもう一基曾田家の墓があり、墓碑の右側面に「天保八年丁酉（剥落）五日子　祠堂全五両施入　曾田善左衛門」と安明の長男の名が記されている。「もともとこのお墓があったので、即現寺からこちらに改葬されることになったのでしょう。会田家のご子孫の方は今もお参りに来られています」というお寺のお話であった。

曾田家之墓

②算子塚（浅草寺境内）

会田安明が亡くなった翌年の三回忌に江戸の弟子たちが浅草寺境内の新奥山に顕彰碑を建てた。安明が日頃使っていた算木（算子）を埋めてその上に石碑を据えた「算子塚」である。堂々とした立派な石を用い、撰文と揮毫は当代随一の文人で書家の亀田鵬斎、鐫（字彫り）は忠敬の墓碑と同じく名工・広瀬群鶴という豪華な碑である。碑の前面には安明の経歴と業績を詩文で刻し、裏面には門人高弟と親族の名を列記している。

この算子塚と並んで「五瀬植松先生明数碑」が立っている。安政年間に算学者植松是勝が自身の業績を顕彰するために建てたものであるが、碑文の内容が「暗に算子塚を弄し、会田安明を刺すもの」だという。すなわち会田安明が創意したと主張する「天生法」なるものは、実は関流の「點竄術」に外ならず、これを会田の創意というのは世を迷わすもの、と批判しているとのこと。植松英三郎是勝（字・五瀬）は上総國山邊郡（現・山武郡）出身の関流算学者であり、撰文者・藤良同は本名を布治（古川歸一郎といい、片貝出身の漢学者である。安明没後四十余年に忠敬の故郷に近い人々によって安明を難ずる碑が建てられたのは皮肉である。

明数碑　　狂歌碑　　算子塚

伊能忠敬、金沢測量三日間の謎

河崎倫代

はじめに

今年二〇一三年は、伊能忠敬の加賀藩測量から数えてちょうど二一〇年になる。これまで何度か加賀藩測量の実態を地元に残る史料から紹介してきたが、すべて石川県北部、いわゆる「能登」地方にかたよっていた。南北に細長く日本海に突き出た石川県の南部を「加賀」地方という。県都金沢は加賀地方にあり、江戸時代には最大の外様大名前田家百万石の藩都として栄えた。金沢市立玉川図書館近世史料館には「加越能文庫」という史料の宝庫があるが、加賀地方の測量実態を記録した史料には未だ出会えていない。

地元史料が未発見であろうと、忠敬の『測量日記』と伊能図が残っているではないか。そう自らに言い聞かせて、二〇一〇年秋の「完全復元伊能図全国巡回フロア展in金沢工業大学」ミニ講演会では、「伊能忠敬が金沢で過ごした謎の三日間」というタイトルに挑んでみた。はたして聴講者に納得していただけるような「謎」を提示できたかどうかはおぼつかない限りである。今号ではもう少し考察を深めたいと思う。

一、『測量日記』と大図に見る金沢測量

現在の金沢市域三日間の測量（以後、金沢測量と略す）に関しては、地元史料がない、他の藩都に比べて測量日記は簡潔、大図は簡略すぎる。加賀藩の外港宮腰（『測量日記』には「宮越」の記載もあるが、「宮腰みやのこし」が正しい。明治以降「金石かないわ」と改称）と金沢城下は一本の直線で結ばれていて、途中の村名が一切記されていない。私事で恐縮だが、筆者は現在、この直線道路沿いの旧畝田村の西のはずれに住んでいる。また、夫の生家は旧宮腰町上越前町にあった。測量隊の宿所は下越前町、古くは同じ越前町内だった。

このような縁を知りつつも、これまで当たり障りのない関わり方しかしてこなかったことを反省し、金沢測量に関する私見をまとめておきたいと思う。

まずは日記を読み、大図を見てみよう。

『伊能忠敬測量日記』（享和三年）より

六月二九日　（前略）九ツ後宮越下越前町に着。止宿赤土屋小右衛門。此夜曇る。雲間に測量。

七月朔日　朝より雨天。逗留。佐渡国小木湊并能州西・東海辺手分測量先触并添触を出す。此夜晴天、測量。

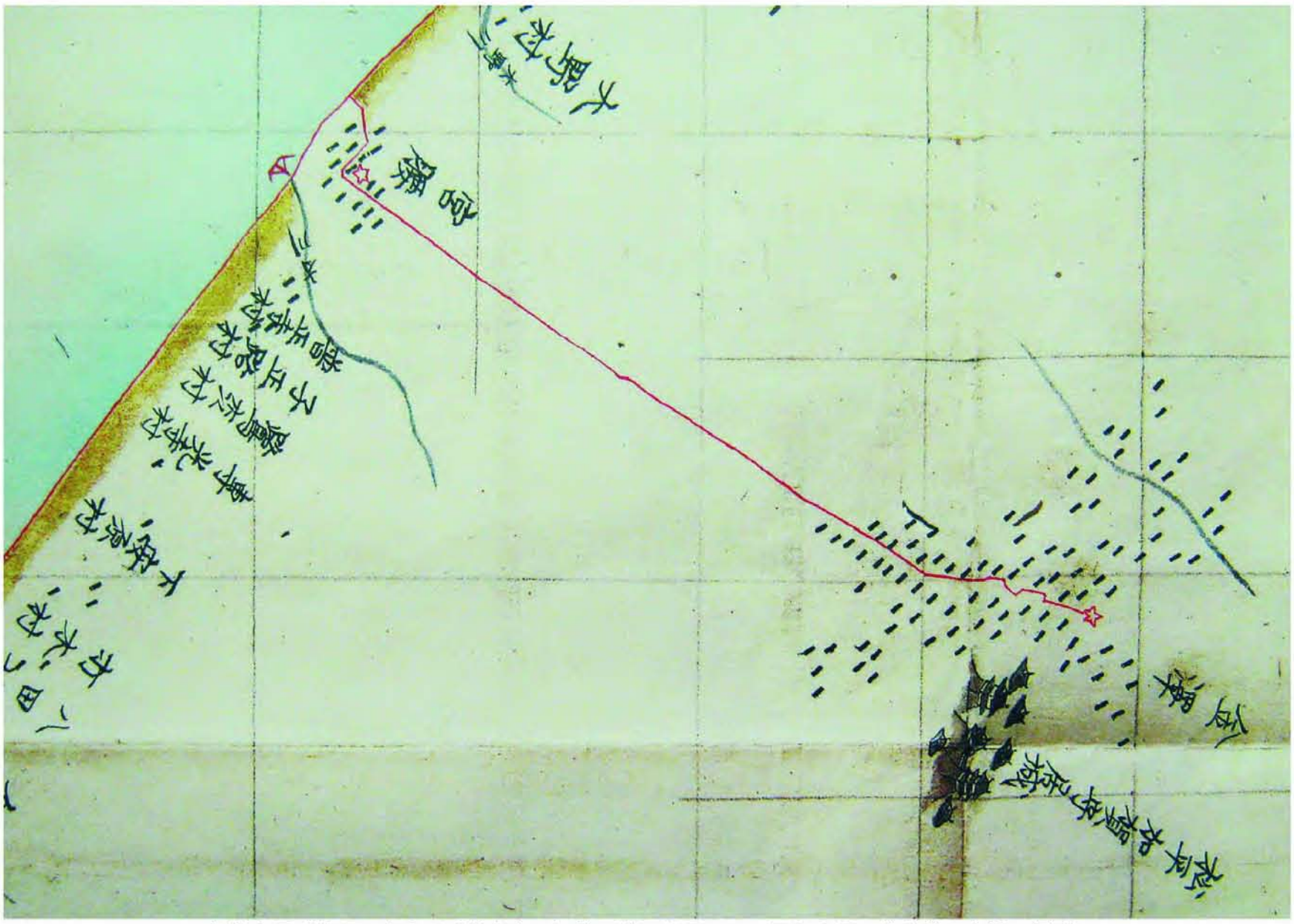
七月二日　朝より晴天。六ツ半頃宮越町出立。測量に量程車を用。四ツ後に金沢城下尾張町へ着。止宿住吉屋太兵衛。午前晴、午後曇晴、夜は曇る。曇間測量。子後大風雨。金沢町は石川郡なり。此所より粟ケ崎まで泊触を出。同前。

七月三日　暁七ツ頃大風雨。六ツ後風雨頗止。六ツ半後金沢城下出立。途中風雨。四ツ頃宮腰町へ着。風雨暫時見合、中飯をなし、雨止大曇雨。九ツ半頃宮腰出立。（後略）

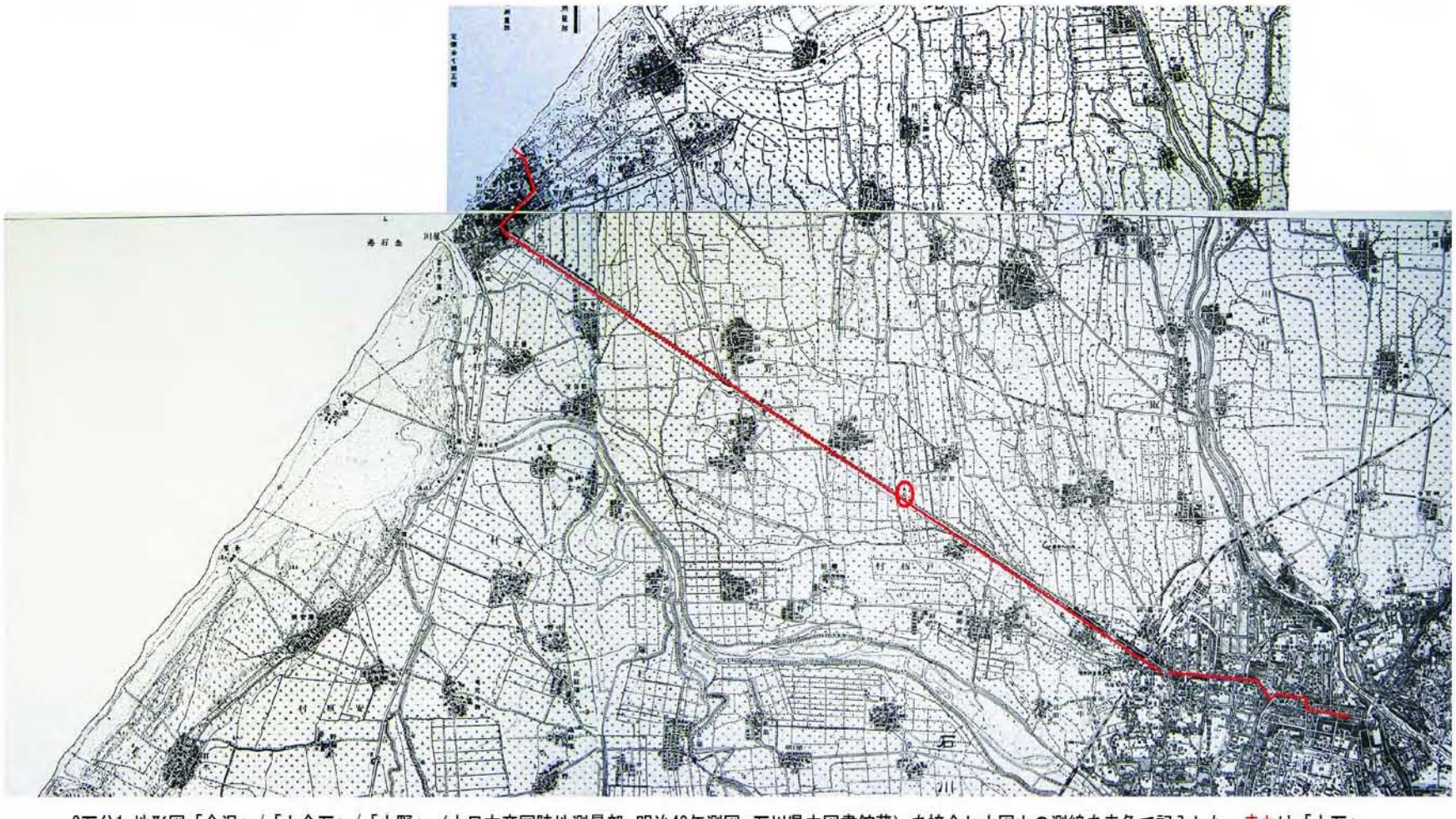
忠敬一行の金沢測量三日間について、日記と大図は多くを語ってはいない。そこから生じた疑問点を列挙してみた。

- 『測量日記』の記述が簡略なのはなぜか？
- 『測量日記』に人名が登場しないのはなぜか？
- 宮腰町の☆天測場所は下越前町だったのか？
- 宮腰・尾張町間の村名が記されていないのはなぜか？
- 宮腰・尾張町間の測量方法はどんなだったか？
- 宮腰から城下への測線が直線なのはなぜか？
- 金沢城下の☆天測場所は尾張町だったのか？
- 尾張町の宿所住吉屋太兵衛宅への訪問者はいたか？
- 尾張町での天文測量には見学者はいたか？

大図に見る北陸３城下図（筆者作成　方位・縮尺は不統一）いずれも海岸から数キロメートルの所にあるが、金沢だけは量程車を用い、途中の村名がない。



伊能大図「金沢」部分（「完全復元伊能図全国巡回フロア展in金沢工業大学」会場で撮影）



2万分1 地形図「金沢」/「上金石」/「大野」（大日本帝国陸地測量部 明治42年測図 石川県立図書館蔵）を接合し大図上の測線を赤色で記入した。赤丸は「大石」

二、『測量日記』の記述が簡略なのはなぜか？
人名が登場しないのはなぜか？

享和三（一八〇三）年二月、幕府から測量隊来藩の通達を受けた加賀藩は、その対応のために独自の情報収集をおこなった。その結果、測量には不必要と思われる村高・家数などの書き上げを要求する測量隊を「隠密がましき」と警戒。村高・家数、距離数などは答えないようにと指示した。

『測量日記』より　（傍線は筆者）

六月二七日　（前略）

松平加賀守領分　　同国同郡　　安宅浦

従是、断二付、高・人家を書さず

午後安宅浦二着、止宿田端町網七左衛門、此夜曇天不測量

右領分界より十村大庄屋の番代と云者出て案　内す、村高・家数を問とも領主より差図なしと不言、其外山島を問共不言、漸測量地の村名を聞のみ

（後略）

安宅（小松市）は歌舞伎十八番「勧進帳」の舞台となった地である。弁慶・義経一行が奥州平泉へ逃れる途中、北陸道に設けられた安宅の関と関守富樫左右衛門泰家に行く手を遮られる。同じように、忠敬一行も測量行の行く手を阻まれたような感を抱いたことだろう。以後三十九日間、測量隊は緊迫感の中で作業をおこない、道案内人への質問は他藩に比べて控え目、日記の記述も簡略にならざるを得なかった。

また、他藩では藩士や町役人・大庄屋クラスの出迎えや挨拶を受けることが多く、忠敬はそれらの人物の姓名・役職名などを詳細に記録した。しかし、金沢測量三日間の日記には一名も登場しない。訪問者はゼロだったのか、それとも事情があって記載しなかったのか。おそらく道案内の村役人たちは打合せに来ただろうが、藩士・十村（他藩の大庄屋）たちは挨拶に出向くことはなかったはずである。

加賀藩が事前に幕府から得た情報では、忠敬は幕府天文方高橋至時の弟子だが、「もと百姓・今は浪人」で、公儀には召し抱えられていない人物であるという。そこで加賀藩庁の出した結論は「重き扱いには及ばず」というものだった。藩士・十村クラスは挨拶に出さず、十村の手代と村役人に対応させた。しかし、十村は内々に宿所へ赴き、手代から報告を受けて、それに応じた指示を出しているのだから、ややこしい。つまり、加賀藩では身分社会の物差しでもって測量隊の待遇を決めたのである。

第一次～四次測量は、忠敬の個人事業に幕府が便宜を与え補助金を出すという形だったから、各藩の対応はまちまちだった。多くは「幕府御用」に重きをおいて丁寧な応対と協力をしたが、加賀藩のように必要最小限の協力でいいという姿勢で臨んだ藩もわずかだが存在した。

三、宮腰町の☆天測場所はどこか？

伊能大図・中図に描かれた☆印は、夜間の天文測量実施地点を示している。各地の緯度を測定し、地球の大きさを求めて正確な暦を作成するために必要な作業だ。全測量日数三七五三日のうち、天測日数は一三三五日とされている。たとえ曇天・小雨天でも天測機器を設置して機会をうかがった。それほど重要視していたのである。

金沢測量では、宮腰町と尾張町の二カ所に☆印がある。筆者は長い間、宮腰町の☆印は、宿所赤土屋小右衛門宅だと思い込んでいたのだが、その赤土屋の場所は特定できずにいた。ところがある時、☆印の位置が下越前町とは明らかに違う場所に描かれていることに気づいた。「元禄年中宮腰町絵図」に描かれた下越前町には、間口三間・奥行六間ばかりの町屋がびっしり軒を連ねている。これでは、忠敬が先触で要求した天文測量用の「十坪ばかりの空き地」を持つ家は無さそうだ。そこであらためて大図の☆印が描かれたあたりを宮腰町絵図の中に探すと、下越前町から二、三百メートル離れた宮腰往還口に「本龍寺」があった。寺院なら天測機器を設置する十坪ばかりの土地と、星々の観測に適した夜空の広がりが期待できる。そう考えて現地を訪れると、そこには今も本龍寺があった。享和三年六月二九日・七月一日（一八〇三年八月十六・十七日）の両夜、忠敬たちはこの境内で天文測量をおこなったと確信できた。

あらかじめ先触で「十坪ばかりの空き地」のある宿を求めていても、到着してみると空き地のない宿もあった。宿替えを要求してもすぐに対応できない場合は、近くの空き地に天測機器を設置して夜間測量をおこなった。宮腰町の場合もそうだったと考えられる。

二〇一〇年十月のフロア展プレイベント、宮腰町・尾張町間を歩く「伊能ウォーク」の出発式は、この本龍寺境内でおこなわれた。

「旧下越前町」の標柱

下越前町と本龍寺—「元禄年中宮腰町絵図」
（旧宮腰町々年寄役中山家蔵　金沢市立図書館作成復刻版）

天文測量が行われた本龍寺境内

本龍寺で「伊能ウォーキング」出発式（2010年10月）

四、宮腰町・尾張町間に村名が記されていないのはなぜか？金沢城下尾張町までの測量方法は？

前掲の明治四二年測図二万分一地形図は、大日本帝国陸地測量部が三角測量によって作製したものである。伊能測量からおよそ百年たっているが、村落の位置や規模はさほど変化していないと考えられる。宮腰往還を行く測量隊には、寺中村・観音堂村・畝田村・松村・藤江村・北村・二口村・長田村などが村落として認識されていたはずである。しかし、一村も記されていないのはなぜか。道案内人たちが答えなかったか、加賀藩の意向を知った測量隊があえて尋ねなかったのか。前掲図で示したように、福井・富山各城下までの村名は詳細に記されている。では、大図上の赤い測線は如何にして引かれ、正確性はどうなのだろうか。

『測量日記』には、宮腰町から金沢城下までは「量程車」を用いたとある。これは車輪の回転数で距離を測る道具で、高橋至時が設計したという。しかし、でこぼこ道・海岸・岩場などの多い沿海測量では正確な測定は不可能で、忠敬はほとんど使用しなかった。ただ、熱田から名護屋（名古屋）城下へ向かう際に「量程車にて測る」という記述がある。名古屋といえば御三家尾張徳川家の城下であり、梵天を立て間縄を引いて距離を測る、通常の測量をひかえたと思われる。金沢城下へ向かう際にも同様だったと考えられる。しかし、量程車の不正確さを知っていた忠敬は、同時に歩測測量もおこなったに違いない。また、直線道路が終わり城下へ入ってからの道路には曲折があるのだが、それがほぼ正確に描かれている。おそらくは、杖先羅針盤で方位を測り、歩測と量程車を併用し

て距離を測定したと考えられる。

「伊能ウォーク」のお供をした
〝量程車もどき〟

五、宮腰町から城下への測線が直線なのはなぜか？

宮腰町から金沢城下へ延びる道路を「宮腰往還」といった。江戸時代の城下町にこのような直線道路があったことに驚かれるかもしれないが、宮腰往還の歴史は古い。織田信長配下の武将として活躍した前田利家が、本能寺の変後、豊臣秀吉から加賀国を加増され、金沢へ入城したのは天正十一（一五八三）年である。以後、城郭を築き内・外総構堀を廻らすなど、城下町としての整備が進められた。元和二（一六一六）年には、三代藩主前田利常によって寺町寺院群の形成、宮腰往還の新設などが実施され、城下町の防衛と振興が画された。

特に、宮腰往還は、それまでの集落と集落とを結ぶ道ではなく、金沢城下から外港宮腰へと一直線に伸びる計画道路であった。『三壺記』によると、従来の往還は「九折にて見苦し」かったので、城から「直に見切らん為」にという政治的・軍事的な理由によって新設されたのである。長さは金沢町端より宮腰町まで一里十四町（約五・五キロメートル）、道幅二間とも三間とも記されている。荷車が行き交うことのできる幅があったはずである。明治三一（一八九八）年の馬車鉄道、大正三（一九一四）年の電車開通のため一部拡幅され、密に植えられていた松並木もいくらか伐採されたが、それでも大正末期にはまだ北側に二百十六本、南側に四百二十三本の松が数えられたという。昭和十六年撮影の写真「雪の宮腰往還」は、電車の軌道が見えるものの、両側に松並木が続き、測量隊が見たのとほとんど変わらぬ景色であろう。ただし、これは冬景色である。

では、およそ五・五キロメートルに及ぶ直線はどのようにして引かれたのだろうか。『新山田畔書』には「広岡ノ町端ト宮ノ腰入口二夜中篝火ヲ焼、其間四・五ケ所二又篝火ヲ立、標示ヲ指テ縄張究リ道筋ヲ作ル」とある。作業は夜中。まず起点と終点に篝火を焚き、その間の四、五ケ所にも篝火を立てて、それらの篝火が一直線になったところで縄を張ったという。こうして、金沢城の一角に立てば、外港へ通じる道が見通せ、物資の運搬や人馬の往来が監視できるようになったのだ。宮腰には能登からの塩藩政期の回米、その他、木材・木炭・薪など様々な物資が集積し、城下へも運送されていた。

雪の宮腰往還—松並木の片側に電車が通っていた
（昭和16年）

「宮腰風俗図屏風」（石川県銭屋五兵衛記念館蔵）
手前の松並木が宮腰往還。人馬が行き交っている。
２本の参道の奥が大野湊神社の社叢

上，宮腰往還の馬車鉄道（明治31年開通）
下，現在の金石往還（旧宮腰往還）
往時を偲ぶ松並木は残っていない

六、「大石」余話―伊能忠敬の腰掛け石？

金沢城公園で今一番の関心事は、玉泉院丸跡の発掘調査・整備である。石川県の発表では、石垣と庭園が一体となった高低差二二メートルという大変立体的な、他には類を見ない大名庭園であったという。目下、平成二七年春の暫定開園に向けて整備が進められている。

この玉泉院丸の作庭にあたって、能登から数多くの庭石を運び出し、宮腰港で陸揚げして城下まで運ばせた。中に亀形をした自然の奇石があったが、往還の中ほど、藤江村を過ぎた辺りで亀の首が欠け落ちてしまい、そのまま道端に打ち捨てられたという。寛永十一（一六三四）年のことである。以来、大正十五年（一九二六）に藤江村の高鞆神社境内に移されるまでのおよそ三百年間、往還を行き交う人々の目に必ず映る光景となった。なぜなら、この石は上面が平らで、横二・五メートル、縦一・五メートル、地上高〇・六メートルの巨石だからである。

今は、小さな神社の境内でひっそりと眠っているが、首が欠けるというハプニングがなければ、玉泉院丸の主として藩主一家の覚えめでたく、「亀は万年」の命を全うしたであろう。しかし、「藤江の大石といい、以て道程を量るの標に代えたり」と説明板に記されているように、多くの人々に愛でられた。明治四二年測図の前掲地形図にも「大石」と明記されている（赤丸部分）。さらに、側面中央付近には「不」に似た「几号水準点」を示す標が刻まれていて、往還沿いにあったときは高低測量の水準点としての役割も担っていたことが知られる。明治期の几号水準点については、「設置が明らかになっているのは全国で約三四〇ヶ所あり、現存しているのは一五〇ヶ所程度」（上西勝也氏ブログ）といわれる貴重な存在なのだ。「大石」は搬出・運搬に携わった多くの人々の労苦が報われるような歴史を刻んできたと言えよう。

伊能忠敬も見た「大石」は、大正期の往還拡幅工事の際、藤江村の高鞆神社境内に移された（２０１３年１月筆者撮影）

七、金沢城下の☆天測場所はどこか？見学者はいたか？

雨天のため宮腰町で延泊した測量隊は、七月二日（新暦八月十八日）、宮腰往還を測り金沢城下尾張町住吉屋太兵衛宅に入った。住吉屋は手判問屋、すなわち関所の通行手形〝手判〟の発行事務代行を許された旅館だった。

ところで、前掲大図上の測線をもう一度よく見ていただきたい。明治四二年測図の地形図上にほぼ再現できることがお分かりいただけることと思う。さらに百年後の現在、金沢市街地図上でも同様に再現できる。戦災を受けなかった金沢では、多少の新設・拡幅等はあったが、市街地の道路は四百年前の絵図に重なる部分が多く残っている。従って、☆印はこの地にあった住吉屋の位置を示している。その数軒先には菓子司〝森八〟があった。現在は、森八も住吉屋も尾張町を離れ、別の地で営業している。

明治初期に住吉屋が十間町へ移転し、その跡地に入ったのが、天保十四（一八四三）年創業の諸油問屋「森忠商店」である。現在の建物は大正期に建て替えられたものだが、間口八間、大屋根上に望楼をもつ金沢町屋の代表的建築物である。「伊能忠敬測量隊宿泊・天測の地」として、石川県支部が提供した資料をショーウィンドーに掲示させていただいている。

金沢城下の☆天測場所は、ここ森忠商店
（住吉屋跡地）

ところで、この夜の天測作業に見学者はいたのだろうか。「隠密がましき」として警戒していた加賀藩のお膝元だから、藩士たちも住吉屋へは近づけなかったかもしれない。しかし、可能性は否定できない。なぜなら、忠敬の測量作業はかなりオープンで、例えば二日後の河北郡高松町では、案内役の村役人たちに対して、忠敬自らが天測の見学を勧めたと報告されている。

住吉屋からわずか三百メートルくらい離れた母衣町に藩士沢田吉左衛門の邸宅があった。三年前の寛政十二（一八〇〇）年四月一日に、そこで日食観測がおこなわれた。東京駒場の尊経閣文庫に詳細な観測記録が残っている。観測者は、沢田の師、越中城端（富山県南砺市）出身の天文暦学者西村太冲と弟子小原治五右衛門、沢田の三人である。西村については会報第二八～三〇号に書いた。小原は『測量日記』享和三年五月二一日に登場する。師の西村に代わって、関ヶ原の宿所を訪れて忠敬に面会し、加賀藩測量の際の手伝いを申し出ている。西村自身は、藩庁が沿岸情報漏えいを恐れて城端に禁足を命じたので、忠敬に会うことも測量作業を見学することも叶わなかった。しかし、弟子の一人、越中高木村の測量家石黒信由は、夜間測量を見学し、陸地測量にも同行している。沢田が尾張町住吉屋での天測作業を見学した可能性は否定できない。

もう一人、加賀藩の有能な官吏であり科学者としても数々の業績を残した遠藤高璟がいる。遠藤は十六歳の時に、藩校明倫堂で西村に天文暦学を学び、この時二十歳。自宅も住吉屋からおよそ六百メートルの彦三町にあったので、見学した可能性もあるが、確たる証拠はない。

おわりに

地元史料のないままに、『測量日記』と大図から金沢測量の三日間を描いてみた。いつか埋もれていた史料が現れて、いくつかの謎が解明されることを願っている。

最後に、この原稿を書きながら思ったことを述べてみたい。それは、今の小学六年生たちが、私たち会員の多くが学んだ時代とは大きく変化した教科書で伊能忠敬を学んでいるということである。次の写真は、四ページにわたって特集された教科書で、とにかく驚いた。伊能図と肖像画の定番に加えて、測量機器、御用旗、記念碑なども紹介されている。「百姓の身分だった忠敬がつくったんだって。時代が変化してきたのかな」とか「自分たちの地域の近くに、忠敬が歩いた道がないか調べてみよう」といったコメントもある。すごい！

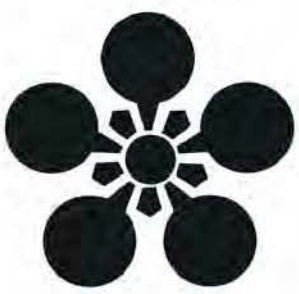
しかし…。

石川県内の公立図書館を横断検索してみると、『千葉県史料 近世篇 伊能忠敬測量日記』（千葉県）所蔵は県立図書館のみ。佐久間達夫校訂『測量日記』全六巻（大空社）は県立図書館と金沢市立玉川図書館の二館と金沢学院大学図書館。『伊能図集成』（柏書房）は県立図書館のみ。『伊能大図総覧』（河出書房新社）は県立図書館と金沢市立玉川図書館・中能登町立図書館の三館だった。これでは、「近くに、忠敬が歩いた道がないか調べてみよう」という課題が出されていても、多忙な教師にとっては手軽に調べようがない。教科書の豊富な内容を見て喜んだのもつかの間、現状は問題が多かった。何か方策はないだろうか。

ヒントは近くにあった。前号「石川県支部ニュース」で紹介した、珠洲市立宝立小学校六年生のインターネットによる「伊能忠敬調べ」だ。ネット上に全測量日記を公開すれば、自分たちの地域を測った伊能測量隊について、誰もがすばやく情報を得ることができる。全国津々浦々の人々の協力によって成就した業績でもあるから、伊能忠敬も同意してくれるのではないだろうか。

『新編 新しい社会 6上』
（東京書籍 平成21年版）

参考文献
『大徳郷土史』大徳公民館 昭和四五年
『加賀の道Ⅰ』石川県教育委員会 平成八年



加賀藩
前田家家紋
（梅鉢）

長崎からの書状

柏木隆雄

忠敬が測量の旅先から差し出した書状は、暦局や高橋景保への報告、奉行所等への通知や手配の依頼、世話になった人たちへの礼状など様々であるが、現在まで残っているものは、佐原の三郎右衛門景敬と娘の妙薫などの親族に宛てたものが殆どである。

私信としての書状は代々伊能家に保存され、後に記念館への寄贈となった。火災や戦火に遭遇せず幸運にも貴重な資料として残った。

これらの書状からは、測量日記に記されていない忠敬の私的行動や考え方、それに商人出らしい鋭い経済感覚などを窺い知ることができ、人間忠敬の研究には大変参考となり興味を覚える。

書状の中で、私が特に関心を持ったのは、二回目の九州測量時、長崎から佐原の景敬と妙薫に宛てた「一筆啓上」で始まる約一千字の私信である。

第八次測量の目的地は九州、前回の未踏地への測量行。難所の屋久島、種子島を含む九一四日にも及んだ長旅であた。

この私信の日付は文化十年九月二日。佐世保で新年を迎えたこの年は、壱岐、平戸、五島と島嶼を測量し、八月一八日に長崎入りした。

町中に二十日間逗留し、九月二日は長崎での最後の日であった。

この間、六月に佐原では景敬が病死、七月十五日には頼りにしていた副隊長の坂部貞兵衛が、福江島で急性の病により亡くなった。まだこの時には景敬の死は知らされておらず、半身不随の重病との知らせも届いていなかった。

景敬の死去以降、佐原から忠敬に届いた書簡は、八月十二日付。病気のことは伝えられたが死亡の事実は秘匿とされ知らされなかった。忠敬は返信を九月二十一日に出している。

景敬が大病であることに触れて心情を記している「三百里も隔地の長崎からは、いかんとも し難く、只々心痛のみ、景敬が少しでも順快すれば大仕合せ。それも六ケ敷ものと覚悟している」この書状の宛名に景敬の名前は無く、妙薫殿となっている。

忠敬は佐原から景敬大病の知らせが届くより少し早く、暦局の高橋景保からの書状で景敬の死を「危篤」という状態で知ってしまった。追って出された私信では「本家主人大病に付」と冒頭で触れながら、妙薫と景敬の妻おりてに宛て、伊能本家の存続のための細部に亘る指示を与えている。

九月二日付の書状に記述を戻す。内容は三つに分けられている。

〈その一〉の要旨

八月十八日、長崎表の測量は予想以上に手間どった。六月に阿蘭陀船二艘、港湾に入り、唐船も四，五艘入り込み長崎は大賑わいである。

蘭船には象が積来。唐船、出島の屋敷も見物した。旧冬、長崎に向かいし折は、町も不景気と聞き及び、大村領、平戸領に入って越年したが、その後、壱岐、対馬、五島と測量を重ねている内に、六月の阿蘭陀船の入津、五島にてそれを知り一同悦んでいた所に、坂部貞兵衛の命終、残念千万。各方面への諸届けは済ませたが、諸事は坂部任せだったので年老（忠敬）は大いに難儀している、と記す。

〈その二〉

長崎入りの折、妙薫から所望の舶来物の毛氈、羅氈等の敷物購入の件。商人出の忠敬らしく、寸法、材質、値段、運送の方法まで仔細に説明している。

結論は上物の調達は難しく、格下のものでよければ、江戸でも入手できる、としている。

もう一つの注文品は白砂糖、蘭船、唐船共に大積みしているので値段は大引下げ、安く手に入ると、伝えている。

〈その三〉

坂部一件に数日、長崎にても測量に手間取り、江戸への帰府は閏、十一月か十二月になりそうだ。そのため、各地の御大名から測量隊への御成と存候、扨我等初、内弟子、侍迄こも」御大名方ゟ国産御贈物之内、売払候も有之、」金子余程有之候間、京都江罷出候而年中ノ」間ニ合候ハヽ、奈良屋新右衛門ノ本店へ有金相渡、」為替ニ而右なら屋ノ佐原店ゟ、其御方江相渡候様」相談可申存候、なら屋新右衛門方も、元ニ不相替」繁昌被致候哉、為替之儀随分宜被思召候ハヽ、」奈良屋新右衛門京本宅何通何町と申所書、」追ゝ書状ニ御申越可被成候、夫共なら屋振合」元来ゟ不宜も候ハヽ、相止ニ可致候、猶追ゝ」可申遣候、以上

九月二日　　伊能勘解由

伊能三郎右衛門殿

妙薫　殿

千葉県史料近世篇文化史料一
伊能忠敬書状131(19-6)の一部

国産の贈物を売り払った。手持ちの金子がかなりの金額になったので、用心に備え、帰路、京都測量の折に、奈良屋新右衛門の本店に立ち寄り、有金を為替に組む。奈良屋佐原店で御方へ渡せるように。これが可能か相談してみるので、奈良屋京本宅は、京都の何通り、何町に在るのか、追々の書状の中で知らせて下さい。奈良屋の便宜が宜しくなければ止めに致しましょう。

この書状の最後の記述は、商人忠敬の面目躍如の文面である。ただし、この為替の件、実行されたかは定かでない。因みに、翌文化十一年三月閏朔日の測量日記は京都洛中での作業、夥しい地名、寺社名、通りの名称が列記されているが、奈良屋の名は見当たらない。測量日記には私的なことは記さないので、それも当然か。

現存する京都奈良屋

京呉服の奈良屋本店は、現在、「奈良屋記念杉本家」として京都下京区綾小路矢田町に古風な町屋を構えている。

杉本家子孫もそこに起居している。「杉本家住宅」は国の重要文化財、「庭園」は名勝に指定され、維持保全のため、公益財団法人の組織となっている。

明和元年（一七六四）奈良屋は東海道を下り、江戸を通り越して遠隔の地、下総国佐原に店舗を創設した。忠敬が佐原で商売に精を出していた時期である。

柏木家に残された文書「為知名前控」には、伊能家、柏木家の祖先の名前と共に奈良屋一族も名を連ねている。

この辺りの事情と奈良屋の歴史は、稿を改めて記述する。（了）

〈参考資料〉
「測量日記」佐久間達夫編著
「伊能忠敬書状」千葉県史料
杉本家保存会会報「綾小路」

会員の伊藤栄子さんに、書状解読の助言をいただきました。

重要文化財指定された京町家杉本家住宅の外観

町家として京都市内最大規模に属する。保存状況も良好で、下京における大店の建築遺構として、極めて高い価値を有するといわれる。

シルバコンパスで伊能忠敬の測量を 体験してみよう

菱山 剛秀

地図を描くためには、表示する対象（「地物」と言います。）の位置関係を知る必要があります。地上の位置関係を知るためには、測量が必要です。

伊能忠敬も地図を描くため全国を測量しました。

測量には目的によって様々な方法がありますが、伊能忠敬の測量方法は、多角測量という種類に分類されます。多角測量というのは、三角、四角・・・多角という用語の多角ですが、トラバース測量とも呼ばれ、各辺の距離と角度を測るものです。

伊能忠敬は、辺の長さを間縄や鉄鎖といった物差しを使って正確に測りましたが、時間的制約などでそれが出来ない場合や、おおよその距離を確認するような場合は、歩測という簡略な方法も使っています。

歩測とは、人が歩く歩幅を物差しにして距離を測る方法です。あまり正確ではありませんが、目的によっては十分使える方法です。

道のりを求めるのなら、距離を測るだけでいいのですが、地図を描くためには、測った距離がどちらの方角にあるのか、つまり辺と辺との関係についても知る必要があります。

図―１歩測による距離の求め方
１複歩が1.5mになるように歩くと
距離が計算し易い
距離＝歩数＋歩数の半分
（例）　＝20歩＋（20÷2）歩
　　＝20＋10＝30m

正確さが求められる測量では、角度を測るために経緯儀という精密な道具を使います。

経緯儀は辺と辺の角度は正確に測れますが、東西南北の基準となる方位は、別の方法で求めておく必要があります。

そこで、伊能忠敬は辺と辺の角度を測るのではなく、各地点で北からの方位を磁石で測る方法を採りました。

この方法は「コンパス測量」といって、現在でも簡易な測量に使用されています。

皆さんにも伊能忠敬の測量の仕組みを簡単に体験できる方法をご紹介したいと思います。

概略の測量なので、距離を測るのは歩測、角度を測る道具はオリエンテーリングという競技に使うシルバコンパスを使用します。

一．距離の測り方

まずはじめに、距離を歩測で測る方法を紹介します。

人の歩幅は個人によって多少異なりますが、普通70cm～75cm程度です。伊能忠敬の歩測の幅は測量の記録から69cm程度と推測されています。

一般に距離を測ると同じ人が同じ場所を測ってもばらつきが出ます。特に歩測の場合は、歩幅が基準になりますので、傾斜があったり、曲がり角があったりすると歩幅に影響が現れます。

それでも、少し訓練をすれば、歩幅を一定にして歩くことができ、誤差の範囲を狭めることができます。伊能忠敬は歩測でも５％くらいの範囲で測量できていたようです。

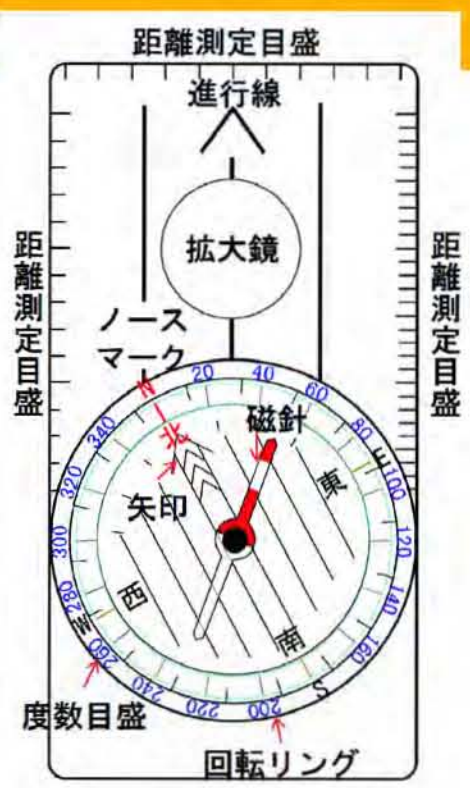
また、同じように歩いているつもりでも左右の歩幅に違いがある人もいると思いますので、右足と左足のペアを一単位（複歩）で計算すると、左右の歩幅の誤差を消すことができます。

自分の歩幅を調整するのは、なかなか難しいのですが、その場ですぐに距離を知りたい場合は、一複歩を1.5mで歩くようにすると計算が簡単です。（距離＝複歩数×1.5ｍ＝複歩数＋複歩数/2）図―１参照

その場で距離を知る必要が無ければ、安定して歩ける歩幅を決め、歩数を記録して室内に戻って、歩数に単位とした歩幅をかけて計算することも可能です。この場合も仮の距離としては、一複歩を1.5mとして計算し、正式な距離は実際の歩幅との差を補正することで計算することもできます。

2．角度の測り方

北からの角度を測るのにオリエンテーリング競技に使うシルバコンパスを使います。



図―２シルバコンパス

シルバコンパスは、もともとオリエンテーリングで地図上の方位を現地と照合するための道具として作られたものですが、手で持っても磁石の針がふらふらせず比較的安定していること、全体が透明なプラスチックでできていること、磁石の目盛部分が回転するといった特徴があり、簡易な地図づくりにも便利な道具です。

ただし、磁石を使うので、磁石に影響がある金具や電子機器は近づけないよう注意が必要です。伊能忠敬は帯刀を許されても磁石の狂いを配慮し、竹光にしていたというのは十分考えられます。現代では眼鏡や腕時計、携帯電話などのほか、高電圧の送電線などにも注意が必要です。

シルバコンパスで目標の方角を測るには、まず、四角いプレートの矢印を目標に向けます。

次に、磁石の目盛が描かれている回転リングを回して磁針と回転リングの中の矢印を一致させます。

これで、プレートの矢印の線と磁石の中に描かれた矢印の線のなす角が北からの方位を示していますので、プレートの矢印の線と回転リングの重なる目盛を読み取ります。（図―３参照）

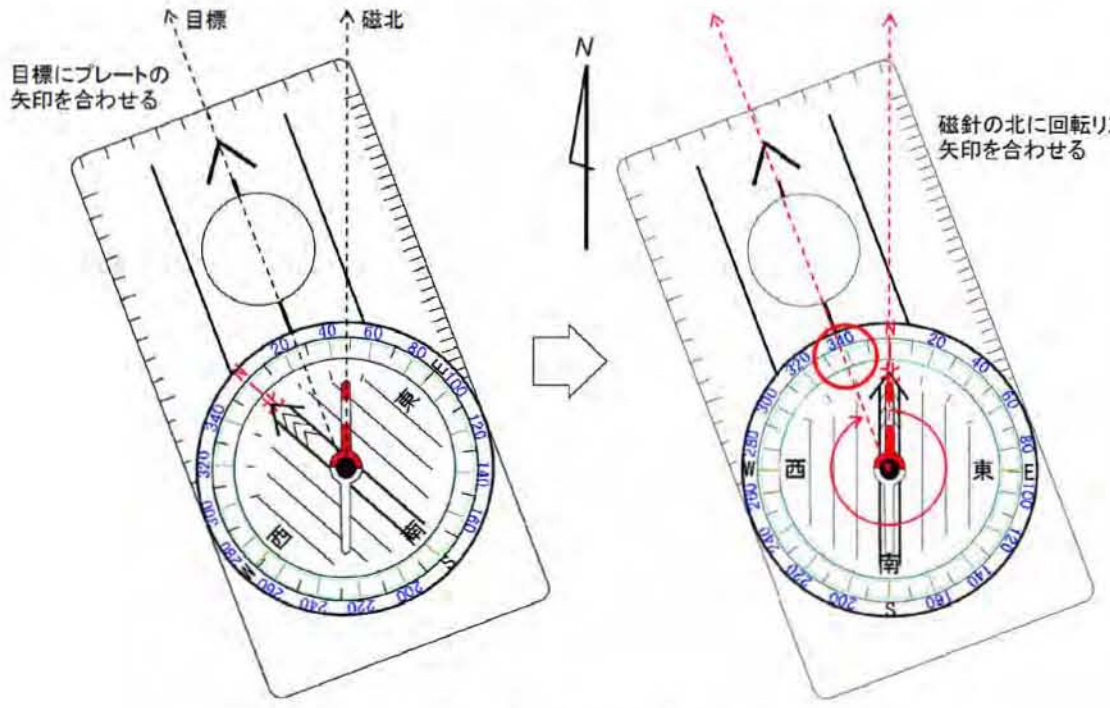
３．測量結果の記録

１．と２．で距離と角度の基本的な測り方を説明しましたが、測った結果は、地図に反映するため一定のルールで記録しておく必要があります。

伊能忠敬は、野帖（のちょう）というノートのようなものに、測った地点の距離と北からの角度を順番に記録し、宿舎に戻って地図に描きました。

以下、昨年他界された静岡市の加藤忠三さんが一昨年（平成二三年）九月二五日に静岡市で開催された「伊能忠敬の偉業に学ぶ学習会」のために準備していた資料を例に紹介します。

現地で測る地点（以下「測点」といいます。）と目標となる地点（以下「求点」といいます。）を①から⑨とし順に測ることとし、それぞれの



図―３　方位を測る

表―１　測量の記録例

区間	北からの角度（度）	距離（歩）
①―②	40	66
②―③	104	51
③―④	25	31
④―⑤	340	44
⑤―⑥	11	30
⑥―⑦	71	60
⑦―⑧	120	52

表―２　測量結果から地図を描くための整理例

区間	北からの角度（度）	距離（歩）	距離（m）	地図上の距離（1/1000）（mm）
①―②	40	66	43.2	43
②―③	104	51	36.7	37
：	：	：	：	：

地点間は①-②、②-③のように示しています。（表―1参照）

4 地図の描き方

3．の記録を基に、縮尺を決めて図に描きます。そのとき、磁石で測った北からの角度には、磁針偏差という磁石が指す北と実際の地球の北に少しずれがありますので本来はその補正が必要です。しかし、補正しなくても相対的な形状は変わりませんので、図を描いた後で北の方向を示す矢印などを描くという方法も考えられます。

上の表―2は、補正は後ですることにし、角度は測ったままの値を入れていますが、このように図を描き始める前に描こうとする地図の縮尺を決め、地図上の距離を計算しておくと誤りを少なくすることができ効率的です。

この表を基に図を描きますが、準備として紙の上にあらかじめ北を示す平行線（磁北線）を薄く引いておきます。

平行線の間隔は細かい方がいいのですが、実際に描くとなると大変なので1cm～2cmくらいを基本にしてください。あるいは、平行線をたくさん引くのも大変なので、市販の方眼紙を利用してもよいでしょう。

描きはじめる場合、スタート地点と測量した範囲が図のどのあたりに描かれるかを想定しおく必要があります。それを見誤ると図を描いて行く途中で図からはみ出してしまうことがあります。

紙の上でスタート地点が決まったら、シルバコンパスのプレートの矢印と回転リングの目盛を測った時の角度に合わせます。

次に、回転リングの中の矢印を図紙の磁北線に合わせ、プレートの矢印方向と平行な縁をスタート地点に合わせます。プレートの縁に刻まれた目盛0をスタート地点に合わせ、定規の縁を利用して目標までの方角を示す線を引き、その線上に縮尺に応じた目標までの距離を測りしるしをつけます。

これで測点①から②の測量結果が図に描けたことになります。

同様にして測点②から③、③から④と順に目的地⑨まで描けば、測った地点のルートが描けます。図を描く道具は別の定規や分度器を利用しても構いません。

道具は違いますが、伊能忠敬の地図もこのようにして骨格となる測線が描かれました。

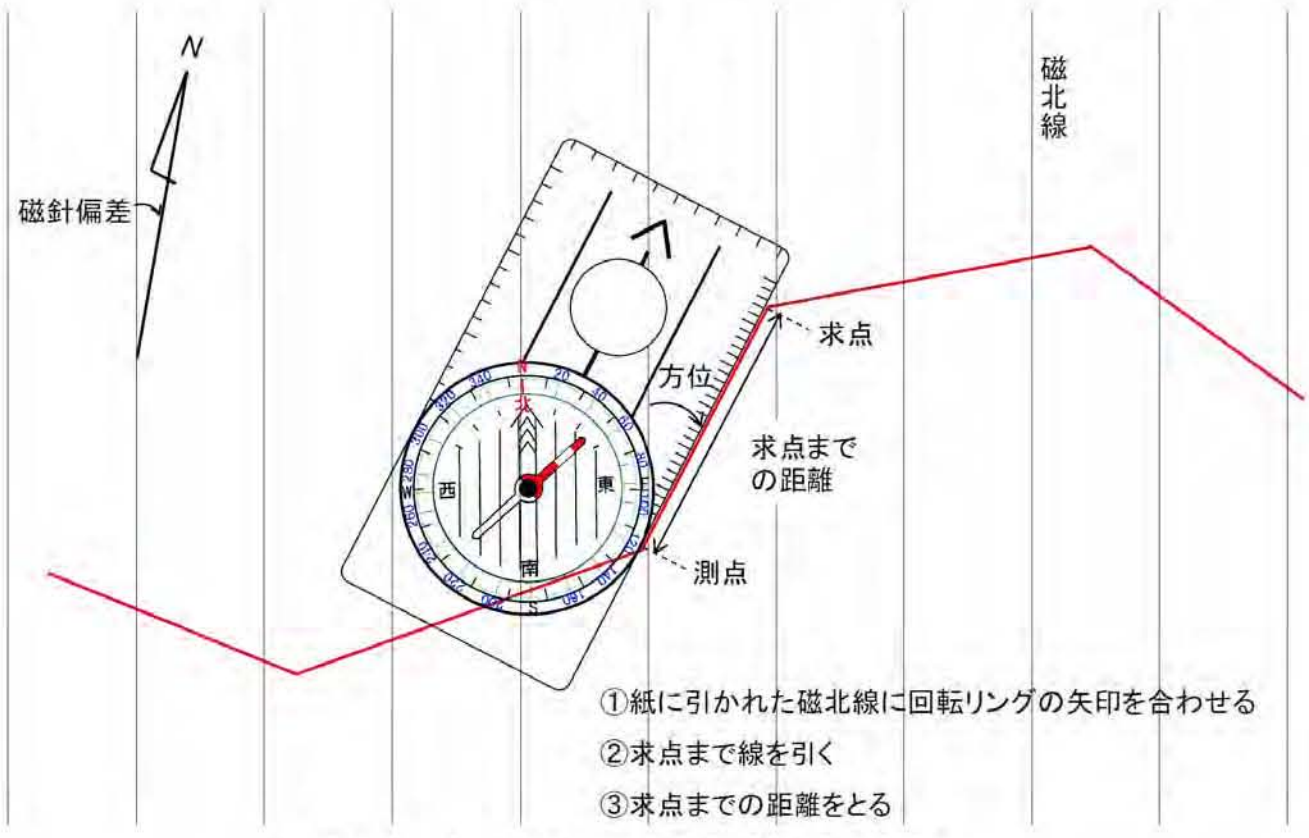
ただし、実際に測った距離や角度の値には、誤差が含まれているため、伊能忠敬は、ところどころで別な方法による測量を行い、誤差の確認と補正を行っています。

伊能忠敬は、このように測量した値を記録して、室内に戻って地図に描きました。

なお、シルバコンパスを使えば、室内に戻らず現地で直接地図を描くこともできますので、その方法を次の①から④で説明します。

①北から求点の角度を測ります。磁北を示す平行線を描いた紙を用意しておき、紙に引かれた磁北線に回転リングの矢印を合わせ、測点から求点に向けて線を引く。

②歩測で求点までの距離を測り、描く地図の縮尺に合わせて図上の距離を計算する。



図―4　シルバコンパスを利用して図を描く

③測点から求点に向かって引いた線上に求点までの図上距離をとり、求点の位置に印をつける。

④前の求点を測点にして同じように次の求点を測り、順次測った線をつなぐ。

これを目的地まで繰り返し図を完成させます。（図―4参照）

また、パソコンなどを利用して、東西の座標を計算し、次のようにグラフとして描くこともできます。（表―3、図―5参照）

①地図の縮尺を決める。

②縦横に平行線を引く（既存の方眼紙でもよい）

③方眼上に測量の原点を決め、測量順に求点の北からの角度（方位角）と図上距離（実距離／縮少率）からX、Yの座標を計算する。

④計算したX、Yの座標を使用して求　点間を結ぶ。

これを繰り返し、図を完成させます。

図―5は表―3の計算例をMicrosoft Excelのグラフ（散布図）機能を利用して描いたものです。

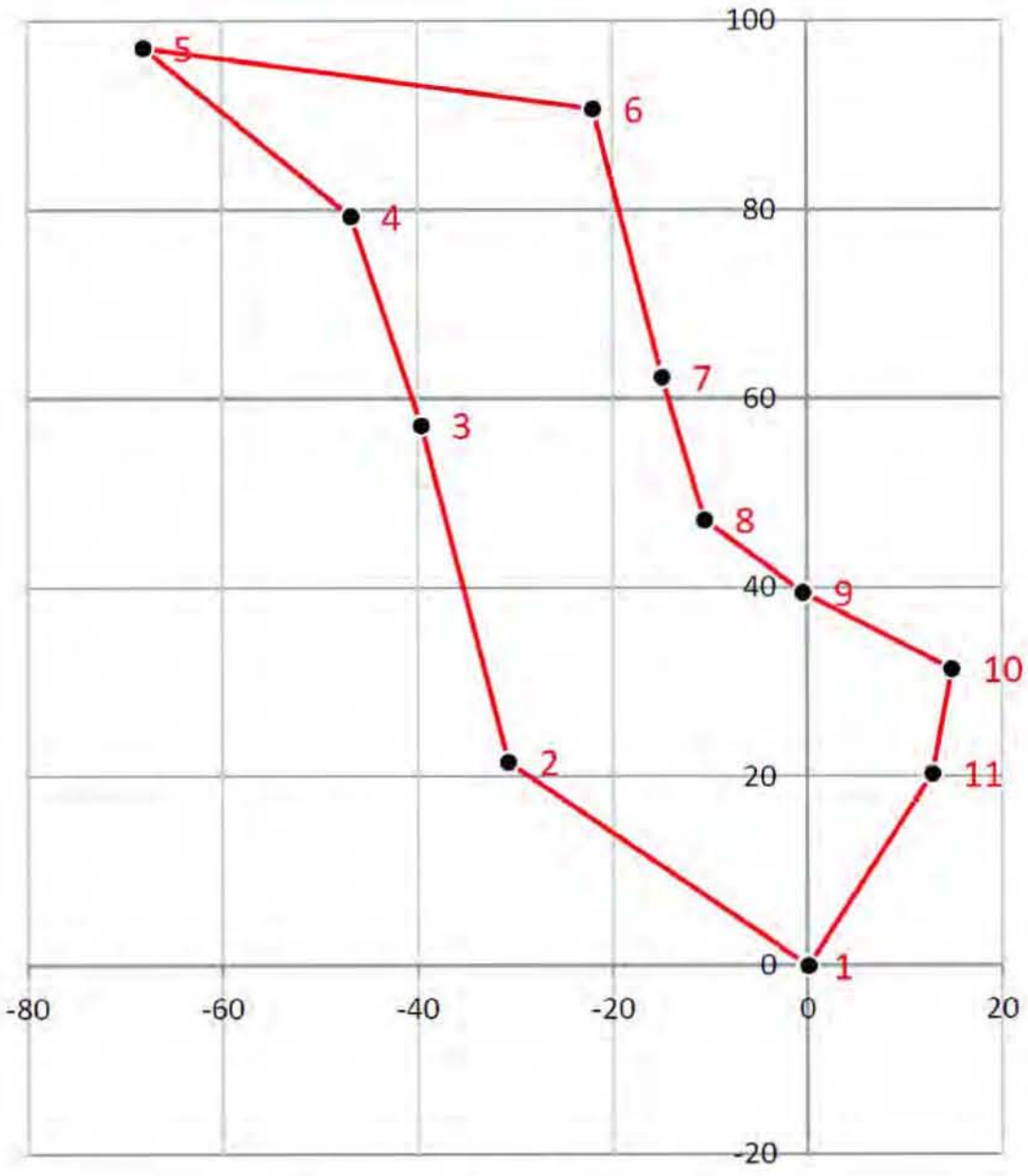
測量して地図を描くというと専門技術が必要と思われるでしょうが、手軽な道具で地図を描くことができますので、身近な公園など安全なところで試してみてください。

表―3　座標の計算例

測点	求点	方位(度)	歩数	距離(m)	X(東西)	Y(南北)
					0	0
1	2	305	50	37.5	-30.7182	21.50912
2	3	346	49	36.75	-39.6088	57.16748
3	4	342	31	23.25	-46.7935	79.27955
4	5	310	37	27.75	-68.0512	97.1169
5	6	98	62	46.5	-22.0037	90.64536
6	7	166	39	29.25	-14.9275	62.26421
7	8	164	21	15.75	-10.5862	47.12433
8	9	127	17	12.75	-0.40364	39.45119
9	10	118	23	17.25	14.82721	31.35281
10	11	190	15	11.25	12.87367	20.27372
11	1	212	32	24	0.155604	-0.07943

n：測点　　X＝sin(方位角n)×図上距離＋X座標(n-1)

Y＝cos(方位角n)×図上距離＋Y座標(n-1)



図―5　座標を使って図を描く

伊能測量漫筆二

測量風景図を新発見 公表を熱望

渡辺一郎

二〇一二年十二月に配布された思文閣（京都）の古書目録に、新しい測量風景図が売りにでていると、入船山記念館の津田さんから連絡があった。

北海道の高木会員にもお話してコピーをもらったが、値段が262,500円とえらく安い。買ってもいいなと、津田さんから聞いて貰ったら売却済だという。逃がした魚は大きいと、昔からいうが、その残念記を書いておこう。

小さいカタログ画面から熟覧すると描画のトーンは、呉市入船山記念館保管の浦島測量の図と大変よく似ている。梵天や象限儀があるから海岸の測量場面に間違はなく、沿岸の描き方、人物の描写、動作や、親船があってお供の船が続いているなど、浦島測量之図と同時期に描かれたように思われる。

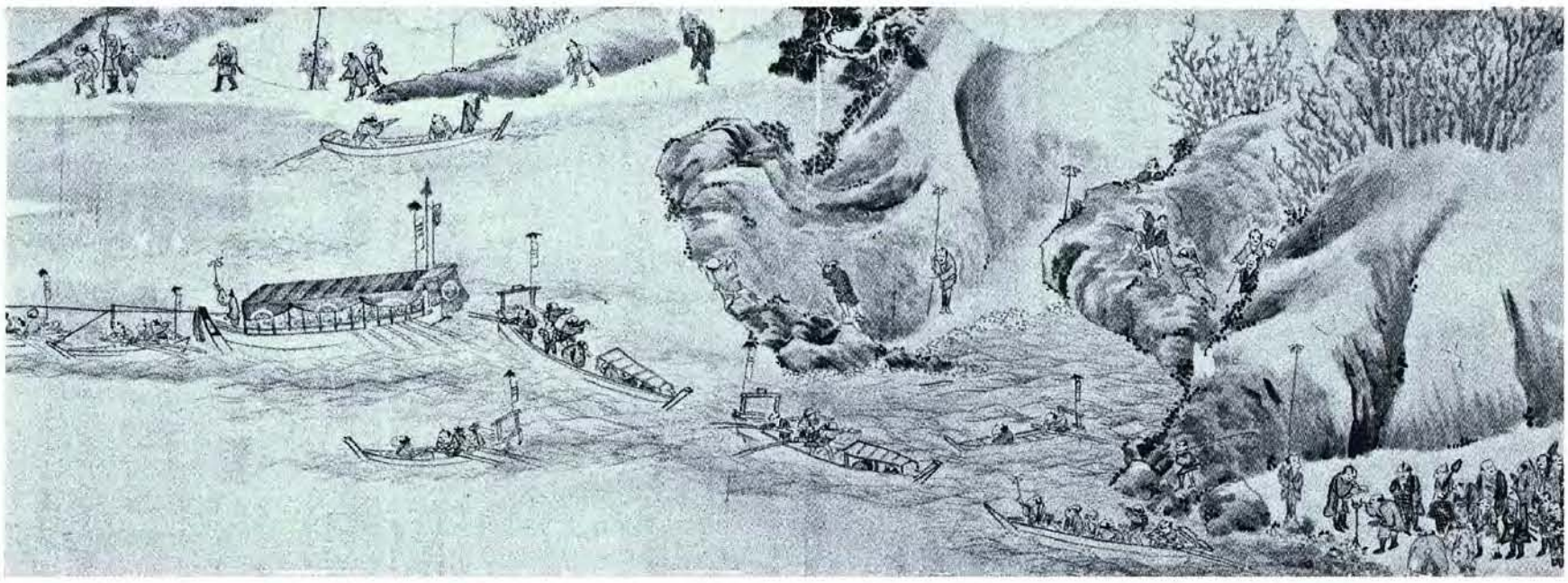
法量は縦29.1cm（浦島図は26.5cm）、横260cm（浦島図は420cm）であるから、形態もほぼ似た巻子本である。江戸後期、巻末に朱印というから興味深い。

親船には曳船が二隻描かれ綱で引いている。記録では漕ぎ船と出てくるので、多分曳船と思っていたが、この図では一目瞭然で、親船から旗を振って指示をしている。曳船が描かれた伊能測量船団絵巻は初めてである。

当時のものと考えると値段が安すぎるなと、知り合いの書店に聞いてみたら、思文閣は確りした書店で、値付けに問題はないと思う。写しなのではないか、との意見だった。

しかし、写しでもなんでも、当時の風景を描いたもので、それしか無ければ、中央紙の一面に掲載できる貴重な大発見である。ぜひ実見調査したいと考えているが、古書店の仁義として、売り手、買い手の名前は明かしてもらえない。

どなたか追跡していただいて、見せていただける機会ができればと思っている。古書店には頼んであるが、あてにならない。伊能に御関心を持つ方が買っていただいていて、世の中に出していただけるチャンスを待つばかりである。収集家に抱きかかえられ、世の中に出ないことを、最も恐れている。



伊能氏測量真景図 一巻 江戸後期写 巻末に朱印二顆あり 紙高29.1糎 長さ2米60糎 巻子装 箱入 破損補修・小傷みあり
思文閣（京都）の古書目録より

伊能小図を英国に持ち帰った英国測量船隊の旗艦アクテオン号の船首飾り

十年くらい前だったか、英国内を旅行していて、ポーツマス（Portsmouth）のネルソン提督の戦艦などを見学したあと、近くの王立海軍博物館で出会った。

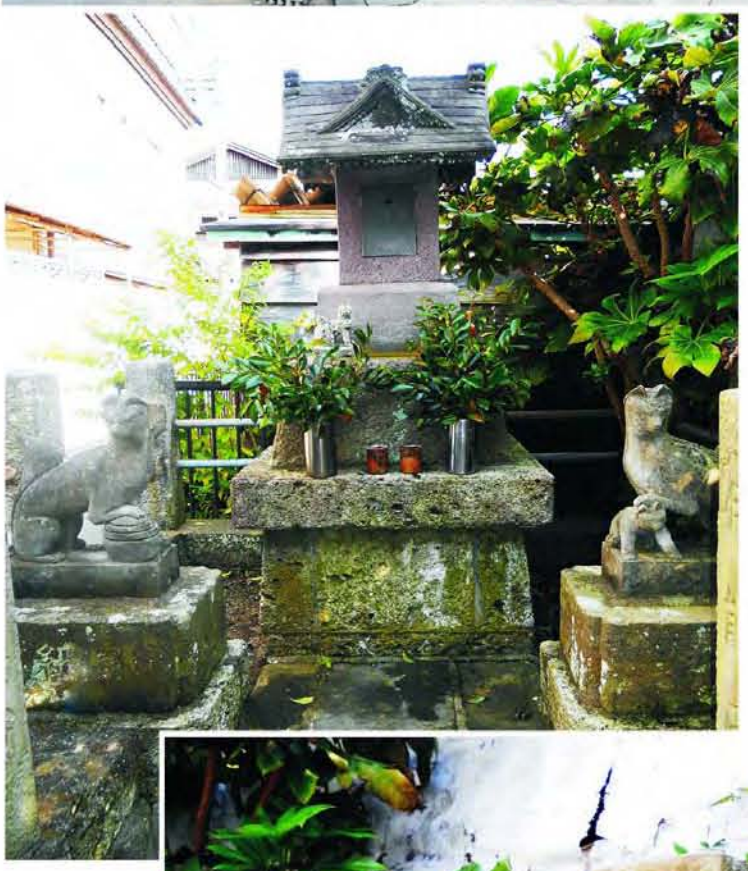
測量船アクテオン号（艦長ワード海軍中佐）は、幕末の一八六一年測量用砲艦三隻を率いて来日し日本近海を測量した。幕府役人が監督のため乗り組み、日の丸の国旗を掲げて作業した。役人がもっていた伊能小図を貰いうけて帰国し、これを利用して日本近海の海図2341号を一八六三年に改訂した。

そのときの伊能小図はグリニッチの国立海事博物館に保管されているが、測量船の船首飾りにこういう場所で出会うとは思わなかった。綺麗に塗装され大切に保管されている。（W）

アクテオン号船首飾り
（英国王立海軍博物館）

伊能家のお稲荷様

人や車が絶えず行きかう佐原の商店街。通りの角を折れて静かな小路を入っていくと、奥に稲荷社が鎮座している。正面の玉垣には大きく「伊能氏」の文字。伊能洋氏が継がれた伊能七左衛門家のお稲荷様である。鳥居もお社も石造り。子連れのお狐さんが優しげでいい雰囲気を出している。佐原を訪ねた折にはぜひお参り下さい。（前田幸子）



◇場所　香取市佐原イー五二一「宝寿司」脇
（佐原駅より徒歩七分）

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第五回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修　渡辺一郎　　編著　井上辰男

【第五次測量】その一（紀州半島・和歌山城下）自　文化二年二月二五日　至　文化二年八月九日

【表中赤色文字は改訂増補部分】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
文化二年二月（1805）						
二五	中飯	品川宿	東京都品川区		富ヶ岡八幡宮を参詣大木戸より測量を初る。	九十
	（3．25）	川崎宿	神奈川県川崎市川崎区		恒星測定	九十
二六	中食	神奈川宿	同　横浜市神奈川区		市野金助、伊能秀蔵、地理調に保土ヶ谷宿に朝より行。	九十三
	（2．6）	保土ヶ谷宿	同　横浜市保土ヶ谷区		恒星測定	九十三
二七	中食	戸塚宿	同　横浜市戸塚区		忠敬、市野金助、伊能秀蔵、地理調に藤沢宿に行。	九十三
	（2．7）	藤沢宿	同　藤沢市			九十三
二八	（2．8）	大磯宿	同　大磯町			九十九
二九	（2．9）	小田原城下	同　小田原市	本陣高砂屋永左衛門		九十九
三十	中食	畑宿	同　箱根町	畑右衛門	箱根御関所前測量に御関所詰役人出て掛合あり。箱根権現へ参詣	九十九
	（3．30）	箱根宿	同　箱根町	本陣天野平左衛門		九十九
文化二年三月（1805）						
一	中食	山中村	静岡県三島市	笹屋		百一
	（3．31）	三島宿	同　三島市	本陣世古六太夫	遠国通行祝儀に小鮮鯛を贈る。辞退に及べども押て送ゆえ、価三百銅に買求む。	百一
二	中食	沼津城下	同　沼津市			百一
	（4．1）	原宿	同　沼津市	本陣渡辺平左衛門		百一
三	（2）	同	同	同	雨天逗留	
四	（3）	同	同	平野屋平蔵 大黒屋某	五日三宝院門跡本陣休にて見分役来るよし、宿替	
五	（4）	吉原宿	同　富士市	脇本陣四目屋平左衛門	象限儀、子午線儀、垂揺球儀を仕立、午中太陽測定と恒星測定。三宝院門跡に柏原村にて相会。	百一
六	（5）	由比宿	同　静岡市清水区	羽根屋伴右衛門	着後に勅使千種前中納言、広瀬大納言油比宿通行。恒星測定	百七

七	後手中食	西倉沢村	同	静岡市清水区	川嶋善兵衛	今朝出立前、院使平松宰相通行。	百七
	先手中食	興津村	同	静岡市清水区	水口屋半兵衛		百七
（6）		江尻宿	同	静岡市清水区	府中屋茂兵衛		百七
八	（7）	同	同		同	紀州御通行に付逗留。坂部外3名、清水湊迄測る。	百七
九	（8）	丸子宿	同	静岡市駿河区	米屋市右衛門	細川候阿部川にて行逢	百七
十	（9）	同	同		同	雨天逗留	
十一	（10）	藤枝宿	同	藤枝市	青島治右衛門		百七
十二	（11）	金谷宿	同	島田市	横山伴右衛門	紀州殿姫君通行あり 大井川九十二文渡	百十一
	中食	道悦新田	同	島田市		道悦新田より大井川を越	百十一
十三	（12）	同	同		同	雨天逗留	
十四	（13）	掛川城下	同	掛川市	脇本陣林喜多右衛門	恒星測定	百十一
	中食	日坂宿	同	掛川市			百十一
	後手中食	袋井宿	同	袋井市	本陣田代八郎左衛門		百十一
	先手中食	西島村	同	磐田市	百姓角右衛門		百十一
十五	（14）	見付宿	同	磐田市	大三河屋新左衛門	恒星測定	百十一
	後手中食	薬師村	同	浜松市東区	森本竜庵		百十一
	先手中食	天神町	同	浜松市中区	陰屋文左衛門		百十一
十六	（15）	浜松城下	同	浜松市中区	本陣杉浦惣兵衛	恒星測定	百十一
	中食	舞坂宿	同	浜松市西区	本陣源馬十右衛門	忠敬外三名舞坂宿に至て浜名湖辺測量を談す。	百十一
十七	中食	篠原村	同	浜松市西区	平兵衛	浜名湖周辺を測。	百十一
十八	（17）	入野村	同	浜松市西区	百姓竹村又右衛門	止宿裏にて佐鳴ヶ浦眺望 富士山其外山々を測る 恒星測定	百十一
十九	中食	宇布見村	同	浜松市西区	中村善左衛門	本家源左衛門は大家なり。結城中納言出生の家にて胞衣を納し所なり。	百十一
	（18）	小人見村	同	浜松市西区	古橋惣作		百十一
	中食	佐浜村和地村界海岸	同	浜松市西区	佐浜村より弁当持参	測終て両手一同乗船。	百十一
二十	（19）	白須村	同	浜松市西区	佐浜村受泉庵済家宗）	床に狩野元信の三幅あり	百十一
	中食	村櫛村	同	浜松市西区	庄屋政五郎	一同乗船。	百十一
二一	（20）	堀江村	同	浜松市西区	又五郎		百十一

二一	中食	（21）	呉松村喉首	伊目村	同 浜松市西区
二二		（22）	気賀町	同 浜松市北区	済家宗福聚山寿楽寺
二三		（23）	大崎村	同 浜松市北区	本陣中村与太夫
二四	中食	（24）	津々崎村	同 浜松市北区	名主善吉
二五		（24）	三ケ日村	同 浜松市北区	本陣小池八左衛門
二六	中食	（25）	新所東方村	同 湖西市	内藤八郎左衛門
二七		（26）	同	同	同
二八	中食	（27）	荒井宿	同 湖西市	疋田弥五郎
		（27）	新居宿	同 湖西市	疋田弥五郎
二九	小休	（28）	白須賀宿	同 湖西市	桐屋宗治郎
	中食	（28）	二川宿	愛知県豊橋市	松坂屋
		（28）	吉田城下船町	同 豊橋市	浄土宗橋本山竜運寺

文化二年四月（1805）					
一		（4・29）	吉田城下船町	愛知県豊橋市	浄土宗橋本山竜運寺
二	中食	（30）	御油宿	同 豊川市	鈴木屋伝十郎
		（30）	赤坂宿	同 豊川市	本陣長崎屋弥市左衛門
三	中食	（5・1）	藤川宿	同 岡崎市	
		（5・1）	岡崎城下伝馬町	同 岡崎市	本陣中根甚太郎
四			中食	大浜茶屋	同 安城市	中根源六
		（2）	池鯉鮒宿	同 知立市	本陣永田清兵門
五	後手中食		鳴海宿	同 名古屋市緑区	本陣西尾伊右衛門
	先手中食		山崎村	同 名古屋市南区	山崎徳左衛門
		（3）	熱田宿	同 名古屋市熱田区	

百十一	弁当持参				
百十一	済家宗福聚山寿楽寺				
百十一	本陣中村与太夫	止宿は旧家にて、此所の開基なり。恒星測定			
百十一	曹洞宗寺倉山法鐘院	恒星測定			
百十一	名主善吉				
百十一	本陣小池八左衛門				
百十一	三浦屋熊蔵				
百十一	内藤八郎左衛門				
	同	雨天逗留、恒星測定			
百十一		新居御関所前を測る			
百十一	疋田弥五郎				
百十一	桐屋宗治郎				
百十六	松坂屋				
百十六	浄土宗橋本山竜運寺				

百十六	浄土宗橋本山竜運寺	雨天逗留、恒星測定			
百十六	鈴木屋伝十郎				
百十六	本陣長崎屋弥市左衛門				
百十五		法蔵寺へ立寄、霊宝一覧			
百十五	本陣中根甚太郎				
百十五	中根源六	矢作橋修造にて御作事諸役人出役なり。橋見分不相済候に付、行抜難相成候間、橋上相測、渡川の後、橋先より相測候様に申候に付、宣普請方同心立会にて橋上測量済立帰り渡船す。此時松浦候嫡参向に渡川す			
百十五	本陣永田清兵門	恒星測定			
百十五	本陣西尾伊右衛門	止宿当の本陣測量地無之に付止宿を替る。恒星測定			
百十五	山崎徳左衛門	止宿当の本陣測量地無之に付止宿を替る。恒星測定			
百十五		止宿当の本陣測量地無之に付止宿を替る。恒星測定			

六	後手中食	万場宿	同　名古屋市中川区	本陣官九郎	馬嶋村天台宗妙眼院へ立寄庭園を一見す。	百十五
	後手小休 先手中食	神守宿	同　津島市	本陣猪飼文左衛門		百十八
七	（4）	佐屋宿	同　愛西市	加藤五左衛門	恒星測定	百十八
	（5）	鳥ケ地新田	同　弥冨市	佐野新蔵	恒星測定	百十八
八	中食	高入新田	三重県木曽岬村	与助	筏川、鍋田川を渡る。	百二十九
	（6）	田代新田	同　木曽岬村	年寄大田喜兵衛 名主市左衛門		百二十九
九	（7）	桑名城下	同　桑名市	本陣丹羽善九右衛門	六百新田にて鰻川幅を測。別手加路戸川渡る。	百二十九
十	（8）	同	同	同	雨天逗留、止宿裏測量所無之往来半を板囲に致し置、象限儀、子午線へ桐油掛置き。恒星測定	
十一	中食	東富田村	同　四日市市	村田屋徳左衛門		百二十九
	小休	浜一色村	同　四日市市	米屋吉兵衛		百二十九
	（9）	四日市宿	同　四日市市	江戸屋彦兵衛	恒星測定	百二十九
		東富田村	同　四日市市	村田屋徳左衛門	海辺測量隊	百二十九
十二	（10）	白子宿	同　鈴鹿市	松屋九左衛門	追分にて小休。坂路東海道測量の続き印に両宮石燈際へ石を埋込。下総佐原知人五人伊勢参宮、止宿立寄。恒星測定	百二十九
十三	（11）	上野宿	同　津市	万屋源四郎	白子山観音寺へ立寄	百二十九
十四	（12）	同	同	同	雨天逗留	
十五	（13）	同	同	同	雨天逗留。内宮会合所役人、山田三方役人来て神領は往古より緒役免許持し御用の儀人馬差支御座候ては相済不申候間、両宮共人馬の儀は止宿へ御相談被下酒代にても遣し候様にいう。午後両宮暦師惣代来る。両宮より測量手伝人足並荷物人馬を談候所、両宮暦師より無帯可差出旨引請て帰る。	
		津城下	同	本陣進伊左衛門	海辺測量隊	
十六	（14）	津城下	同　津市	瓢譚屋宗助		百三十
		同	同	本陣伴左衛門	海辺測量隊	百三十
十七	（15）	同	同	同	雨天逗留 妙法院宮当所中食	
十八	（16）	雲出嶋貫村	三重県津市	奥田徳兵衛		百三十
十九	（17）	松坂町	同　松坂市	本陣美濃屋喜内		百三十
二十	（18）	上野村	同　明和町	三田屋三郎兵衛	くし田川、祓川を長縄にて測。浅草暦所より御用状届く	百三十
二一	（19）	小俣駅	同　伊勢市	本陣大庄屋野呂逸之進		百三十

二二	（20）	山田岡本町小田	同　伊勢市	泉屋半左衛門	宮川を渡て神領なり。外宮長官名代来て長官の口上をいう。木星四小星の一凌犯、市野、平山等測る
二三	（21）	同	同	同	外宮参詣還て午中迄測る。外宮へ御供料金百疋上る。龍太夫へ金二歩、梅卯蔵へ金二朱進上。参詣帰路宮崎文庫へ立寄一覧木星凌犯不測。恒星少測る。
二四	（22）	同	同	同	高橋等，湊より二見浦迄測る。忠敬外、午中太陽測定
二五	（23）	同	同	同	雨天逗留推算並伊勢国図を写
二六	（24）	同	同	同	大湊今一色村入海両縁を手分にて測る。両手神社村、今一色村にて中食。忠敬外、二見浦を一見に行。
二七	（25）	宇治宿	同　伊勢市	岩崎太夫	太神宮参詣御供料金百疋上げ、山中甚作へ立寄、名石奇岩一覧。内宮柳作太夫へ金百疋進物。恒星測定
二八	（26）	同	同	同	熊岳へ測量。金剛証寺役僧出る。濛気おおく遠山不見。恒星測定
二九	（27）	同	同	同	市野外、磯部道を勢州志州国界迄測。忠敬外3名、止宿に残て推算、又伊勢国図を写す。
三十	（28）	鳥羽城下	同　鳥羽市	浄土宗西念寺	木星凌犯測量都合測器仕立に直に鳥羽城下へ行。恒星測定
文化二年五月（1805）					
一	（5．29）	鳥羽城下	三重県鳥羽市	浄土宗西念寺	高橋外、答志桃取の周囲を測る。忠敬市野残居て五星測量の用意。午中太陽垂揺球等を測る。午後当所日和山に登て山々を測る。濛気おおくして遠山不見。
二	（30）	同	同	同	坂部外、答志桃取の測残と牛嶋、浮島を測る。明朝、市野、日和山に行て遠山を測る。日出前に富士山を測得たり。忠敬外二名、残居て地図方位推歩。午中太陽測定
三	（31）	同	同	同	朝より雨、測量止。稲垣信濃守殿より忠敬外三名へ交肴一折、大樽一荷、内弟子へ交肴一折被贈。
四	（6．1）	同	同	同	高橋外、神嶋渡海不成、伊勢国、志摩国の界より海岸鳥羽湊を測る。忠敬・永沢、日和山へ行遠山を測、富士山不見幽に白山を測。又伊吹山を測る。太陽午経度を測。恒星測定

五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二一	二二	二三	二四
（2）	（3）	（4）	（5）	（6）	（7）	（8）	（9）	（10）	（11）	（12）	（13）	（14）	（15）	（16）	（17）	（18）	（19）	（20）	（21）
同	同	同	同	同	石鏡村	同	相差村	的屋村	同	下之郷村	同	三ケ所村	同	国府村	波切村	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同 鳥羽市	同	同 鳥羽市	同 志摩市	同	同 志摩市	同	三重県志摩市	同	同 志摩市	同 志摩市	同	同	同	同
同	同	同	同	同	天台宗照光山円鏡寺	同	禅宗京師南禅寺末 臨済宗大慈山梵潮寺	曹洞宗宿円庵	同	曹洞宗慈祝庵	同	曹洞宗栖電庵	同	一向宗東派 宇多山源桂寺	済家宗紀州由良興国寺末寺陰涼山林中寺	同	同	同	同
高橋外、神嶋・大鞍嶋等測量。忠敬・永沢、未明に日和山へ行遠山を測、四方雲掩て不見。空く帰る。	高橋外、酒手嶋を測る。忠敬・市野・永沢、残居て子午線、垂揺球を測。太陽午中を測る。此夜木星、四小星、凌犯を測る暁に至る。測人高橋・市野也	坂部外、菅嶋を測。忠敬・高橋・市野、残居て太陽午中を測る。暮に忠敬外日和山へ行、遠山を測る。此夜木星、四小星、凌犯を市野・平山・小坂	忠敬外二名、永沢領主より饗応、船に乗て此湊島々を一緒す。夜木星、四小星、凌犯を測る	曇り午中不測、乃て象限儀子午線、御目鏡、垂揺球を取納む	高橋・平山は石鏡村に至て地図をなす	恒星測定。此夜象限儀南北平行差二分半を生	日出前石鏡村海岸へ出て富士山其外山嶋を測る 忠敬外三名乗船し直に相差村止宿に至て地図推算を成。太陽午中を測る。恒星測定	此朝、平山・永沢、相差村海岸行き富士山を測る 忠敬外三名乗船し直に的屋村行き、推算地図を成 恒星測定	雨天逗留	忠敬外一名下之郷村止宿に残居て推算す。江戸暦局より用状届く。	大雨逗留。此日紀州公園部、即上之郷村止宿。大雨後十七日同所御逗留。		雨天逗留。地図推算	忠敬外二名直に国府村に至て、推算をなす 恒星測定	国府村海岸に出て富士山を測る（丑二五分五十秒より丑二六分）	大雨逗留	雨天逗留	雨天逗留、此日より野帳、方位、正弦、余弦、推歩、内役目二十枚、外役測量の人は交合而己の定式を定。	雨天逗留、不残推歩を成
百十七	百十七	百十七	百十七		百十七		百十七	百十七		百十七		百十七		百十七	百十七				

二五	（22）	片田村	同	志摩市	鳥羽常安寺末 曹洞宗金剛院	平山・小坂休日也	百十七
二六	（23）	越賀村	同	志摩市	曹洞宗鳥羽常安寺末 竜海山宝珠院	平山・小坂休日也	百十七
二七	（24）	同	同		同	忠敬・稲生・門谷休日。恒星測定	
二八	（25）	同	同		同	稲生・門谷休日。	
二九	（26）	船越村	同	志摩市	鳥羽常安寺末 曹洞宗持地庵	忠敬外三名乗船し船越村へ行き推算。恒星測定	百十七

文化二年六月（1805）

一	（6・27）	立神村	三重県志摩市	臨済宗紀州由良興国寺末正宝山本福寺	恒星測定	百十七
二	（28）	鵜方村	同 志摩市	曹洞宗鳥羽常安寺末 壷福山褄鳳寺		百十七
三	中食	上之郷村	同 志摩市	赤坂竜太夫		百十七
三	（29）	浜島村	同 志摩市	朝熊岳金剛証寺末 臨済宗日向山極楽寺	恒星測定	百十七
四	（30）	南張村	同 志摩市	鳥羽常安寺末 曹洞宗玉光山徳林寺	恒星測定	百十七
五	（7・1）	五ケ所浦	同 南伊勢町	一向宗西派医王寺	忠敬外一名乗船し五カ所浦へ行き推算。	百十七
六	（2）	同	同	同	忠敬外二名、残居て推歩を成	
七	（3）	礫浦	同 南伊勢町	京都妙心寺派田曽浦慈眼寺末 竜泉寺	忠敬外二名、残居て推算す	百三十一
八	（4）	同	同	同	忠敬外二名、残居て推算す	
九	（5）	阿曽浦	同 南伊勢町	臨済宗霊泉峯片山寺	泊浜岩石そびえ両手共測量大難儀の由、忠敬外二名、迫村より大江村迄横切に測。	百三十一
十	（6）	同	同	同	忠敬外二名、残居て推算す	
十一	（7）	慥柄村	同 南伊勢町	一向宗西派 後光山西光寺	忠敬外三名、残居て推算す	百三十一
十二	（8）	神前浦	同 南伊勢町	曹洞宗金剛山地蔵院	忠敬外二名、休番推算	百三十一
十三	（9）	古和浦	同 南伊勢町	肝煎平四郎	恒星測定	百三十一
十四	（10）	神前浦	同 南伊勢町	曹洞宗金剛山地蔵院	測量隊	百三十一
		錦浦	同 大紀町		忠敬外三名神前浦出立。乗船し直に錦浦に至て月帯食測量の用意を成。即、此日太陽を測る。夜恒星を測る。	百三十一

十五	（11）	錦浦	同　大紀町		月食測量の用意を成。此日太陽を測る。夜恒星を測る。	百三十一
十六	（12）	長島浦	三重県紀北町	大嶋山曹洞宗仏光寺	暁七ツ頃、於錦浦帯食を測る、忠敬外六名なり。忠敬外二名残居て午中太陽測終て錦浦出立。	百三十一
十七	（13）	同	同	同	晴天逗留。江戸暦局行用状を認、十八日出す。	百三十一
十八	（14）	三浦	同　紀北町	庄屋川口嶋之助	恒星測定	百三十一
十九	（15）	須賀利浦	同　尾鷲市	芝田吉之丞	平山・稲生・小坂病気。浅草暦局用状届く。恒星測定	百三十一
二十	（16）	同	同	同	逗留測。平山・稲生・小坂・僕角二病気	百三十一
二一	（17）	引本浦	同　紀北町	肝煎生熊屋庄兵衛	平山・稲生・小坂・僕角二病気	百三十一
二二	（18）	同	同	同	雨天逗留。稲生・僕角二病気	
二三	（19）	尾鷲浦中井町	同　尾鷲市	浜野屋善助	秀蔵・角二病気。恒星測定	百三十一
二四	（20）	九木浦	同　尾鷲市	武治右衛門 和右衛門　加助	忠敬、坂部休番。元行野より九木岬外海辺十四五町測大難儀成所は舟中羅しんを以見取測をなす。恒星測定	百三十二
二五	（21）	同	同	同	同所逗留測。富士をを測らんとす。忠敬外二人、夜八ツ後同所燈明堂に三十町程登て、富士山其外を測らんとす。四方地平雲掩濛気おおくして富士山は勿論外遠山も見えず空く帰る。市野此日より病気。	百三十二
二六	（22）	三木里浦	同　尾鷲市	曹洞宗仏国山法念寺	平山外一名、暁八ツ半後燈明堂に登て再山々を測る。海上雲掩て遠山不見空く帰り出立。市野病気、平山休番。恒星測定	百三十二
二七	中食	梶賀浦	同　尾鷲市			百三十二
	（23）	二木島浦	同　熊野市	本陣孫右衛門 庄屋代孫之丞 肝煎代八十郎	郡蔵病気、平山二六日より病気。恒星測定	百三十二
二八	（24）	同	同	同	同所逗留測。市野・平山病気、忠敬残て推算。	
二九	（25）	木本浦	同　熊野市	本陣伊勢屋源治郎 藤屋庄助	市野・平山病気。恒星測定	百三十二
文化二年七月	（1805）					
一	（7．26）	木本浦	三重県熊野市	本陣伊勢屋源治郎 藤屋庄助	大坂、間五郎兵衛へ書状を出す	百三十二
二	中食	阿田波浦	同　御浜町			百三十二
	（27）	新宮城下船町	和歌山県新宮市	役人会所　与市	恒星測定	百三十二

三	四	五	六	七	八	九	十	十一		十二		十三	十四	十五		十六		十七	十八		十九	二十	二一
（28）	（29）	（30）	（31）	（8．1）	（2）	（3）	（4）	（5）	中食	（6）		（7）	（8）	（9）	中食	（10）	中食	（11）	（12）	中食	（13）	（14）	（15）
同	天満浦	同	太地浦	同	同	同	浦神浦	古座浦	下田原浦	古座浦	大嶋浦	串本浦	有田浦	恵住浦	江田浦	恵住浦	見老津浦	同	周参見浦	口和深村	同	日置浦	富田組中村
同	同 那智勝浦町	同	同 太地町	同	同	同	同 那智勝浦町	同 串本町	同 串本町	同 串本町	同 串本町	同 串本町	同 串本町	和歌山県すさみ町	同 串本町	同 すさみ町	同 すさみ町	同	同 すさみ町	同 すさみ町	同	同 白浜町	同 白浜町
同	庄屋茂十郎 仁兵衛 金兵衛	同	太地角右衛門	同	同	同	瀬左衛門	和歌屋与市	和歌屋与市	甚兵衛		甚兵衛	地士深見嘉左衛門	本陣嘉太夫 半蔵 庄屋四郎左衛門					嶋屋為吉 魚屋忠治郎 魚屋松蔵	大庄屋原徳左衛門	同	増田六郎兵衛 敦賀屋兵助 雑賀屋勘兵衛	地士榎本与吉郎 地士西島源治郎
同所逗留測。止宿より熊野新宮華表迄測、それより参詣。暦局へ用状を出す。	恒星測定	同所逗留測。那智熊野権現華表迄測る。それより歩間・方位を定め熊野権現観世音迄測。それより遠測して那知滝を一見す。	止宿豪家也。鯨を取る業とす。永沢病気	大雨に付一同に帰宿。市野、平山、角二病気永沢六日より病気引篭	巽風或晴或は大雨。測量見合居る	巽風無程雨降逗留	恒星測定			稲生、小坂、水沢止宿	恒星測定	恒星測定	恒星測定			浅草暦局所用状届	東風波涛高測量難成りに付逗留。市野長病気別宿。		波浪高、舟行難成逗留。恒星測定			
百三十二	百三十二	百三十二	百三十二				百三十二	百四十	百四十	百四十	百四十	百四十	百四十	百四十	百四十				百四十	百四十		百四十	百四十

二二	（16）	同	同	同			大風大波涛にて測量難成逗留。浅草暦局へ用状出す	百四十
二三	（17）	鉛山村	同	白浜町	本陣森三太夫 三木善右衛門			百四十
二四	（18）	田辺城下本町	同	田辺市	医師小川南奴 余土屋宗兵衛	恒星測定		百四十
二五	（19）	同	同	同	同		同所逗留して測	百四十
二六	（20）	南部村	同	みなべ町	大庄屋鈴木村 岡屋清兵衛	恒星測定		百三十九
二七	中食（21）	西地村	同	印南町				百三十九
	（21）	上野村	同	御坊市	治郎兵衛　利右衛門			百三十九
二八	中食（22）	浜の瀬ソノノ内	同	美浜町				百三十九
	（22）	三尾村	同	美浜町	一向宗西派 海南山光明寺	恒星測定		百三十九
二九	（23）	比井浦	同	日高町	木綿屋仁右衛門 甚兵衛　善蔵			百三十九

文化二年八月（1805）	一	中食（8・24）	横浦	和歌山県由良町			百三十九
		（8・24）	神谷浦	同 由良町	庄屋岩崎喜七　佐助		百三十九
	二	（25）	唐尾浦	同 広川町	西本願寺末 竜尾山善照寺	恒星測定	百三十九
	三	中食（26）	広浦	同 広川町			百三十九
		（26）	柄原浦	同 湯浅町	本陣須賀屋茂兵衛	恒星測定。象限儀、平行差南北十四分余りを生ず此日家僕遊表の望遠を取離しみがき立たるに付、南北平行差を生じたるなり	百三十九
	四	（27）	北添浦	同 有田市	保田屋作右衛門 盛屋平兵衛 宮原屋伝兵衛	恒星測定。象限儀、南北大差に付改正を成。南北差六分許になる	百三十九
	五	（28）	下津浦	同 海南市	西本願寺派 玉光山光輪寺	恒星測定。南北差再改正差一分許になる	百三十九
	六	（29）	塩津浦	同 海南市	本陣岩亀山極楽寺 升屋源右衛門	恒星測定。南北差なし。大凡合	百三十八
	七	（30）	日方浦	和歌山県海南市	地士橋本甚助	恒星測定。南北差大概平均となる	百三十八
	八	（31）	和歌浦	同 和歌山市	喜右衛門	紀三井寺を測る。和歌浦に天台宗和歌山雲蓋院という大寺あり。天曜寺共いう。東照宮あり翌朝参詣す。	百三十八
	九	（9・1）	和歌山城外久保町	同 和歌山市	本陣庄屋嘉市 中屋九右衛門	恒星測定	百三十八

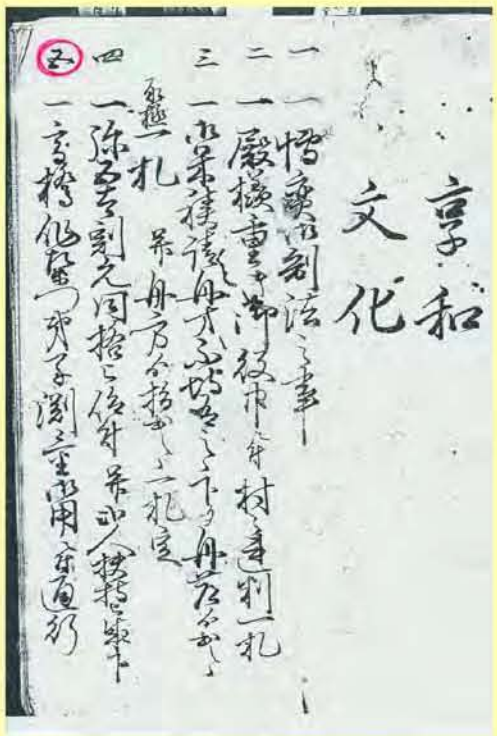
各地のニュース

冨所家『永代禄』伊能忠敬測量隊の『先触れ』の写に誤記を発見

山浦佐智代

これから紹介させていただく史料は新潟県立文書館、嘱託員・亀井功先生より提供していただきました。

永代禄表紙



永代禄目次

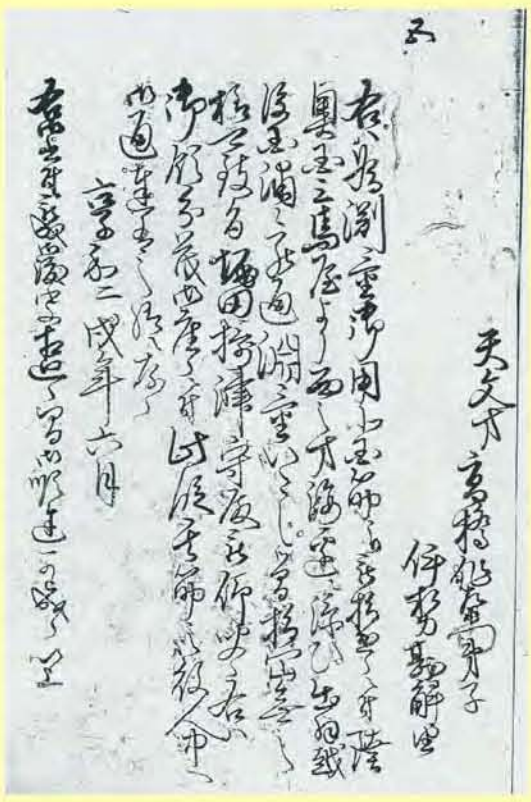
この永代禄は、越後国の吉田村の割元（大庄屋）冨所家が、文政年間末頃、吉田御蔵組吉田村にとって、大切だと思われる文書を、取り出して、寛永年間から文政年間までを、年号単位で年代順に記録した冊子です。

（吉田村は、現在、新潟県燕市へ組み込まれています。）

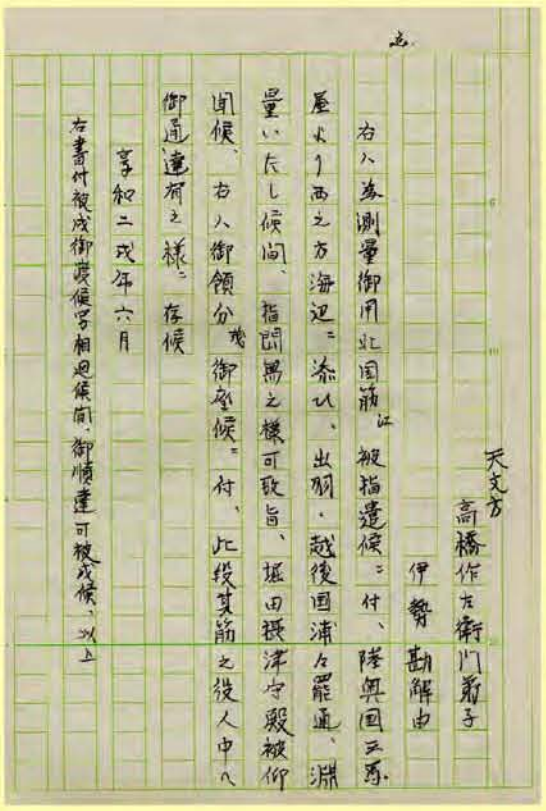
目次、五番目に、『先触れ』のことが載っています。

冨所家『永代禄』の『先触れ』の写文字を、良く御覧ください。

先触れの写



先触れの写解読文　解読　亀井功氏



アラ?とお思いになりましたか?伊能勘解由の文字かとおもいきや・伊勢勘解由となっています。

自宅用に『先触れ』を写す時に、間違えられたのか、または、永代禄を書かれたときに、写し間違えられたのか、遠い昔のことで、分りませんが、お伊勢参りの『伊』と想像されたのでしょうか。

人間らしさを感じてしまいました。

分かりやすい文にすると

天文方　高橋作左衛門弟子
伊勢勘解由

五

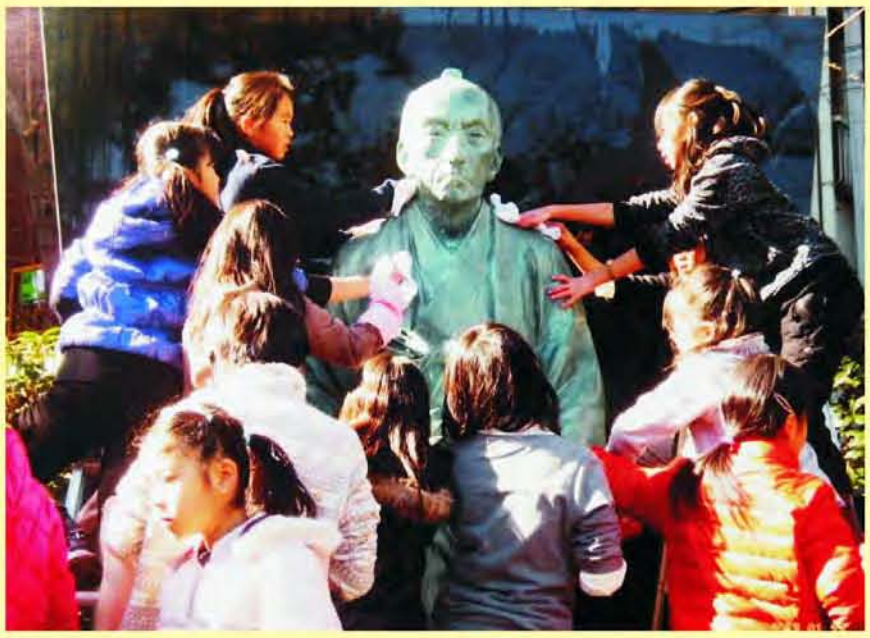
右は測量御用の為、北国筋へ指し遣わされ候に付き、陸奥国三馬屋より西の方海辺に添い、出羽・越後国浦々罷り(まかり)通り、淵量いたし候間、指し問えこれ無き様致す可き旨、堀田摂津守殿仰せ聞かされ候、右は御領分も　御座候に付き、此の段其の筋の役人中へ御通達これ有る様に存じ候。

享和二戌年六月

右書付御渡し成られ候写し相廻し候　間、御順達成られべく候、

以上

第四回
伊能忠敬銅像清掃デー開く
元気いっぱい数矢小の子供たち



平成二十五年一月二七日、東京深川の富岡八幡宮で第四回を迎えた伊能忠敬銅像清掃デーが開催され、今年も地元の数矢小学校の二十二名の生徒さんによって伊能忠敬銅像がピカピカにきれいに磨きあげられました。

富岡八幡宮の伊能忠敬銅像は、平成十三(二〇〇一)年十月に伊能ウォークの成功を記念して、諸関係団体と個人の募金によって建立されました。

汚れが目立ってきた平成二十二年七月に、伊能家七代目の伊能洋先生の同年に亡くなられた陽子夫人の供養を兼ねてとの御提案で、第一回の清掃を関係者有志で行いました。

翌年からは銅像建立を記念して平成十四年から千葉県ウォーキング協会が毎年開催してきた佐原中央公民館～富岡八幡宮の『忠敬江戸入り百三十キロフォーデーウォーク』の最終日に合わせて行うこととした。

昨年からは地元の子供たちの手で、世話役の阿部正彦さんのご紹介で地元の数矢小学校（大沼謙一校長）の生徒さんたちによって行うことになりました。

主催は伊能忠敬研究会で、富岡八幡宮、数矢小学校、同ＰＴＡ、完全復元伊能図全国巡回フロア展中央実行委員会、日本ウォーキング協会、千葉県ウォーキング協会に今年から伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会と一般社団法人木谷ウォーキング研究所が実行委員会に加わりました。

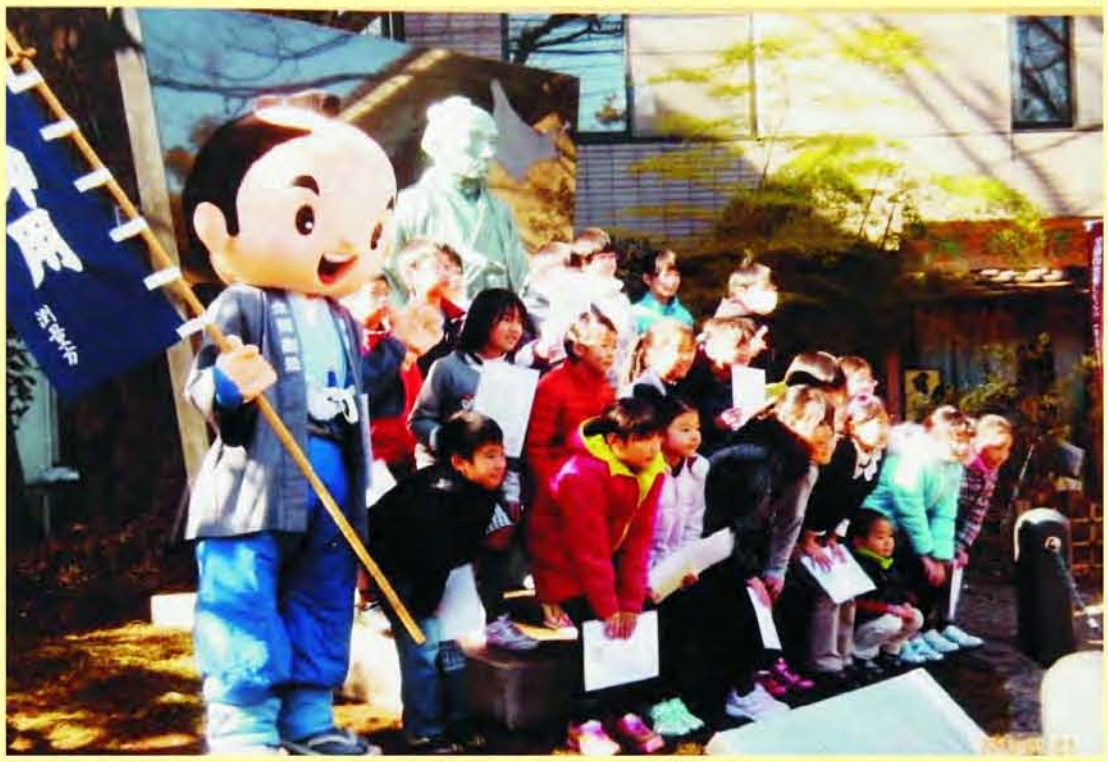
当日は、九時半より伊能洋先生や富岡八幡宮の丸山禰宜さんたちのご挨拶、伊能忠敬研究会の星埜由尚代表理事による「伊能忠敬の少年時代」、銅像制作者である酒井道久先生による「伊能忠敬銅像の出来るまで」の講演を聞いた後、近くの公園で参加した子どもたちと父兄による歩測大会、そしてメインイベントの銅像清掃に。

冷たい水に雑巾を浸し、代りばんこに脚立に乗っての水洗い、乾拭き、ワックス磨きと、昨年も参加した四年生、五年生と、初めての三年生も一生懸命伊能忠敬に抱き合うようにすみずみまできれいの磨き上げていく姿は誠に感動的でした。

きれいになった銅像前でお祓い・玉串奉奠のあと、星埜代表理事から全員に参加感謝状、伊能洋先生から記念品が贈呈され、伊藤浩史歩測大会実行委員長より講評と八人の歩測達人が紹介されて、十二時につつがなく今年の清掃を終えました。

伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会は忠敬江戸入りウォーク初日の二四日の佐原出発と、このにマスコット「ちゅうけいＳＵＮ」をご派遣下さって盛り上げて下さいました。なお、全国各地から二四日に宇井香取市長の見送りうけて佐原を出立し、成田、孫子、市川と泊りを重ねて百三十キロを踏破した第十二回忠敬江戸入りウォークの一行四百名も十五時に無事に富岡八幡宮に到着し、五十歳で江戸入りした伊能忠敬の往時を偲びました。

（木谷道宣）



マスコットちゅうけいＳＵＮといっしょに記念撮影

気象庁地磁気観測所 観測開始百周年 記念行事行われる

茨城県石岡市柿岡にある気象庁所属の地磁気観測所は二〇一三年一月、地磁気観測所が柿岡で観測を開始してちょうど百周年を迎えました。これを記念して、去る平成二五年一月十二日記念講演会が石岡市中央公民館にて開催されました。

講演題目

生きている地球
ー地震と共に生きるー
吉川　澄夫（地磁気観測所長）

磁石は北を指す？
ー地磁気と地球中心核のはなしー
清水　久芳
（東京大学地震研究所　准教授）

南極と北極のオーロラと地磁気
佐藤　夏雄
（国立極地研究所　特任教授）

地磁気観測所百周年記念行事の一環の地球電磁気地球惑星圏学会CA研究会の行事もありました。

一月九日　茨城県石岡市柿岡
地磁気観測所の見学会

一月十日　ポスター発表
本会会員の辻本元博氏のポスター発表がありました。
〈題名〉今道周一初代所長の伊能時代の等偏角線図に付いての見解と国宝伊能忠敬「山島方位記」の解析と活用の現状。（M）

磁性材を使用しない観測施設
高性能な磁力計が設置されている

右写真
上部はプロトン磁力計で地球磁場の強さを測定する装置である。
下部は磁気儀で地磁気の向き・方向を測定する装置である。

地磁気観測所本館　大正14年築

観測所内のデータ処理室

今年も 日本一早い日の出 ニューイヤーコンサート

コンサートは一月一日（火）午後一時より銚子市青少年文化会館大ホール開催されました。

主催したのは銚子市／日本一早いニューイヤーコンサート実行委員会。

横山俊朗さん率いる十五人の「アンサンブル・サンライズ」による室内楽団で総合プロデューサーは伊能研究会顧問の柏木隆雄さんです。

初回の昨年は日本一を確実に実現するために午前十時開演でしたが、今年は午後一時の開演となったことにくわえ、市制施行八十周年記念事業の一環として無料であったこともあり、昨年に比べて入場者は倍増しました。（M）

「伊能忠敬銚子測量の碑」建立を目指して

宮内　敏

一昨年より銚子に伊能忠敬測量の碑を建立すべく、伊能研究会の渡辺名誉代表はじめ多くの方々の御協力を得ながら、本会会員で銚子市議会副議長の工藤忠男氏と共に活動を進めてきました。

現在、市制施行八十周年記念事業の市民提案事業に応募して実現を目指しています。

◎ 提案の概要は次の通りです。

（事業名）

伊能忠敬の銚子測量を顕彰する事業

（事業の内容）

一、犬若岬付近に「伊能忠敬銚子測量記念碑」の建立

二、「完全復元伊能図フロア展」の開催

（経費概算）　省略

（一の提案理由の抜粋）

伊能忠敬隊は第二次測量の一八〇一年八月二六日に来銚し九日間に亘り長期滞在した。

第一次測量の反省から第二次測量では測量作業の改革が行なわれた。

この改革の有効性が銚子市域の測量で実証され伊能測量の標準となった。

当地は富士山、筑波山、日光の山々を観測できる東端の地で、これら山々の方位を測量することで測量の精度を確認し測量方法を確立した。

伊能忠敬は犬若岬から富士山の方位を測量することに拘り九日目にやっと叶った。その喜びを測量日記に「・犬若岬に慶助富士山を測る・」と記している。その悦知るへし・」と記している。

長期滞在となった銚子に、佐原から船で大勢の親類縁者が見舞いに来ている。

全国に多くの伊能忠敬関連の碑があるが銚子は「測量の碑」を建立するに最もふさわしい場所と考える。

犬若岬を含む周辺の地域は日本ジオパークネットワークの登録を目指してる。（昨年十月銚子ジオパークが認定されました）

伊能測量術確立の場所銚子は銚子ジオパークの貴重な文化遺産である。

銚子の自然遺産や文化遺産が学習の場として、観光資源として活用されるなら、地域の活性化に役立つ。

香取市を中心に「伊能忠敬ＮＨＫ大河ドラマ化をめざす会」が立ち上がり積極的に活動をしている。

本事業は時機を得ていると思われる。

（その他）　省略

（提案者）　宮内　敏

この提案の一つ「伊能忠敬銚子測量記念碑の建立」が実現する運びとなりました。

この事業は市との協賛事業ですので費用の全額が市からでるわけではありません。近々に市民を実行委員長とする実行委員会を立ち上げ対応していくことになります。

建立場所は当初犬若岬付近を計画していましたが、県有地、市有地、民有地と地権が複雑に入り組んでおり、また、景観条例、海岸保全地域などと規制があり、最終的に決まるまでには紆余曲折がありました。

予定地は景勝地である屏風ケ浦近くのマリーナ海水浴場の海岸の一角（市有地）に決まりました。

マリーナ海水浴場の夕日

◎ 市民の理解を得るための活動

銚子は伊能忠敬の出身地佐原の近隣市ですが、忠敬に対する意識は高いとはいえません。

伊能忠敬が銚子へ来たことすら知らない人がほとんどでした。富士山の方位測量をした犬若に出向いても、この事を知っている人は皆無です。

このような状況下、理解を得るための活動をしています。

一昨年の活動

銚子駅前近くのセレクト市場で講演会を二回実施しました。

二回目の講演会は、銚子中心市街地活性化研究会会長の川津光雄氏の協力を得てインターネットのライブ中継を ustream で行いました。

地元「銚子テレビ」でも放送されました。その他、ロータリークラブ他三カ所で講演会を実施しました。

昨年の活動

地元紙「大衆日報」の協力を頂き伊能忠敬講座を全紙面一頁を使い、毎日曜日十五回に亘って連載しました。

またＮＨＫ・ＢＳ歴史館「伊能忠敬」の模擬測量風景のビデオ撮りも一面で取り上げてもらいました。

発行部数は銚子を中心に六千部程ですが地元に密着していますので、かなりの効果がありました。

十二月は、千葉県立東部図書館（隣接市の旭市）での講演会、その他三ケ所で実施しました。

以上の活動を通して、少しづつですが市民の理解が深まってきていると感じています。

今回の市民提案事業が認められるに一役果たしたかもしれません。

今後とも会員の皆様のご支援をお願いいたします。

出版物紹介

「近世日本の北方図研究」 高木崇世芝 著

北海道出版企画センター刊
B5版 327頁

柏木隆雄

札幌市在住の当研究会会員の高木崇世芝氏の長年にわたる古地図研究の成果が出版物となった。

蝦夷図、松前図等の北方図に比重を置きながら、伊能図、間宮図、松浦図等を経由し、明治の官板実測図に至るまで、わが国の北方図の歴史を調査探究し、時代背景と併せて実証的に記述したこの類を見ない大著を私もさっそく購入した。

口絵の数葉の彩色図の美しさに先ず息をのむ。その中の一枚、大宰府天満宮所蔵の蝦夷嶋図は元禄九年の作図である。

また、松浦武四郎自筆の蝦夷新図は、蝦夷本島に加えてカラフト島、千島列島を図化し、版上に夥しい凡例が記されている。

著者は、北方図を「収集図」と「伝来図」の二つに大別している。「収集図」は、図書館、博物館などが、歴史資料として収集したもの。「伝来図」は、諸藩または藩主の旧蔵書等であるとし、北海道内に現存する古地図は、その殆どが「収集図」であり、藩制が確定していた東北以南の古地図は、大名、藩主等の収蔵品からの「伝来図」が圧倒的に多い、と考証に基ずく記述をしている。この区分の仕方は、理解を深めるうえで役に立つ。

本書に掲載されている図版は、数えてみると128枚。その全てに出自と所蔵先が付記されている。本文では、それらの地図がいかなる時代背景に基ずくものか、作図に関する詳細な記録ともに解説がなされていて、さらに各章の末尾には「注記」を設けて出典を明らかにしている。

記述は章を進むに従って、北方図に限らず「新訂万国全図」から、「官板実測日本地図」の出版にまで及ぶ。

第三章は「新訂万国全図」である。この図が近世日本における科学史や地図学史のうえで極めて重要な位置にあると指摘し、作図の計画前後から銅版図として完成し幕府に上呈されるまでの経過を年表風に論説している。

ロシアの執拗な交易の要求と辺地への威嚇、外国船の度々の海域侵犯に、幕府は危機感を募らせた時期であり、世界情勢の把握のためにも正確で詳細な世界図が必要であったと、歴史の背景にもむすびつけた記述をしている。

巻末に掲載された「近世日本の北方図関係年表」は まさに近世日本の地図作りの歴史の凝縮。これもまた貴重な資料となるであろう。

著者の出版に至るまでの調査探究は50余年に及ぶと聞く。英知だけでは成し得ない努力との結晶は、伊能忠敬の業績に通じるものである。

新入会員自己紹介

市川美津夫さん（　長野県　）

始めまして。私の生まれは長野県の北部、中山道追分宿より越後高田宿に抜ける北国街道の福島宿です。三八年間機械設計屋として過ごし、定年少し前に家業の果樹農家を継ぎ、六一歳の現在に至ります。

三年前に「中山道を歩く」の著者の岸本豊先生にお会いして、伊能忠敬公が内陸部の長野県を測量されたことをお聞きし、とても感動しました。　それから長野県内の測量ルートや測量日記を見ました。また「天と地を測った男」等の本により、伊能公の人となりを知り、そのファンとなりました。

今年より、伊能公が歩かれた街道を忠実に歩く事を目標に「東北信（信州の東北部の意味です）の街道をたずねる会」を立ち上げ、歩き始めました。

本会への入会動機は「伊能公の事を広い視野でもっと知りたい」と思ったからです。まだかけだしの私ですが今後ともよろしくお願いします。

田中　良一さん（横浜市）

木谷ウォーキング研究所
常務理事

会員便り

三木敏明さん（姫路市）より

昨十月末　新潟県の糸魚川へ行き姫川を見てきました。どんなのか一目見たかったので遠征しました。

一番下の橋上から撮影しました。海岸までは五百メートルくらいでしょうか。渇水期なので川巾三百メートルほどに対し流れていたのは五十メートルほど、一寸物足りなく感じましたが、急流ではありました。　写真でわかっていただけると思います。川上に新幹線が建設中でした。来年には開通するでしょう。

事務局からのお知らせ

平成25(2013)年度会費納入のお願い

当68号に会費納入用の郵貯銀行払込手続票を同封いたします。　年会費　6000円　です。
お振込みをよろしくお願いいたします。
郵便振替口座番号　　00150－6－0728610
加　入　者　名　　伊能忠敬研究会
（通信欄にご近況などお書き下さい）

●２５年度**総会を６月９日（日）**に予定しています。

議題；役員改選・忠敬没後200年記念事業の提案など

追って詳細はご連絡しますが、多くの会員の参加をお願いします。

～訃報～

石井　千寿子さん（須賀川市）

二〇一二年一一月ご逝去とのことです。土地家屋調査士で、研究会設立当初からの会員でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

図書紹介

『近世日本の北方図研究』
購入希望者は出版元に直接お申込み下さい。
発行所　北海道出版企画センター
〒001-0018　札幌市北区北18条西6丁目2-47
電話　011-737-1755　FAX 011-737-4007
定価　9,400円+消費税

伊能忠敬知っ徳講座
六回シリーズが終了

伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会主催（本会員の木内志郎氏が会長）の「知っ徳講座全六回シリーズ」は去る一月十三日の回をもって全て終了しました。

第一回　四月二九日　佐原中央公民館
◎伊能忠敬と測量（地図）
講師　星埜由尚　本会代表理事

第二回　六月十七日　川の駅水の郷さわら
◎伊能忠敬と五人の女性たち
講師　渡辺一郎　本会名誉代表

第三回　七月十五日　佐原町並み交流館
◎伊能忠敬を育てた町佐原
講師　酒井右二　郷土史研究家

第四回　九月三十日　東京富岡八幡宮婚儀殿
◎伊能忠敬を育てた町　江戸・深川
講師　加瀬英明　TBSブリタニカ百科事典初代編集長

第五回　十一月四日　佐原町並み交流館
◎伊能忠敬を生んだ時代
講師　鈴木章生　目白大学社会学部教授

第六回　一月十三日　佐原中央公民館
◎大河ドラマと町おこし
講師　角田光男　東京MXTV コメンテーター

本誌『投稿要領』一部改訂
本文活字の大きさが10ポイントになりました

前号（67号）で「原稿の作り方」を掲載したところですが、その後会員の方から「文字を大きくしてほしい」との要望がありました。

先例を踏襲してこれまで本文は9ポイントの明朝体を使っていましたが、確かに編集者自身も（年のせいとは考えたくありませんが）小さい字が見えにくく、編集作業にも苦労していたところです。

早速担当者で相談し、本号より1ポイントあげて　ポイントを基本とし、行間もなるべくあけて読みやすくしました。編集の都合上、すべての記事をこの規格に統一することは出来ませんが、なるべく工夫して読みやすい誌面にしていきたいと思っています。

これに伴い、1ページに入る標準文字数も、下のようになります。

- **グリーンとオレンジの天帯のページ**
  - 3段組
  - 1段；22字×32行＝704字
  - 1ページ；2,112字
- **イエローページ**
  - 4段組
  - 1段；15字×32字＝480字
  - 1ページ；1,920字

割付用紙は次ページを拡大コピーするか、下のURLからダウンロードしてください。

- **割付用紙（3段組）ダウンロードURL**
  https://dl.dropbox.com/u/59206159/INOHJ-A4-3.pdf
- **割付用紙（4段組）ダウンロードURL**
  https://dl.dropbox.com/u/59206159/INOHJ-A4-4.pdf
- **原稿整理カードダウンロードURL**
  https://dl.dropbox.com/u/59206159/INOHJ-ContC.pdf

編集部では今後も、可能な限り会員のみなさまのご意見を反映させつつ、読みやすく、内容豊富な会誌にしたいと思っています。どうか、ご協力ください。（編集部）

●「原稿整理カード」について

投稿する際に、左のカードに記入したものか、同様の内容を記載したメモを、原稿と一緒に送ってください。編集の目安にさせていただきます。

原稿整理カード　受付　／／

・題名

・著者　　著者ふりがな

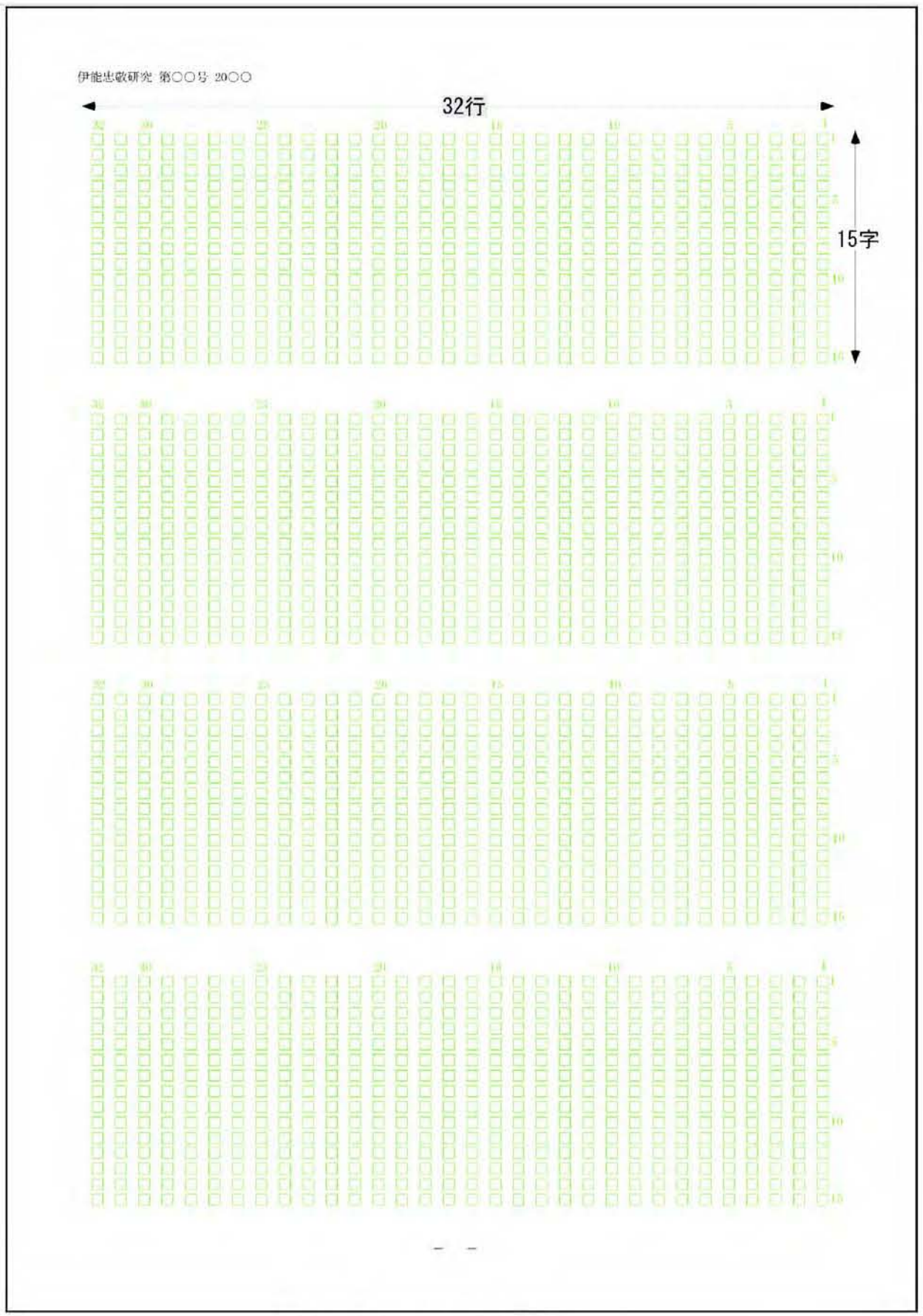
・著者連絡先　e-mail　FAX

・原稿の区分（希望のカテゴリーに○をして下さい）
（　）論文・調査・研究報告など
（　）紹介記事・ノートなど
（　）各地のニュース・活動報告・お知らせなど
（　）その他（「編集者にお任せ」も含む）

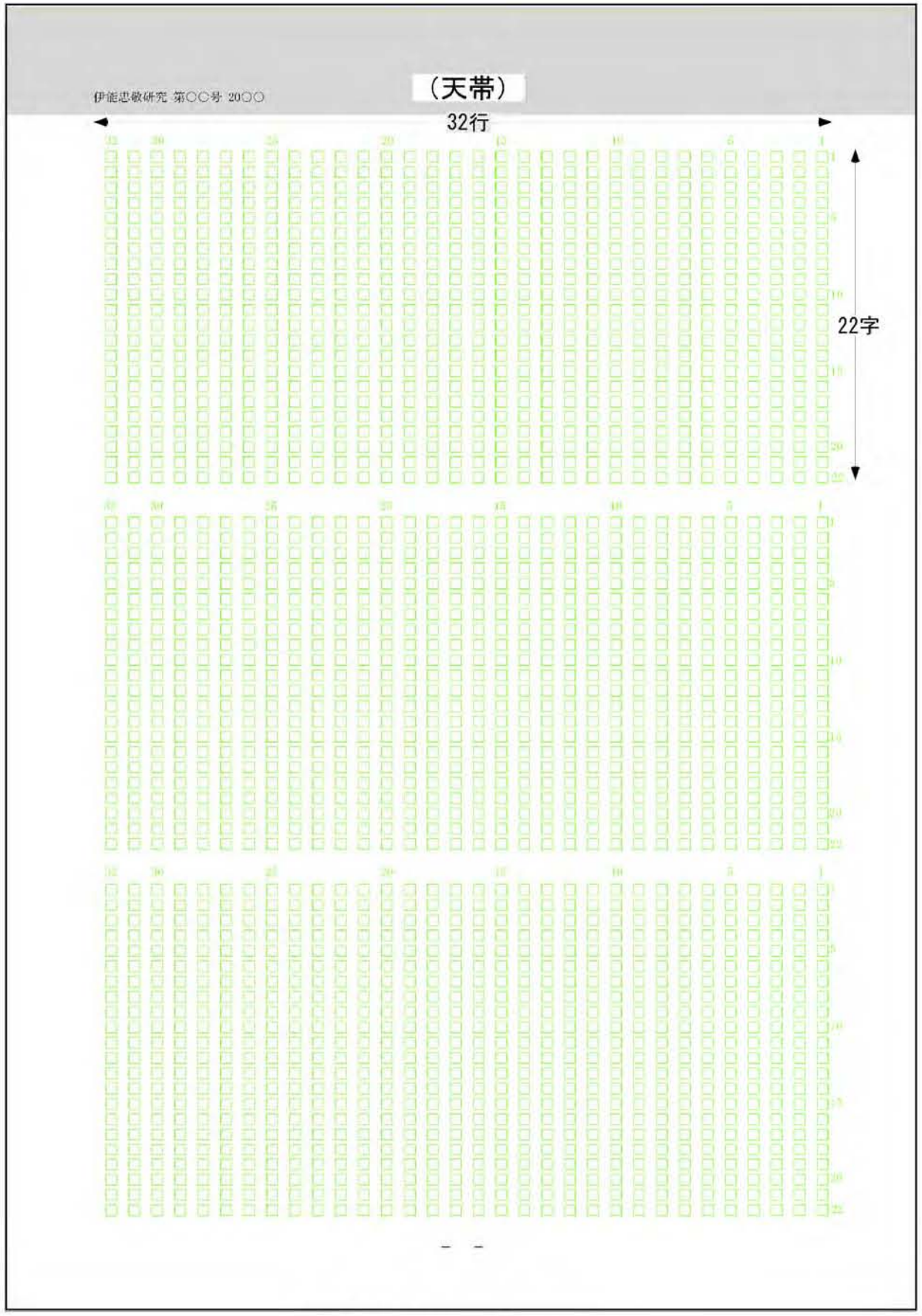
・刷上り見込頁数　　頁　内写真　　枚，図表　　枚

・割付（どちらかに○をして下さい）
（　）割付メモ参照　　（　）編集者にお任せ

・その他希望など



割付用紙（４段組頁）



割付用紙（３段組頁）

『伊能忠敬研究』投稿要領（本号より一部改訂＝赤字部分）

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割してくだださることもあります。

②原稿のかたち

・**本文（テキスト）**　原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・**写真**　一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

＊印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。わからない場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・**図**　写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・**電子メール添付の場合**　inohken_kaishi@koalanet.ne.jp

・**郵送の場合**　〒153-0042　東京都目黒区青葉台4－9－6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。
①会報の発行　研究成果・会員活動情報など　原則として年四回発行
②例会・見学会の開催
③忠敬関連イベントの主催または共催
④その他付帯する事業

三、入会方法等　入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地
〒153-0042
東京都目黒区青葉台4－9－6
日本地図センター2F
伊能忠敬研究会
電話・FAX　03-3466-9752
事務局メール　inohken@ae.auone-net.jp
郵便振替口座　〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典
http://www.inopedia.jp/

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料
http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料
http://www.tt.rim.or.jp/~koko

編集後記

◇本号から本文の活字を大きくして一〇ポイントにしました。少しは読みやすくなったでしょうか？今後も会員のみなさまのご要望をふまえて、親しみやすい会誌にしていきたいと思っています。ご協力ください。◇また、本号は編集部のMさんに編集をお任せしました。編集部メンバーもだいぶDTPに慣れて、ローテーションで毎号の編集を担当できるようになりました。あともう一人、「若手」のスタッフがほしいところですが・・・。◇それはともかく、本号は会員のみなさまからの投稿によって、かなりバラエティに富む内容になったのではないかと思います。測量隊は全国各地を巡っていたのですから、新しいテーマや史料はまだまだあちらこちらに埋もれているはずです。伊能忠敬の人となり、業績、時代背景、関連史跡、等々、様々な視点から、今後も積極的な投稿や情報提供をお願いいたします。（K・T）

「伊能忠敬研究」第68号 © 2013年2月20日印刷 2月28日発行　編集 高安克己　発行 星埜由尚
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F　伊能忠敬研究会　Tel & Fax 03-3466-9752